

其十 武漢の游。黃鶴樓。大別山。伯牙臺

漢口に在りては、漢報館の宗方小太郎氏を東道とす、然るに九日より十日に至る三日間は、淫雨に阻てられて、游觀を縦にするに由なく、空しく館上に蝮屈して、館中の岡西門、篠原牧東、清藤香宇諸氏と舊を語り新を話するに過ぎず。十二日に至りて、天始めて半晴を放ち、江上の舟點々數ふべし、宗方、岡、篠原三氏に件はれて、渡舟を招商局の棧頭に求め、溯ぼりて南に向ふ、岸上に扶桑宮の祠あるを見る、蓋し我が金毘羅神社を移し祀れる者にして、其の航業者の信仰する所と爲るに由り、支那の地、往々之を祀る者ありといふ。八百萬神は衆し、延喜式の名神すらも三千百三十二座ありと聞けるが、其の異域に崇祀せらるる者、惟だ此神あり、吾はいたく象頭山頭の神威いやちこなるに感じぬ。漢水の口に到れば、げに萬檣林立の虚しき形容詞ならざるは、此地の實景にて、さながら修竹

の密生したらんが如く、橋外の市屋之に蔽はれて見えず、こは多く漢水を溯りて、襄陽地方に往來する船舶にて、其外湖南洞庭湖あたりへ通ふ船、三峽を溯る船等、各其の水勢と載貨との種類異なるに從て、形状も亦同じからず、其の碇泊の碼頭をも各別に定めありといふ。中にも三峽を溯る船は竹を割いて編みし牽繩のいと太やかなるに目を驚かし、索綯ふ人は數丈の高き小櫓の上に坐して、竹片を長く垂れつゝ編もて行くさま、一種の奇觀なり。大別山の盡頭なる晴川閣下より折れて、東に向て江を絶ち、武昌府の黃鶴樓址の下に達して船を棄つ。黃鶴樓址は、黃鶴山の江岸に盡きて、黃鶴磯と爲る處に在り、西は漢陽の大別山に對して、大江を中に挟み、江の幅一海里許り、濁流滾々として、長天野に低るゝあたりに盡き、鳳凰山は黃鶴山に並行して、皆府城内に在り、明月、俞家諸湖は、城の東南を繞りて、遠近相屬し、或は大江に通じ、形勢の雄壯古より稱して、巨鎮とするに負かず。漢陽門より入り、石級を拾ひ、

乞巧の五月蠅く附き纏ふに困しみ、樓趾を觀て、後面の茶樓に憩ふ。按ずるに汪容甫が畢沅に代りて作れる黃鶴樓銘の序に、  
 江、峽を出で、東して巴邱に至り、沅湘二水入る。又東して夏口に至り、漢水入る。是に於て西は岷山より、西南は牂河より、南は桂嶺より、西北は嶓冢より、五水經る所、天下に半ばして、皆是に滙し。以て海に注ぐ。而して江夏の黃鵠山、其の衝に當り、江其の三面を環り、再び折れて而して後東す。故に地形險と稱す。縣山に因りて城と爲す。山の西に磯あり、江中に起る、石立つこと植うるが如く、水激して逆行すること數里形に於て尤も險とす。其上に樓を爲り、威な山に取りて以て名と爲す。孫吳より始まりて、鄒氏之を著し、齊梁二書並に其蹟を載す。後に樓の興廢、史能く紀するなし。乾隆元年、大學士史文靖、湖廣を總督し、乃ち其制を更めて、山より以上直立すること十有八丈、其形正方にして、四望一の如し。高壯闊麗、其の山川に稱ふ、年を歷ること六十、堅密新なるが如し、

其下は則ち水師蒙衝在り、歲ごとに十月を以て都試す。吳戈犀甲、川を蔽ひ日に耀く。江以西は商旅百貨の湊まる所、道路晝夜行くに休著せず。籍戶八百萬、公私舟楫、櫓を列ねて林と成し、南北二郊、原隰沃衍にして、禾黍彌望、高山深林の蔽なし。

といひ、銘詞に、  
 樂哉斯邱、曾城之顛。上標崇觀、下俯大川。柱天不傾、障江欲迴。山增比岳、水激成雷。都會是程、荆蠻斯控。光映烏帑、勢吞雲夢。四野底平、八窻洞屬。登若馮虛、望惟極目。

といへる、よく其形勝を道盡せり。但だ今は樓十五年の前に燬けて存せず、其の舊規として傳ふる照真も、圓形の三層樓にして、飛簷翔るが若く、甚だ趣あれども、乾隆の昔十八丈の高樓にはあらず、蓋し乾隆興築の樓は、髮賊の亂に焚け、後かの三層樓を改築せしも、此も亦火に遭ひてより、今に再興に及ばずとぞ。一去して還らざる者、惟黃鶴のみならず、晴川は

閣の名に留まりて、歸然として對峙し、鷓鴣洲は、江心より江北に移りて、漢陽府南に附着し、目を擧ぐれば山川樓觀も亦興衰舊に非ず、汪容甫又云く、

其れ逐臣羈客、高きに登りて賦を作るあらは、物に感じて端を造し、興るべく怨むべし、丹邱の羽人、雲水栖遊、其地に徜徉せば、均しく以て文采を發抒して、故實を増成するに足る。

吾れ此の二者を追ふ能はざるも、豈に竟に慨然として千古の歎あらざるを得んや。

黄鵠山を下り、其の北面より繞りて、南樓より西に出づ、南樓は又白雲樓と名く、宋の元祐間重建の事あり、而かも庾亮が登りし南樓には非ずとぞ、市街の間より自強學堂に抵る、總督張之洞の建つる所にして、規模頗る宏壯、本邦人の教師三名、こゝに備聘せらる、即ち古山、根岸、柳原三氏なり、其の授業の模様など聞きて、こゝを辭し、更に農務學堂に抵る、學堂は

黄鵠山の脈絡たる蛇山の麓に在りて、演武廳の廣地に隣れり、學堂の總辦は汪鳳瀛氏にして、張之洞の有力なる幕僚なり、こゝの養蠶部には峯村氏等二名の本邦教師あり、これより南方に當りて武備學堂あり、翻譯官として大原大尉等數人の本邦人こゝに聘用せらる、かゝれば武昌府在住の邦人は大抵教師にして、この外には西本願寺の原田了哲氏、三井物産會社の二留學生あり、余が漢口を辭する日、更に西本願寺の野邊氏の來りしあり、地は固より商業の要地にあらざれば、一人の商業家あるとなし、晚景又漢陽門外より舟を賃して、漢口に還る。

翌十三日は又宗方岡、清藤、篠原諸氏に伴はれて、漢陽の大別山に上る、先づ小舟にて江岸に沿て、汭、晴川閣下に至り、舟を棄つ、閣下巖石擡立、極めて瑰奇とす、之を烟波石と名け、こゝの浦を烟波江といへる、は崔灝が詩に因めるなるべく、其の太だ泥めるは笑ふべし、是れ源氏物語ありて、須磨明石に之に因める名所を生ぜるに等しく、いづれの邦にもあり勝

なる俗習なり。閣は明の時知府范之箴より建てられ、大別山の江岸に盡くる頭に立ちて、景致頗る壯なり。守者に例の物取らして登臨し、それより峰つたひに大別山に上る。水經注に所謂魯山にして、又翼際山と名け、俗に龜山といふ。長江圖說の著者は、此山を大別に非ず、大別は宜しく黃麻北境の大山たるべし、龜山を指して大別とするは、唐人より始まるべし。之を論ずること頗る詳かなり、信ずべきに近し。同著者は又今の漢口が禹蹟の漢口に非ずして、即ち夏口たり、武昌を夏口として、南岸に屬するは、古時の眞に非ずとし、古の漢口は今の漢口より東三五十清里の間に在るべしと論じたり。此等の論は地理の變遷に關して頗る興味多き者なれども、こゝには及ぶに違あらず。

山の北面は有名なる漢陽鐵政局にして、規模の壯大、眞に驚くべく、廠屋連棟、山と漢水との間に填ちて其の域ほゞ山の長さと同じく、月湖の勝も、其の半ばは局の域内に取り込められたり。山上より望めば、沃衍の野、

沮洳の澤と相間りて、四周は天直ちに野に接し、長江の來路、去路、杳として無際に入り、江漢を挾んで鼎足の形を爲せる武昌、漢陽、漢口の三大市、市屋櫛比、繁盛の程も思ひ知られ、所謂八省の會、現在將來の大市場、こゝを出でじと思はれたり。山盡くれば、則ち月湖、殘荷、僅かに莖を存して、水も亦涸れ、舟行の路、泥濘の間を劃せり。湖中に伯牙臺あり、伯牙琴を鼓し、鍾子期之を賞せしは、果して此處ならんや否やは、審かならざるも、其の境の清幽なる、峨々洋々の音を聽かんには、相應しかるべく、覺えたり。小憩せる室中には、古琴の摺本、數幅を懸けたるは、處がらとて一しほに床しく見ゆ。臺を出で、月湖に舟に棹さして行けば、湖を横ぎれる堤上に、苦小屋の多く列ねらるゝは、以て貧民の多きを知るべく、さる里門に郎官里といふが見えたるは、太白が郎官湖のふることと思ひ出でらるれど、誠は郎官湖は、漢陽府南に在りて、それさへ明の正徳の比よりは、填淤し溝域に同じくなれりとなり。再び舟を棄て、行くこと數十步、五聖廟南岸

より、又舟を雇ひて漢水を下り、かの林立せる帆檣の間を過ぎて、漢口に還る。  
汪容甫が畢沅に代りて作れる漢上琴臺の銘は、亦能く伯牙臺の勝を紀して遺憾なし、其文に云く、

漢上琴臺之銘并序

自漢陽北出二里有邱焉。其廣十畝。東對大別。左界漢水。石隄亘其前。月湖周其外。方志以爲伯牙鼓琴鍾期聽之。蓋在此云。居人築館其上。名之曰琴臺。通津直道。來止近郊。層軒累榭。迥出塵表。上多平曠。林木翳然。水至清淺。魚藻交暎。可以栖遲。可以眺望。可以泳游。無尋幽陟遠之勞。靡登高臨深之懼。懿彼一邱。實具二美。桃華淶水。秋月春風。都人冶游。曾無曠日。夫以夔襄之技。溫雪之交。一揮五弦。爰擅千古。深山窮谷之中。廣廈細旃之上。靈蹤所寄。爰事刻舟。勝地寫心。諒符元賞。余少好雅琴。輒誦操縵。自奉簡書。久忘在御。弭節夏口。假館漢泉。峴首同感。桑下是戀。於以濯足滄浪。息陰喬木。聽漁

父之鼓柅。思游女之解佩。亦足高謝塵緣。希風往昔。何必撫弦。乃移我情。銘曰。

宛彼崇邱。於漢之陰。二子來游。爰迄於今。廣川人靜。孤館天沈。微風永夜。虛籟生林。冷冷水際。時汎遺音。三歎應節。如彼賞心。朱弦已絕。空桑誰撫。海憶乘舟。巖思避雨。邈矣高臺。歸然舊楚。譬操南音。尙懷吾土。白雪罷歌。湘靈停鼓。流水高山。相望終古。

首より曾て曠日なしといふに至るは、今に至りて實景甚たしき文飾なし。而して冶游の客は現に亦絶えず、余が遊びし日も、靚粧炫服の士女、ここに集まりこゝに嬉するを睹たり、又その夔襄之技、温雪之交、數句は、以て伯牙琴を鼓するの必ずしも此地と固着すべからざるを道ふ者、銘詞の朱弦已絶、空桑誰撫、數句に至ては、能く遺音を無聲に聽く者と謂ふべし、余は汪容甫が文藻能く無何有の勝蹟として價を増さしむるを愛す、煩を忍で此に引く所以。

十四日には風頗る勁なり、此日原日了哲氏を武昌に訪ふの約あり、宗方氏等も亦兩湖書院山長梁氏の招きに赴くを以て、同じく舟を賃せんとす、波浪高うして、小舟の能く航すべきに非ず、乃ち先づ小舟に頼りて、龍王廟前に至り、移りて官渡船に搭ず、官渡船は帆を用ひて之を行形も亦頗る大なり、然るに其の江心に出づるや、風浪の掀翻する所となり、枯葉の空に舞ふが若く、乗客皆船中の諸部を緊握して、纒かに顛跌を免かる。舟行くこと箭の如く、頃刻にして對岸に達す、岸上より回顧すれば、惡浪洶湧、黃濁の流激して白雪を噴く、常け往來の船江上に旁午せるも、今日には殆ど隻影を見ず、官渡の帆船すら、濤間に昂低して、險言ふべからず、古人が天の南北を限る所以と歎ぜしも、以なしとせざるを明らめたり。武勝門より入りて、原田氏が花園山の寓を訪ひ、午餐の饗を受け、辭して崇文書局に至り、書數部を購ひ、臘脂山鳳凰山を踰え、復た農務學堂に汪鳳瀛氏を訪ひしも在らず、こゝにて宗方氏に會し、歸舟を官渡に求むれば、

風浪更に猛に、舟殆ど覆らんとする者三數次、舟人巧に逆風を利用し、多く時を費さずして龍王廟前に着しぬ。此夜大坂商船會社の大井川丸に搭じて、漢口を發し、南京に向ふ、月明畫の如く、而して風濤猶已まず、舟搖々として洋中に在るが若し、此行元と必ず溯りて、宜昌に抵らんと欲す、其の宜漢間、漢滬間並に滬崎間の船便、接續太だ逼るを以て、遂に之を斷念するの已むなきを致せり、此地の名物たる張之洞が事業人物に就ては、聊か言はざるべからざるものあり、當さに別に之れを敘すべし。

附記

張之洞に關する事は第十二最後の筆談の項を参照すべし

其十一 赤壁。金陵の游。鎮江

黄州は夜半過ぎに通過すべき豫定なりければ、赤壁は今雞窠湖と湖外の洲とに隔てられて、江を距ること數清里なりと、長江圖説に見えられたる。坡游の昔の床しくて、甲板に出で、見渡せば、月色清瑩、霜氣天に滿ち、北岸の黄州は、樹色朦朧として、燈火其間に點々、南岸は武昌の西山水霧の中にも、髣髴として認め得べく、赤壁は早く已に上流に在りて、其の方角さへ知れざりき、此夜は清曆十月十二日に當り、坡公が後游に先だつこと四日なり。

讀史方輿紀要に曰く、江漢の間、赤壁と言ふ者五あり、漢陽、漢川、黄州、嘉魚、江夏なりと、江夏と漢川との赤壁は、周郎にも蘇子にも關係なければ、姑らく舍く、周郎が曹孟徳を敗りし處は、異説頗る紛々として、孰れをそれと定め難し。讀史方輿紀要は此類の著述中、最も有力なる者にして、圖經

を引て、周郎が赤壁を以て嘉魚縣西七十里に在りと爲せども、大清一統志には、同じく嘉魚縣に在りとして、而かも其の西南とするは、元和志の誤を承けたるなりとし、縣の東北江夏縣と界を接する處と爲せり。案ずるに水經注に江水は左、百人山、南に逕し、右赤壁山、北に逕す、昔し周瑜が黄蓋と魏武の大軍を詐はる處なりとあるは、當に嘉魚縣の東北を以て正しとすべければ、此の二者に於ては、一統志の記する所を以て眞に近しとす。然るに長江圖説は、又別に一説を出して、従前以て誤と爲せる坡游の赤壁を以て、即ち周郎が赤壁なりとし、東坡誤らずと斷言し、反て水經注を以て誤と爲せり、今之を裁斷せんことは、朝夕の談にあらざれば、此には及ぶに遠ならず。

十五日晨に起くれば、復た武穴鎮に在り、天は半晴を放てども、北風膚を劈くが若く、久しく甲板に居るべからず、九江を過ぎ、湖口を過ぎ、廬山の山容、前日に比して更に奇なるを覺ゆるも、諦觀するに縁なかりき。昨日

武昌の游渡船中に在りて、ただ寒かりしが爲か、小孤馬當を過ぐる頃、  
 りや、身軀の和を失ふを覺えたれば、帶る所の藥を服して、暫らくは船  
 室に寝ねしが、晚五時、安慶府を過ぐる頃、目覺めて、船窓より眸を放てば、  
 大塔江岸に屹立して、市屋城壁の内、外に填充し、其後方には岡巒相屬し、  
 夕暉に映じて、紫なるを見るのみ。此夜も月明らかなりしも、起き出で、  
 觀るに意なく、空しく被を擁して臥しぬ。  
 翌十六日朝は、蕪湖を過ぐ、四合山、東西梁山は、舊相識の如く、相迎へ相送  
 りて、前に比すれば、更になつかしさを増したり。此より下れば、太平府、此  
 たびは船、泰興洲の東を航したれば、采石磯前を過ぎたれど、折しも船室  
 に在り、書を讀みしかば、其の出で、見たる時は、遙かに艫の方に當りて、  
 峭壁の江を壓するがそれならんと推せられしのみ、されば犀角を燃し  
 て、水中の怪を照す手数は、幸にしてこれが爲に省けたり。更に下れば、烈  
 山洲江中に聳ゆ、晋の桓冲が建康を發せしとき、謝安之を溧洲に送れり

といひ傳ふるは、即ち此の烈山洲なりとぞ。金陵に近づくに從ひ、山川の  
 漸やく壯なる心地して、小三山、犢兒磯、三山の諸勝は、取次に眸中に入り  
 來り、北岸の烏江鎮、項王廟は、岸を距ることや、遠く、このわたりの大江、  
 廣さ概ね一海里より二海里に至れば、指點して望むべくもあらず。乍ち  
 に見る南岸の連巒、城壁と參差、隱見して、鍾山、嶽、其の後邊に鎮するに、  
 問はずして、其の金陵たるを知る。即ち船を下りて、下關に登岸すれば、農  
 商務省の留學生たる平岡、杉山、二氏の、驢に騎して、余を迎へられたるは、  
 嬉しかりき。  
 下關より儀鳳門に入り、張之洞が甲午乙未の役、劉坤一の留守をあづか  
 りし際に、修築せる馬路を行くこと、我が二里に近かるべし、かくて總督  
 衙門に近き科卷の東本願寺學堂に抵り、暫らくこゝに宿りを求めぬ。こ  
 の馬路は、砥平にして、細柳路を夾さみ、樹間僅かに二三尺、皆根より三尺  
 ばかりの處より、枝を生じたれば、時は已に孟冬に屬し、枝葉蕭疎を免れ



ざるも若し春初卉木萌生の期にも際したらんには定めて煙るが若き  
 嫩縁行人の馬を驕らしむるならんと想ひやられたり。巡路工夫は日々  
 修理と掃除とに怠らざれば、こゝ丈は上海などに似て、我帝都にも増し  
 たるべく見えたり。南京が帝都の實を失へること、四百餘年加ふるに近  
 歳長髮賊の大亂を経たれば、城内は荒れに荒れて、馬路の兩側に人に  
 家の聯續せるは罕れに、田疇竹樹犬牙交錯して、村落の間を行くが若し  
 本願寺に至る一路、唯だ鼓樓の衢に當りて、壯大空を衝くのみぞ、往時帝  
 都の名残なるべく覺えて、其の附近には北極閣の寂しげに立たる下に、  
 西歐宣教師の住宅特に目立て見えたり。聞く城内の市街の形を爲せる  
 は全面積の四分の一には過ぎざるべく、城の内外なる民屋を合せたり  
 とも城内の三分一を填つるに過ぎざるべしと、されば周九十六清里、其  
 の規模の大は、北京にもまされる大都も、現在人口十五六万を逾ずとい  
 ふ、其の荒涼想ふべし。

本願寺の學堂には、邦人教師三名にて、學徒の數は、十五六名、皆熱心に業  
 を受くるといふ。農商務省の二留學生、三井物産會社の二留學生、并びに  
 皆こゝに寄宿したれば、南京に於ける邦人の全數は、皆この一堂の中に  
 あるなり、但し余が歸途につくと引違に、東亞同文會の佐々木四方志氏  
 は、其の夫人を挈へて、南京に赴きたれば、今はこの比例も變じたりと知  
 るべし。  
 この日午下、農商務三井の留學生達に伴はれて、南京の最盛市街たる三  
 山街あたりを觀たり。科巷よりは亦半里程もあるべし、一二骨董店など  
 觀了りて、學堂に歸る。翌十七日朝は、杉山平岡二君に導かれて、孝陵に詣  
 つ。路は照心橋を渡りて、西華門より内城に徑す。内城は明の故宮の在り  
 し處にして、今は駐防八旗の居る所たり。髮賊の亂後、荒廢を極め、頽垣修  
 めず、御溝空しく流る。西安門を入れば、午門は右に見えて、過半は之を塞  
 ぎたり。裡五龍橋は僅かに存して、故宮址には、左宗棠が移建したる方孝

孺の祠廟あるのみ祠に入りて孝孺鐵鉞以下靖難の役忠義の諸木主を  
 拜し、孝孺が血石を觀て、こゝを立出で、東安門より出づ。故宮址の北方に  
 當りて、内外城の間には、覆舟山の見ゆるあり、朝陽門より城外に出づれ  
 ば、鍾山の屏顔面に當りて立ち、其の麓は高原草枯れて、古墳陵谷の間に  
 散點し、一樹の眼に遮るなく、孝陵の殘閣丹壁遙かに認むることを得  
 べし、城壁に傍て北行し、燕雀湖畔より、原間に徑して驢を驅れば策たざ  
 るに自ら馳せて、野色の曠豁を喜ぶに似たり。このわたり吳の孫權の陵  
 ありと、地志には見えなれど、それと認むべき墳隴だになし。金陵の城壁  
 は高さ五丈より七丈に至り、北京の若く扶壁はあらざれど、其の壇にて  
 圻れるが若き瓦壁は、苔蒸して黝黒に、燕雀湖に接せるあたり、湖光と相  
 映じて、一段の秀色あり。孝陵は門も失せ、享殿は僅かに基址を存して、其  
 の規模の永樂陵よりも大なりしを想はしむるのみ。陵前の明樓は永樂  
 陵と同じく甬道ありて、其の下層の高さ殆ど之に倍し、其の廣さは之に

三倍すべし、上層は屋頹れ、四壁のみ立ちて、墜瓦狼藉たり。陵前なる乾隆  
 御製の碑も、大半殘缺して、亂後の光景、悽慘を極めたり。歸途は正路に由  
 りたれば、かの十三陵と同製なる石人石獸は、半里程が間に並列して、其  
 の大きさは十三陵のに逾えなれど、其の製は較や粗なるが若し、其の前に  
 碑亭ありて、太祖功德の碑を安じたり。このわたり鍾山の連峰、東方に走  
 りて、其下は一帶の高原間々兵營あり、南方は平田千里、樹色水光、郭落と  
 斷續して、方山、牛頭山、青螺遙かに野末に浮べるさま、さすがに六代の帝  
 王州人をして蒼茫として萬古の想あるを免かれざらしむ。朝陽門頭に  
 上りて、更に形勝を縱觀して、歸りて學堂に抵れば、日亭午を過ぎたり。  
 午下一柳氏に伴はれて、三山街より鎮淮橋を過ぐ、即ち秦淮水に架せる  
 者なり。聚寶門を出づ、即ち城の南門にして、其の壁上の層樓、北京正陽門  
 の嚴整に及ばざる若くなるも、城壁規模の宏壯は、復かに之に過ぎたり。  
 門を過ぐれば、即ち長干橋南に向て通達する街を長干里といふ、報恩寺

の大磁塔は、其の壯麗なること江南無比と稱せられしも、今は存せず、里盡くれば、即ち山路に入る、雨花臺は昔法光法を説て、天花亂墜せし跡、名のみになりて、近く曾國筌が守壘四十餘日、以て金陵克復の計を回らせし址とて、兵營を頂に存せり、牛首山、方山等、金陵以南の諸山は、こゝより望むべく、金陵の内外城、烟樹參差として、孝陵明樓の遺構さへも明かに指され、臺下なる江南製造局は漢陽の壯に及ばざれども、廠屋櫛比、煤烟の間に隠見せり、兵營の側に方正學の墓あり、此より下り、長千里を横りて、劉園に至る、所謂劉は何人とも知らずして、過りしに亭榭泉石頗る趣味ありて、園の後門に一石を立て、劉公墩の三字を勒し、明の青田伯劉伯温が遺宅なるよし記したり、五百年の星霜餘澤、今に索きずして、南京城と共に存するは、めでたしと謂ふべし、城濠に傍て西に進めば、さすがに江南佳麗の地も、都は却後の寂寥、三十年にして未だ復せず、加ふるに孟冬の風色、蕭索を極めたれば、北京西郊に天寧

白雲の寺觀を尋ねし折にも似て、却て并州を望むの感なきにしもあらず、城の西南角なる賽虹橋を渡りて北に向へば、西水關にて秦淮水は城濠に合し、波穩かにして、舟船往來、往時繁華の名残を留めたり、稍や進みて西に折れ、莫愁湖に至る、湖の南岸に華嚴庵あり、勝基樓は之に聯りて建てられたり、樓は金陵克復の後、曾文正公が勝地保存に熱心して、湖の風景を復舊せる折に建てられしにて、公の遺像を存せり、庵には石刻の盧莫愁が像あり、英雄兒女、兩つながら千秋といへる套語も、此に至りて、儘生色ありて、行客をして詩思油然として動かしむ、樓よりは湖の全景を攬取すべし、湖は周數町に過ぎず、我が不忍池よりも小なるべし、柳を植て之を遶らしたれば、今は摧殘の色、風に堪へずして、物の衰れを増すに過ぎざれども、春光駘蕩の候、煙るが如く萌ゆる眺めのいかばかり美しからんと思はれて、床しき限りなり、このわたり城壁や、曲折して、清凉寺、翠微亭など、壁を越え

て見ゆる丘陵の落木の間より認められたり、一柳氏は吾が爲に指點して、かのあたりこそは古の石頭城なれと教へられぬ。こゝを去りて、石城橋にて秦淮を渡り、漢西門より城中に入り、壁の内側に傍て進み、清凉寺に至る。寺は頗る荒れたれば、直ちに翠微亭に上る。亭の四周は形勝の地なれば、兵營となりたれども、半ばは農業を以て活計とする。兵士の營門に入りしとて、誰何する者だにあることなし。亭にも藁を積み滿て、憩ふべき餘地なし。城西の野色江流、手に取るばかりにて、太白の詩に入りし三山は、げにも青天の外に落ちて見え、此のみは昔にかはらぬ眺めながら、白鷺洲は何處ぞ鳳皇臺すら今は址だになければ、更に吳宮の花草、晉代の衣冠を問ふに追あらんや。こは元と南唐の李後主避暑の地たりし由にて、山は淺けれども、今も木立物古りて、幽徑曲折、住まほしき處なり。孫權が斜月樓の遺構に上りて、再び形勝を飽觀し、下りて歸路に就き、城中とも覺えぬまでに荒れて、古墳壠畝、陵谷の間に

相雜れる中を過ぎ、袁簡齋が小倉山房の遺址、民家になれるを觀て、學堂に歸りつきしは、暝色のやゝ合する頃なりき。あくる十八日は、三井の修業生なる内田高木の二氏と、農商務の留學生なる平岡杉山二氏とに伴はれて、先づ雞籠山に上る。このあたり陳の後主が張孔二嬪と投ぜしといふ胭脂井の故址ありと聞けど、遂に探らざりき。山には雞鳴寺ありて、こゝよりは城壁を越して玄武湖を望むべし。湖は復かに莫愁湖より大にして、中に蓮萼洲、新洲等三四の洲あり、敗荷、殘柳、參差として高低し、亭榭掩映、六朝の昔も忍ばれぬ。こゝより出で、北極閣に上る。閣は明の欽天臺の故址に存する遺構の一にして、康熙帝の御書なる曠觀二字の碑は、髮賊の亂に裂けたるを、亂收まりて後つぎ合せたるが閣内に立てり。こゝらは南朝の時、臺城のありし地とて、爽塏に據て城中を眼下に見渡すべく、曠觀の名虚からずといふべし。閣の建てる丘陵の直下なる例の宣教師の宅は、西風の小樓閣、畫くが若く鮮やか

に眼に入り来る、この宅前より鐘樓に至る樓は明時の遺制にて、其の建築の壯大北京の鐘樓にも勝りたるべし、清朝になりては一大碑を其樓上に建て、康熙帝南巡の盛典をも記したり、帝は金陵に駐蹕僅かに二日なりしに、民物の盛否など北方に比べて云々せるは、あまりに儀式的なり、されど清朝の盛運を極めたりと稱する康熙の頃にてすら、粉飾太平のさまは、これにて一斑を窺ふべし。

鐘樓より故路を歸り、更に東に折れて、總督衙門の前を過ぎ、毘盧寺に抵る、現在にては南京第一の大寺なり、佛殿樓閣、回廊を以て接續され、其の數も記憶に及ばず、住持は海峰とて、眉睫に俗氣あれど、善く我等の一行を款接して、自ら一万體佛及び龍藏等を示し、庖厨の隅々まで細かに案内せり。

學堂に歸りて午餐をすまし、午後よりは復た一柳氏に導かれて、秦淮水に傍へる文廟を觀る、所謂桃葉渡は此河の曲折せる處に自せたる名に

て、今に畫舫を繋げども、岸上の青樓、何となく寂しげにて、蘇州上海あたりの繁華には似ず、文廟の近傍は蘇州の玄妙觀などの若く、見せもの小屋多く、熱鬧を極めて、我が淺草公園にも似たるべし、歸途には書肆、墨帖店などあさり、金陵刻經處とて名高き楊仁山氏を訪ひ、一二語を交へて己に佛教の議論となり、談や佳境に入らんとする際、他客ありたれば、こゝにても數種の書を買ひて、辭して出で、日猶ほ高きに學堂に歸る。

十九日は燕子磯の勝を觀んと、例の農商務三井の四君に導かれて立ち出づ、北極閣下より北に折れ、城壁に接して行くこと、良や久しく、一路磽确にして、馬行最も艱めり、得勝門より出で、幕府山の下に逕し、二三聚落を過ぎて、觀音門を出づ、觀音門は南京外郭の最北端にして、爽塏に據りて門を設け、門外直ちに急坂を下れば、突として大江の支流に濱し、眼界遽かに開き、一小市あり、即ち觀音港口にして、喧鬧殊に甚し、江に臨める小丘は、即ち所謂燕子磯にして、康熙帝がこの地名の三字を勅せる一碑

建てり磯は大江の本流とは、七里洲を隔てたれば、やゝ壯大の勢を飲くの感あるも、陸よりすれば、観音門を出で、忽ちに平衍の景致に接する處、登臨の目を放つべく、水よりすれば、巖山十二洞の奇こゝに盡きて、壓尾の危磯、直に江上に撥く、是其の勝とする所以にして、王阮亭が詩に

岷濤萬里望中收、振策危磯最上頭、吳楚青蒼分極浦、江山平遠入新秋、永嘉南渡人皆盡、建業西風水自流、灑酒重悲天塹險、浴鳥飛燕滿汀洲、

といへる者頗る其の實景を得たり、然るに金陵志に所謂磯、江石壁勢飛動せんと欲すといへるは、當さに江中より望で之を見るべければ、磯上に在ては、反て領略し難きを憾むのみ。

磯を下り流に沿て上る、磯の半面、岩石磊砢たるを見返り勝ちに遠ざかり行けば、左は巖山十二洞、右は江の支流にして、蘆荻叢生し、花飛で天を攪し、漫々雪の若く、鞍に懸じ袖を撲つも面白し、但だ路は泥濘多く、往々巖と水と相迫りて、危逕を繼て進む、巖山十二洞は石灰質の山

多年の風雨に腐蝕せられて、自然の洞窟を爲せるにて、頗る險怪なれども、蒼潤の趣に乏し、第三洞は最も大にして、祠廟巖間に嵌し、甚だ奇なれば、馬を下りて訪ひ試みつ、洞中廟ありて、之を守るは道士なるべき善なるも、それらしきも見えず、守廟の叟は乞丐にまがふべき人相なり、之より梯して巖罅を上ること、曲折數十級にして、暗うして又明らか、巖間に嵌せる廟に上り行き、更に梯して最上の廟に抵る、其窮窟と危険とを極めたるは、由て以て此地を靈にせんとするべし、其餘の諸洞、往々祠廟竹樹の間に隠見して、景致を點綴し、下關に至る間、凡そ二里餘、眺め飽かぬ心地せらる。

下關に至れば、日は闌けたり、一食店に入りて、麵を命じたるに、臭くして箸を下し難く、已むを得ず、飢を忍で又發し、疾驅して、本願寺學堂に歸り着けば、早や晩景なりき、あくる早晨には、加藤高明氏こゝに着くべき報ありとて、一柳氏以下夜をこめて、下關まで出で迎へらる、余も此夜の閑

話を名残として、あくる廿日午前は金陵を辭し、馬車にて下關に至り、こにて一柳氏等に別れ、復た天龍川丸を待ち合せて之に搭じ、上海に向て發程しぬ。

金陵より下流は、南岸の遠山近山沓疊して、江を壓せる山々には、處處砲隄を設け、今方に工事中なるも見受けたり、こは佛國どの居留地に關する談判の結果にてもありけんかし、南京にても警戒を堅固に、操練絶えざりし模様なりき。鎮江に近づけるは、午後四時頃なりしが、瓜州鎮の林の如き帆檣を北岸に望んで、やゝ進めば、金山寺の浮圖、珍らしくも四簷角穩かに張りて、我邦の塔の形したるが、層疊せる伽藍叢樹の間に抜て、水上に浮べるは、海中の蓬來を望むにも似て、極めて奇觀なり。舟は鎮江に碇泊すること、一時間許り、北固山は金山寺と東西相對して、鎮江を護する勢を成し、山上の樓閣は所謂多景樓なるべく、突兀たる山を纏繞して、一種の景致を形れり。京峴山はやゝ遠くして、丘に據て蜿蜒たる城壁

の彼方に其巔を見つ。鎮江東に去れば、險隘相接し、一里餘にして、焦山江中に特立し、絶頂に塔あり、南岸の象山と相對して、大江の吭を扼し、其の勝絶の處は、即ち險絶の處、是より大江分れて、二大支となり、舟は其の南支を下る、南岸の連山、漸やく暮煙に包まれ、行きて、蔣山、圖山、古へ攻守の跡を過ぐる頃は、星光にすかす山の影さへ定かならず、麓の砲臺は、僅かに火光にそれと認められぬ。

江陰縣は夜中に過ぎたれば、是も火影にそれと覺りつ、明くる廿一日の朝は舟は、早や崇明島の邊に在りて、渺々として、江海を分ち、難く、間もなく、吳淞砲臺の下を繞りて、上海に着せしは、正午過ぐる頃なりき。



其十二 最後の筆談。時務。金石。歸路の驚聞

漢口より歸りて上海に留まること、僅かに四日なりしが、此間に羅叔韞、振玉と金石を評論し、張菊生、元濟、劉氏、學詢と時務を論ぜしは、掉尾の佳興なりき。張氏は政變以前、湘撫陳寶箴等より、康南海等と同じく保薦されし五人才なる者の一にして、齡三十三歳、浙江秀水縣（即ち嘉興府治）の人氏、白哲美好の丈夫なり。嘗て北京に在りし時、通藝學堂を建て、後進を導びき、能く英文に通ず、蓋し亦江浙間の俊才なり。其の興に談ずる所左の如し。

張 先生此の行、蘇杭よりして武昌共幾句の勾留かある、途中起居安好なりや。

予 弟蘇杭の游、勾留二禮拜、武昌金陵の游、勾留二旬、南中民物蕃盛、自然京畿と伴し、からざるを觀竊かに望を將來に繫くるあり、此の如

き江山乃ち他人をして我が勢力範圍と放言せしむ、以爲らく貴國士大夫の耻と、先生以て如何と爲す。

張 國事此に至る、夫れ復た何をか言はん、先生曾て北の方長安に上る乎、何ぞ匆匆言旋して而して北游を作さざるや。

予 若し秦蜀の游を爲さば、當さに半歳を要すべし、今時歲杪に迫る、僕歸心方に急なり、之を他日に待たざるを得ざる也、意ふに關中民物、復た昔日の盛なし、其の地方人材、江南の如きこと能はず、近日康南海の如き、乃ち一たび都を關中に遷すの說を唱ふ、弟の解せざる所知らず、高見如何。

張 關中王氣已に盡く、遷都の議、中朝士夫亦之を言ふ者あり、則ち暫らく外人の鋒銳を避くるの計を爲すに過ぎざる耳、康南海近ごろ亦此言を作さじ、此事之行ふ能はざるに論なく、即ち之を行はんと欲するも、京都百萬の旗民、土に安じ遷るを重かる、亦必ず出で、



而して阻撓せん、將來宗社の重地、必らず終に俄人の手に落ちん。  
 予 故に忤れて移り難きは、貴邦在朝の大弊、且らく遷都の議に論なし、弟を以て之を見るに、東南十省の力を以て、其餘諸省及び塞外荒遠の地を養ふ、貴國財政の周ねからざる意ふ、此も亦一大原因たる也、若し東南の殷富を以て、自衛の計を爲さば、財足り兵精しき、數年能すべし、此れ形勢の談、若し夫れ人材養成の説は、固より此より急なる者あり。

張 南方各省、自衛の計を爲す、自から是れ大に爲す有るべし、然るに如今、人才孰れか能く此の大業を成さん、其の權力ある者は、特に敢て爲さざるのみに非ず、且つ敢て知らず、之を知て而して敢て爲す者、又一も憑藉なし、草澤の奸雄、何の地か有ること、蔑からん、然るに皆、曠悍無識の流、安そ能く此の東南半壁を支へん、且つ南方、民物富庶、財力尙ほ餘りあるに似たり、而かも民智、遏塞、北方に異なるなし、

恐らくは亦自衛に難き也、先生蘇杭に遊び、長江に沂り、武昌に達す、亦略ぼ内地民風の一、二を見ん、其れ能く以て自立するに足るあるか、哀しい哉。

予 貴邦地廣く民庶なり、弟竊かに其の士人を觀るに、亦自から大國の規度あり、唯だ故に忤るゝの弊、遽かに改め難きある耳、泰西の新政、即ち之を今日に行ふも、其利未だ享けず、而して其の弊亦隨て至らん、士風を陶鑄し、能く清廉勤敏、泰西人の如きを致すは、朝夕の談に非ず、聞く先生方に育英に従事すと、人才養成、學校を以て先と爲す、士風の陶鑄、尤も當さに、生員、校舍に在るの日を以て之を格すべし、知らず南洋公學、生員規制、其の一斑を聞くを得べきか。

張 高論極めて佩す、弊國前四十餘年より、已に變法の説あり、西人に效法する所の者、其事亦復少からず、而して成效茫然、且つ今の所謂洋務人材、亦祇だ其の皮毛を知りて、而して其神髓を得る能はざる

は、則ち本を揃はずして而して末を齊しうし、人材培養を以て先と爲す能はざるに由る也。僕南洋公學に従事す、専ら譯書の事務を理す、生徒學術に至ては、別に何梅生君嗣焜ありて、之が監督を爲す、大約學期八年、普通政治學略ほ備はる、現在祇だ二年の程度あり、規模尙ほ未だ大に定まらず、僕當に其の章程一通を取りて寄呈すべし、先生指教して可なり。

予

洋務人材多く輕佻價薄、敵邦前十年亦復是の如し、専ら語言に敏にして、而して書を読み義を釋ぬるを會せず、意ふに數年の後、貴邦も亦潜思發明の人を出さん、嚴又陵天演論の若き、蓋しその先聲なり、貴邦人士、義理精透、此書の若きを喜ぶ者多きを得るや否や。

張

天演論一書、自からは是れ弊邦數十年譯書中最善の本、喜び讀む者亦人に乏しからず、然るに號して求新者流と爲す、亦以て誕と爲す者あるは、則ち智識の未だ啓けざるに由る也。先生武昌に在て、曾て

何人を見る。

予

二たび汪君鳳瀛を農務局に訪て逢はず、其餘見る所なし、張尙書の若き、久しく一たび調を執らんと欲す、禮數繁重なるを聞き、見るを求めざる也。弟武昌に在り、竊かに張尙書の事業を察するに、其事固に偉然るに皆其人亡すれば、則ち其政息むの類、一も後人をして繼で之を成さしむべき者あるなし、是れ其の時勢に限らると雖も、而かも張尙書の人と爲り、或は亦功を喜ぶに過ぎ、創業の材にして、守成の器に非ざる也。

張

其人名を好み、而して又善言を受けず、宜なり、其事業の成就する所なき、先生言ふ人亡すれば、政息むと、臆論と爲すべし、亦曾て其の勸學篇を讀む乎。

予

勸學編文字老成、然るに其の議論は、則ち泰西事情に於て、一知半解、笑を識者に貽す者あり、何君啓書後、之を攻むること過刻と雖も、

而かも其の切當の處は、則ち張尙書以て辯を措き難き者且つ何君泰西學術深遠精博蓋し張尙書の流に非ざる也聞く何君康説書後新政安行等の著ありと、已に印行するや否。

張

康説書後等の書前に亦此名あるを聞く、然るに上海覓購すべきなし、當さに之を香港に求むべし、翼教叢編あり、先生曾て之を見るや否。

予 康南海先生以て何如なる人と爲す。

康南海曾て東京に於て之を見る、其人才力餘りあり、而して識量足らず、沈重の態に乏し、又志一世を共濟せんと欲し、而して必ず學義の異同を以て喜で自ら標榜し、人と辯駁す、其事債れ易き所以、大凡そ事功の人必ず學義に於て偏見を立つることを忌む、是れ自ら其の勢力を限り、大に行ふべからざらしむる也、鄙見此の如し、張曰く甚た此論に佩す。

翼教叢編大抵學義辯駁を以て主と爲す、守舊の人、南海の志を知らざる者に在ては、亦自から至るの勢、即ち或は其志を知る者も、亦此を以て伊を攻むるを便とする耳。

張

康の人と爲り、學ぶ所を以て衆人を範圍せんと欲す、轉た人に授くるに瑕隙を以てし、意外の費を生ずるを致す、正さに先生言ふ所の如し、且つ渠去年八月初六日後に於て、猶復た生を人世に偷むは、殊に解すべからず、知らず彼の事業彼時に至りて、已に盡く以後皆蛇足と爲る、梁啓超近日貴國に在り、清議報を設立し、曉々自から辯じ、其の事の關繫至大に、斷じて局中の人の能く議を置く所に非ず、且つ烏くよりして、其の是非を斷せんか、知らず徒らに外人をして其の意躁に識疎なるを見しむ、是も亦新黨の爲めに愧づべき也、予 梁も亦一たび之を見る、梁上海に在る時、論著する所才を恃み、自ら街ふの風あり、東渡の後、頗ぶる自から抑損す、然るに敝邦に在り

て、其の人士近日躁急の風を習見して之に倣ひ、且つ其の自ら辯疏する太だ過ぎ、其の西后を攻むる動もすれば猥瑣に涉り、張此處に附言して曰く此れ士大夫の宜しく言ふべき所の者に非ず、適さに其の人と爲りの高からざるを見はす、弟が取らざる所。  
 敵邦維新後、己に三十年、士人亦漸やく久安に慣れ、弊病百出す、故に敵邦に遊ぶ者、其人を擇で而して之に交はらざれば、則ち獨り其弊を受けて、而して其利を享けざる也。

張 尊論極めて佩す。王照なる者あり、先生曾て之を見るや否。

予 一見す、蓋し木強人なり、才氣甚だ短く、稟性率直、大事に任するの

人に非ず、此等の人をして同じく禍に陥らしむ、康南海等、誇張太だ過ぐるの致す所。

張 王君現に何處に寓す、聞く己に梁と析居せりと。

予 前二月寓して日本報館員桂湖村の處に在り、近狀如何を審かに

せず、聞く王君望郷の念太だ切、東方諸友と多く違卻あり、殆ど狂發せんと欲すと、憫れむべきの至り。

張 其人夙に此の病あり、聞く此の數人前に大隈伯の庇に託するを得と、今復た如何。

予 大隈伯幕僚諸人、今に至りて之を庇す。

張 暢談大教、欣佩已むことなし、恨むらくは先生明日即ち行き、暢叙を獲ず、謹て一絶を口占して、先生の爲に行を送らむ。

海上相逢一葉槎、慣談時事淚交加、願君椽筆張公論、半壁東南亦輔車。

羅叔韞との談は、多く金石拓本を披きて、此れ一句、彼れ一句、相應酬したれば、零碎にして録し難きこと多し、羅は其の著たる面城精舍雜文甲乙篇、讀碑小箋、存拙齋札疏、眼學偶得を贈られ、吾は近世文學史論を以て之に報じ、吾は携へ來し、延曆敕定印ある右軍草書法隆寺金堂釋迦佛、及び

藥師佛光焰背銘、二天造像記、藥師寺塔檫銘、佛足石讚碑、神護寺鐘銘諸拓本、風信狀、小野道風國字帖等を贈り、羅は秦瓦量、漢戴母墓畫象、漢周公輔成王畫象、北齊張氏白玉象、唐張希古墓誌、及び高延福墓誌、南漢馬氏買地券、晉永康帖、及び無年號甄宋元嘉甄等の拓本を以て之に報じたり、蓋し此等諸本は、文字盡く精善なるに非ざるも、皆人家に藏弄して、市肆間の購求すべき者に非すと、其の藥師寺塔檫銘を評して、此書極めて六朝人に似たり、文も亦極めて爾雅なりといひ、右軍草書は、吾れ褚遂良の臨本なりとの説ありと、語りしに、羅は登善撫する所と謂ふ、此説殆ど誣ひずといひ、又日下部鳴鶴翁の字を評して、北人氈裘の氣なくして、甚だ佳なりといひ、予が齋らせる多田親愛翁の字を評しては、鍾紹京に似たりといひ、吾に何如なる字様を好むと問ひしにより、吾は近人噴々、皆六朝を言ふ、然れども其の佳なる者殆ど望むべくして、即くべからず、若し刻畫太た過ぎば、反て古法を失はん、獨り唐人の書、敝邦尙真蹟の尋ぬべき多

く、書家亦其筆法を傳ふる者あり、是れ學ぶべきなり、宋人は多く古法を變ず、據るべからざる者多し、元人往々佳なる者ありといひしに、羅は元代皆吳興の一派、虞揭諸君は文字自から佳なりといひ、予が現今書法の名家は誰そと問ひしに、羅は現在甚だ多からず、江標、張審、陶濬宣、高邕、楊守敬、梁鼎芬は、皆近人の表々たる者と答へ、翁同龢は如何と問ひしに、故と是れ老宿然るに書に、偃側多し、故に世に重ぜられずといひ、予は京中の人、頻りに徐邴を説く、殊に其の佳なるを見ずといひしに、是れ院體の書、翰林中の人之を稱揚する耳といへり、其の餘談ずる所尙ほ多かりしも、今皆記憶する能はず。

因みに記す、右軍草書拓本は、天津に在りて、嚴又陵にも贈りしに、米南宮の摹本に似たりといひ、其後文芸閣も亦其の筆鋒新穎なるを以て、同様の言を爲せり、蓋し米氏古を距ること遠からず、其の筆力亦王著等の比にあらず、我が延曆敕定本と相類せるは、以て其の右軍の遺意

を失はず、兼ねて米の字、褚登善より出でたりとの説、誤らざるを證するに足る者なり。

密旨を帯びて我邦に使したりと稱せられし劉學詢が、此程北京より歸りて、此地に在りと聞き、東亞同文會の井上雅二氏と同じく之を訪ふ。劉が家産は支那人の説く所によれば、七百萬兩程ありて、一も其の資を支那の事業に下さず、盡く之を外國銀行に預けありといふ。其の邸宅は大馬路につよく郊外の間靜なる地に在りて、洋風の高厦、今方さに修繕中に在り、與に談せし所は、此方に留稿なければ、遺忘に歸せしも多けれど、其の使命の趣旨は、日清兩國の聯合を經濟上より成立せしめん希望、西太后に容れられしより起りしとの事にて、劾奏者は前後群起したれども、幸に兩宮の明察によりて、禍に免かれたるなりといひ、心得難きは駐日李星使が、劉の爲めに日本の外務省などに、いたく周旋しながら其の歸りし後、直ちに之を朝に參奏したるに在りといひ、其の第一の目的は

日清銀行を設け、更に礦山鐵道さまくの事業に及ぶべかりし筈なりしといへり、其の使命の失敗に終りしとは、さすがに言はざるも、希望せる事業の結果なきを見れば、固より成效はせざりしこと明らかなり。吾は少しく思ふ由ありて、中國通商銀行の性質如何、こは盛宣懷氏の私有物なりやと問ひしに、劉は謂へらく、こは元と其名の如く、中國通商の爲めに設け、創立の際には、己れ等も専ら力を盡し、之が督辦をも委せられたるなれど、其後終に盛氏の銀行と算し、做され、當初の目的に合はずなりたれば、己れは其の職を辭して、今は關係せずといひ、頗る盛氏に不滿の意をもらしたり、意ふに彼が今回の使命は、一方には盛氏に對して向ふを張るの意ありしならんとは推せられたり、慶王と榮中堂と相善からずとの説あるがいかにと問ひしに、慶王は此次の使命等に就ても力を盡し、頗る文明の輸入を望めども、其の勢孤立にして、意ふが若く行はれずといへり、されば榮祿と善からずとは明言せざるも、其の事實は定

めて之あるべく、榮祿が盛宣懷、袁世凱等を引いて、其議に參與するの風聞も全く訛傳にはあらずと知らる。劉はいたく李鴻章の人物を推賞し、張之洞は聲名を顧慮し、優柔不斷なるも、李はかゝる弊なしといひ、其の露と結ぶの議を主持したりと傳ふるも、全く訛傳にして、東洋百年の大計は李の深く憂とする所なりといひ、暗に李が日本を敵視するの意なきを辯疏したり。此時劉は張之洞が處に派して委用するの命を受け居りし際なりしかば、果して武昌に起くやとの吾が間に答へて來月は往くべしといひしかど、其後遂に武昌に赴かずして、李が兩廣總督の署理を命ぜられしに乗じて、廣東に隨行するに至りし緣由も、此にて思ひ合されたり。劉との筆談は、一時間半ほどに渉れるが、含糊にして、明言せざるが多けれど、其の語氣によりて、清廷内外の事情、其の使命の廷議と、劉が希望とも粗ぼ徑路を尋ね得べくなりて、極めて吾には利益ありき。劉が相貌は鋭敏にしてシマリあり、些の大やうなる處なく、やゝ鄙しき風を

表せる、其の出身と地位とに相應せりと謂ふべし。但だ其使命の成效せざりしのみにて、別に懲罰もなかりしは、所謂密旨中に、攻守同盟等の若き大問題の確かに存せしに非ず、又其の失敗は、主として同行者たる慶寛、姚文藻等との間に互に衝突ありし結果よりし、此が爲めに缺陷を見はす程の事もなかりしが故にやあらん。但だ劉が爲めには、日本の信用を基礎として、大に財界に振はん素望、水泡に歸して徒らに資縁關節の爲めに費せし數十万金の全く空となりしこそ氣の毒といふべけれ。汪穰、鄧康年には兩三次會面したれども、竟に時務を談ずるに暇なかりしは遺憾なりき。

廿五日、郵船會社の西京丸に搭して、歸路につきしに、廿六日は終日、北風極めて勁くして、そなたに向きたる、吾が甲板上の船室は、激浪窓を撲つこと屢々にして、こゝへ通ふボーイは、長靴を穿ちて往來しぬ。吾は船こち堪へ難ければ、床上に打臥せるまゝ、讀書によりてその苦しみを忘

れんとは勉めたり。廿七日朝長崎につき、廿八日は門司につきたるにこ  
 こにて購ひし大坂朝日新聞に、友なる長澤別天が、去る廿二日に身まか  
 りしとて、吉村膽南が之を吊ふ文を載せたり。別天は此の春より肺患に  
 かゝり、其後経過宜しき方にはあらざりしが、吾は發するに先ちて、之を  
 東京朝日新聞社に訪ひし時、そのやゝ快き方にて、一二日内に松島、中尊  
 寺に遊ぶべければ、君が發途を見送り得ざるべしと語りたるが、吾は其  
 の體候の尙も心にかゝりたれば、神戸より信を寫して、かへすくも其  
 の俗冗を心にかげず、保攝を専らにすべきよし言送りしが、猶ほ心落居  
 ずして、上海にても、田岡、藤田二子、小田切領事など、臺灣より歸りて、呂  
 泣が喪を送りし、息はしき前例もあれば、いと心元なしと語らひしに、思  
 ひきや、小田切領事と相語りし頃は、早や別天は此世の人にはあらざり  
 きとは、別天は嘗て岡山に在りし時、吾が著せる「諸葛武侯」に叙して云へ  
 るあり、

四月某日友人内藤湖南將に南の方臺灣に入り、轉じて支那に遊ばん  
 とし、其の東京を發して浪華に來るや、吾れ急行東上して、城外の客舎  
 に相逢ひ、麥酒の大杯を舉げて痛飲快談、眼一世を曠うすること二日  
 二夜、月の十五日、湖南は雲煙縹渺の際に向て去り、吾は西歸して再び  
 朝日河畔の臨江樓に隠る。二人の手を楠公祠前に分たんとするや、湖  
 南余に囑して曰く、諸葛武侯の上木將さに日あらんとす、文學史論は  
 呂泣之を叙せり、武侯は子必ず之に叙せざるべからずと、(中畧)  
 湖南今や南荒の新領土に在りて、臺灣日報を幹督す、而かも或は黃河  
 を横越し、或は邊塞苦寒の地に入り、或は崑崙に登り、或は涙を定軍山  
 下に灑ぎ、或は歌を楊子江頭に聽くは、蓋し遠きにあらざるべし、若し  
 夫れ歸來、遠游感憤の情之を激し、筆を東大陸の事に着くるの日は、必  
 ずや千秋に傳ふべき大作を出さんか、  
 其後吾れ臺灣より歸り、京に在ること歲餘にして、始めて此次の遠游を



作す、其の足跡及ぶ所僅かに六七省の一隅に過ぎず、以て呂泣と別天とが期望せし所に副ふに足らざるも、其の半夜灰に畫し、心友と與に形勢を縱談せんと欲する者亦豈に少しとせんや、呂泣九原に起すべからず、猶ほ別天を意ふ而して今又途に其の死を聞く、何を以て情を爲さん、心惚々として樂まず食に向ふも味なく、卷を執るも讀むに意なし、内海一路の風光、娥媚舊の如くならざるに非ざるも、之に對して徒らに寂寞の感を増すのみ、廿九日神戸につき、宿せずして直ちに發し、京に歸れば、則ち別天の喪に奔りて、其の老萱堂、新寡妻と、嬉々として憂を解せざる幼兒とに對して、双淚垂るゝを免かれず、禹域鴻爪記こゝに盡く。

### 鴻爪記餘

○支那人と狗

天津の紫竹林なる外國人居留地には、公園の設ありて、一週間に二夜の奏樂あり、四近の蕭索たる景物の中に、此處のみは綠樹蒼鬱として、いと心地よし、此の公園内に入るべからざる者二種、曰く支那人、曰く狗形裝、凜々しき支那人、巡查は園門を守護して、其の同胞が園内に入り來るを攔遮しつゝあるなり、上海の公園は奏樂毎夜にして、樂手は葡萄牙人なれば、我が邦人と見まがふことあり、其の支那人を入れざるは、天津に同じ、但だ外國人の子守を勤むる支那婦人は、嬰兒の御威光にて入ることを得べし、上海の支那人は、其の奢華傲慢の情を満さんが爲に、外國人公園に間近く、別に公園を設け、結構も殆ど外人公園に劣らず作り成して、その游歩の地と爲せり。

○回々

天津にて屢ば見る飲食店に回々といふ招牌をかけたるあり之を人に問へば回教者は豚肉を食はず通常の飲食店の腥膻を厭ふが故に特に其の教徒の爲めに此等の供給者ありといへり此地方に回教徒少からず存するを知るべし。

○鹽丘

白河の岸に沙の如き小丘羅列せるは吾始め唯だ泥沙なりと以爲へり之を問へば即ち半ば土沙まじりたる食鹽にして之に守者を附し盜む者に遣は之を銃殺することを得といふ鹽法の嚴なること此の如し。

○空中の鳴鑿

北京にて富家往々鴿を養ふこと百餘羽に至る天晴る日早晨之を空中に放ち信號もて其の之く所を指示す鴿乃ち之に従つて回旋翔翔す鴿足には竹製の小笛を結び鴿の翔るに隨て笛空氣に觸れて鳴る遠き

が若く近きが若く嘲哢悠揚として聲天半より墜つ眞に空中の鳴鑿を聞くが若し北京に在りし日毎に此聲を聞て而して曉眠頓に覺む。

○孔廟の守者

貪るは勝蹟の守者の常なれども未だ北京國子監の孔廟の守者の若く甚しきはあらず門は常に開けたるを遊覽外國人の影を見れば輒ち急に關す遊覽者は便ち門の扉隙より圓銀を示して之を開かんことを求む守者價を論じて容易に開かず已に開くも廟前に至りて復た更に金を求む是に於て遊覽者は大抵ステッキもて守者を二三打撃して強て之を開かしむるを例とする也遊覽の際守者ども乞丐ども分ち難きが擾々として跟隨し來る五月蠅さは殆ど名狀すべからず。

○貢院

蕪穢尤も甚しきは北京の貢院なり天下の人材を薈めて其の才學を試むる處といふに受験者が入るべきは方四尺位づゝに區畫せられたる

犬部屋ども視るべき室の八九十つ、联接せる長屋百餘ありて、室の數は一方に餘るべし、室の三面は荒煉瓦にて、前面には戸障なく、受験者自から帳幔を攜へて、此に掛くるといふ、此中に在りて三日間、一歩も出づる能はず、以て三場の試を終るなり、院の境内は、草人頭より高く、考官の居るべき房室等には、守者が糞便狼藉として、臭氣鼻を衝く、其の汚穢實に言語に絶せり。

○體面の意義

我が北京公使館の門番には五品位の老爺あり、宗室の貴種にして、五圓位の給料にて、日本人に官話を教ふる者あり、面目體面等の意義は、今の支那人と與に談すべからず。

○一大國圖

北京の人家には國圖の設なし、大街と胡同との角々、胡同の屏側は、いづくにても糞便の放撒場と知るべし、故に北京の街上を行くに、何となく

糞便の臭空中にみち／＼て、北京城を擧て一大國圖の若き心地はするなり、然るに今は摧殘せる明時都城建築の際の舊規は、壯大なる下水の設備ありて、文明國の都府にも劣らすといふ、清朝の文明が、前朝に何如は此を以て推し難からず。

○卷秀

萬壽山前の牌樓に圖して卷秀といふ、此の二字は皆に萬壽山の景物を形容して遺憾なきのみならず、亦能く乾隆以後、清國趣味の性質を代表するに足る者といふべし、其の織巧にして裝飾のクバ／＼しきこと、古今東西、其の比を見ず、建築に於て、簷角の翼然として飛はんと欲する、色彩の燦爛たる、文章に於て、四六體の非常なる發達を爲せる、虞初體の世にもて囃されたる、詩に於て、浙西諸家の一代を風靡せる、書に於て、院體柔媚の極に達せる、皆同一風氣の薰習する所に非ざるなし。

○外國人

長城旅行中、二人の外國人に遭逢せり、一は瑞士の武官にして、張家口より蒙古を横絶する心算なりといふ、八達嶺までは相前後して行く。一人は何人とも知れず、八達嶺にて面を合せたるまでなり。前者の頗る馴々しく挨拶せるは勿論、後者も一行に目禮して過ぎ行けり、同じく異郷に入れば、服装の同じき丈にてても、かばかりなつかしき者なり。

○南口の鹽浴及び便器

南口の旅店には、思ひもかけず、西洋風呂ありて、覺束なげなる筆法にて Bath room と題し、又西洋便器をも備へたり、以て此の一路遊觀の外國人少からざるを察すべく、中にも英國人の感化侮どるべからざるを知るに足る。此の小市は實に露國が張家口より北京に通ずる、陸路貿易の孔道に當れるに、かくては猶ほ露國が燕薊奄有の野心成就も、前途遠しといふべし。

○店舗の裝飾

家屋裝飾の華美繁縟を極むるは、支那の一特色なれども、中に就て北京市中の店舗を甚しとす、售り出す物品の名を記せる招牌は、いつれも我が藥店のそれよりも彫刻多く、懸くるに龍首を以てせるは、寺院の幢幡にも似たり、軒頭には欄間彫の細密繁巧なる裝飾を施し、賣場の臺は、須彌壇どまかふべし。かゝれば北京の市中を過ぐれば、恍として寺觀の間を行くが若し、而して其の寺觀は更に繪綺を極めたるのみにて、其の趣致は通常人家と異ならず、蓋し我が寺院の裝飾は、殆ど支那普通の裝飾を移し用ゐたるに過ぎされども、通常人家の質樸大に程度を異にせるより、かゝる種類の裝飾をば、反て寺院特有のものゝ如く思ひ做すに至れるならん。

○家屋の構造

わが經過せる都會にて、家屋の構造重厚高大なるは、杭州を最とし、漢口之に次ぐべし。蘇州に南京とは同じさまにて、やゝキヤシヤなり。杭州の

大店舖が前に白壁を築き、狭き入口をあけて、それより舖内へ進む構造は、我が大阪の富豪の家の制に似たり、但だ壁の高厚は、我に比して更に加はるの差あるのみ、大阪の街路の數年の前まで、瓦片を木口並びに敷きつめしむ、蘇州の街路に同じく、連棟せる店舖の端々に、隣店との界を標せんが爲めに扇を半截したる形に壁をつき出したるも、全く彼國の風なり、意ふにこは泉州堺の商人等が外國貿易によりて浸染せられし風なるべし。

要するに江南の家屋は、木材多く、北方の泥土多きが如くならず、其の竹椽茅屋なる貧人の家は、我邦の鬚鬚たり、こゝに獨斷の史論を吐かんには、南方人種は元と我邦と同しく、熱帶より來りし茅屋人種にて、北方の漢族は穴居より進歩して、土石造家屋に住ひたるが、開化の播布は、北より南に及びしが爲に、後には南人も次第に土石造家屋に住ひ、其の木造家屋も、亦益々制を土石屋に擬するに至りしなるべし。

○南北の字體

北人は質樸にして遲鈍に近く、事毎に變移を重かる、南人は輕銳にして儼薄多く、事毎に新異を喜ぶ、北京天津の店舖招牌、盡く是れ院體の字、康熙乾隆諸帝が自らも學び、以て士を取る標式としたる、歐陽詢趙孟頫董其昌の流、上海に至れば、則ち多半は是れ秦篆漢八分、晋魏の楷行貼紙の聲明にすら、偏側奇逸なる六朝風の字體を見る、是れ瑣事と雖も、實に南北氣風の眞異、掩ふべからざる者。

○美人産地の沿革

趙女鄭姬春秋戰國の美とする所、邯鄲に歩を學ぶ、其の繁華を想ひ見るべし、文物江南に傾て、先づ揚州といひ、金陵といふ、今は則ち益々東南に偏して、姑蘇の佳麗、天下若くことなし、上海の聲妓、其の他方の出にかゝる者、概して其の門頭の名牌に地名を記せず、獨り蘇州の出は、則ち明に題して、姑蘇林黛玉書館などいふ、其の實蘇州の本場は、今日反て滬上

の如く尤物を留めすといふ、因みに記す、滬游雜記なる小冊子に、日本醜業婦の状を記せる中に云く、

日本の女子類ね皆膚凝脂の如く、髮髹漆の如く、幼時雙髻肩に垂れ、慾痴愛すべし、大に妾髮始覆額、折花門前劇の意あり、長すれば則ち雲髻高く梳り、飾るに珊瑚或は犀角簪を以てす、腰に長帯を圍み、闊さ尺計り、長さ丈外に至る、倒捲して而して其餘を垂る、襜負の若く然り、唇に泥金を塗り、以て美觀と爲す。

又外國妓館を記せるが中に云く、

其人大都、歷齒蓬頭、藥又變相に異なるなし、獅王一吼、見る者寒心す、獨り意西巴尼牙國人は則ち然らず、姿質明瑩、肌膚細膩、纖柔温麗、兼ねて其の長を擅にす、其の出づるや氷紡を障ひ、霧縠を曳き、水邊林下、隨意に遊行す、十丈軟紅中、此の名花點綴を得、恐らくは廣寒月殿、當さに亦

此の風光なかるべし。

此の五方雜處、東西群居の地に於ける、支那人の美人觀、以て其の一斑を窺ふべし。

○滬上の演戲

支那の戲子は、北京を最上とす、其の上海に來る者は、大抵北京に於て已に售れざる者のみ、滬游雜記に云く、

京師梨園の子弟、年長し色衰へ、門前冷落たれば、已むを得ず、束裝して津門に至る、徐娘老去て、重て笙歌を整ふ、蓮汚泥を出づと雖も、此に至りて終に身を潔くし、自ら好くする能はず、俗語之を下天津と謂ひ、彼の中の人は、則ち深く以て恥と爲す、滬上京戲盛んに行はれてより、而して優伶の業を失へる者、皆海に航して南來す、前年陸小芬、眞十三旦の類の若き、大抵馬齒既に増し、蛾眉已に改まり、而して滬人士の故を厭ひ、新を喜ぶ者、猶ほ復た譽めて口に絶たず、霓裳一曲、纏頭を擲つ者

紛として雨の如く下る。是れ豈に別に人を動かすの處あるか、何ぞ俗子の喜で蛤蜊を食ふやと。

われは京に在りて戯を見るに違なし、滬上に於て看ること兩三次、其の舞臺道具立の簡樸其の動作の形式的節奏に巧なること、其の白と唱と戯子并せて演ずること、我が能に似たりともいふべく、但た我れの若く弩張の態なく頗る情狀を曲盡せるは、寧ろ人形芝居に近からんか、其の妙は神韻縹渺、敘事詩を誦するか若く屑々たる寫實を主とせず、而して能く人をして感興せしむるに在り、其の喜劇を演ずるや、亦滑稽突



梯變化百出して、能く俗情を肖するを觀れば、優伶の技、世話物に便ならざるにはあらずるなり。舞旋跳躍の輕巧、時として三階總出にて入り亂れて立合ふ時などの若きは、筋斗の趨捷、只だ舞臺に聲あり、剪紅裁綠、紛披狼藉たるを見て、人體を見ざることあり。わが視たるは、丹桂茶園といふ劇場にて生は夏月潤といふを頭等とし、且は七盞燈といへる十五六歳の少年にして、其の名最も噪しかりき。

校正京調空城計全本

〔生上引白〕兵出祁山地 要計司馬懿〔丑白〕手捧地理圖 來至丞相府 門上有  
人壓〔末白〕什麼人〔丑白〕下書人叩見 丞相〔末白〕啓稟丞相 下頭人 叩見丞相  
〔生白〕爾奉何人 所差〔丑白〕奉王將軍之差 有畫圖 在此〔生白〕將畫圖 打問  
待山人 觀看 嗚呼 來將趙老將軍軍甲回來 〔末白〕是〔探白〕報司馬懿 奪取  
街亭〔生白〕再探 我把他大胆的馬謖 山人臨 行之時怎麼分付與爾教爾  
山近水 安營扎寨 爾不聽 山人將令我的 街亭 咳 以是雖保〔探白〕報

馬將軍 失守街亭(生白)再探 失守街亭非馬謖 之事 諸葛亮之罪也(探白)  
 報 司馬懿 離城 四十里 (生白)再探 噯吓 司馬懿 人馬 來得好快  
 呀 呀 今日一見 話不虛傳 則是令人 可伏 令人可敵 吓司馬懿  
 人馬到來 大小軍官 吊出意外 難道我 左手被擒 右手被擒 吓是有  
 道理 來(末白)有(生白)傳老弱殘兵(卒白)司馬兵到 心驚肉跳 丞相無為必定  
 開刀 (卒白)參見丞相(生白)罷了 爾等 將四門大開 司馬懿 人馬到來  
 不要嚇怕(卒白)是(生白)違令則斬(卒下生白)蒼天吓 蒼天 我保漢室江山 我  
 則空城 一計也(生唱)撫板(吾用兵 數十年 從來謹慎 悔不議 用馬謖  
 無用之人 設下了 空城計 我心中 不定 呀(倒板)但願得先帝爺 空中  
 顯靈 咳下(卒上生唱)小馬謖 失街亭 令人可恨犯將令他就該 斬首營門  
 (卒白)咱哥們 丞相老糊塗 丞相 將四門大開 等司馬 大兵到來 一殺  
 而盡(生白)唔(唱)兒等門 因甚事 把分分 議論(卒白)丞相 不是我說的是他  
 說的(生唱)國家事 無須爾 兒等的當心(卒白)丞相 四城乃是 漢中路徑  
 倘若司馬 大兵到來 一擁而進 西城失守 如何是好(生唱)那四城 本是  
 那 漢中的路徑(卒白)丞相 不差吓(生唱)我城內 埋伏下 有十萬的 神兵

(卒白)咱的哥 然我來 看一看 吓(卒白)一個都不有(生唱)那怕他 司馬懿  
 天大的 我諒他 大兵到 不敢進城 爾等們 放大的胆 把街道掃來(生  
 白下生白)守空城 退司馬 就在此瑤琴(淨內唱)倒板(得了街亭 望西城 四  
 門大開 為何因 (白)且住 方才探子 報到 西城乃是一 一座空城 何以  
 將四門大開不要中他 的鬼計 然我 傳他一令 衆將官 聽我一令(淨唱  
 滾板)坐在馬上 傳一令 大小將官 聽分明 有人若把 西城進 定斬首  
 級 不容情(衆白)呵(生唱)四皮(我本是 南陽 一山人 前三皇 後五帝 比  
 故同行 先帝爺 下南陽 御駕三請 官封我 武鄉侯 國位的 功臣  
 孫武子 他則有 雷炮的 興兵 姜呂尙 保周朝 八百餘春 小孫賓  
 擺下了 五雷大陣 音下見 自流水 亮一亮的瑤琴(白)哈哈 在城樓  
 扶瑤琴 缺少知音(淨唱)西皮(坐在馬上 來觀陣 城樓上 坐的是 諸葛的  
 孔明 左右琴童 兩個人 那妖道 在城樓 扶的要是 瑤琴 我本當  
 將人 一擁而進(白)且住(唱)有恐怕 中了他 鬼計情 坐在馬上 傳將令  
 尊一聲 孔明 聽分明爾的鬼計 就象我 爾我本是一 樣人(生唱)二六板)  
 站在城樓 觀山景 耳聽得 人馬 亂紛紛 旌旗招展 空番影 却原來



司馬懿 發亂兵 爾我到此 未曾過陣 別來無恙 駕可安齊 一來 馬  
 謾 無學文 二來是 將相不和 失守街亭 連得二城 多饒倖 爾不該  
 領帶了 大小將士 往四城 我這里琴童 人兩個 里無埋伏 外無救兵  
 四城並無 別的敬 準備了 羔羊 美酒 美酒 羔羊 犒賞爾的 衆三  
 軍 爾就到此 把城進 爲什麼 城外 扎扎扎下 大營 站在城樓 把  
 話論 等候司馬 談談心我也曾 命人把 街道掃盡 整備司馬 好屯兵  
 爾休要 胡思亂想 心不定 爾就來 來來 請上城樓 聽我的 扶琴(淨  
 唱淡板)聽說妖道 把話論 不由的 司馬胆戰心(白)且往 來 將人馬 到  
 退四十餘里 噯呀 且住 我來說破 與他諸葛亮聽吓 諸葛亮 爾的胆  
 也太大了 司馬懿吓司馬懿我的胆也太小了 諸葛亮 爾空城也罷 爾實  
 城也罷 爾的司馬老爺 不上爾的當了 少陪了 少陪了

○風景の概観

京津地方は趣朔漠に近きこと、陳瀾生が云へるが如く、我邦に在りては  
 比照すべき地なし、上海蘇州は平野の中に在りて、猶ほ大陸の風あり、刀  
 根沿岸地方に類して更に宏濶を加ふ、獨り杭州地方は、山迫り海繞りて、

地方逼隘頗ふる我邦に似たり、城壁は女蘿蔓延、翠色滴らんと欲し、亦北  
 方枯燥の比にあらず、西湖の如きは、其の景致殆ど我が京畿中國に類し、  
 支那に在りては、明媚秀麗の最たる者、而かも我邦に比すれば、猶ほやゝ  
 暗澹を免れず、我が瀬戸内の若き、澄瑩秀朗なる風致は、支那には殆ど求  
 め難き者なるべし、其の山は皆斷層より成り、土瘦せ石秀づ、是れ西湖の  
 輭媚を以てすら尙ほ然り、我邦の若く土壤墳起して、細波起伏の狀を爲  
 し、温粹雅麗なる山容を見ることなし、われ未だ三峽の險を溯り、劍閣の  
 危を踏まず、未だ流沙の難を經、閩粵の潮を觀ず、支那風景を縱談するは、  
 夏蟲の冬を語るに似たる者なきに非ず、但だ其の過ぐる所に就て臆斷  
 すれば、實に此の如し、要するに其の長は莽蒼宏豁、雄健幽渺に在り、明麗  
 秀媚、細膩委曲に在らず、之を譬ふれば、蔗稈を噉むが如く、漸やく佳味に  
 値ふ、我邦の景、糖蜜を嘗むるが如く、齒牙皆甘きが若きにはあらざるな  
 り。

雄大なるは金陵の形勝なり、蓋し京津地方の若きは、莽蒼は之あり、而かも其の山太だ遠きが爲に、反て雄偉の感に乏しく、杭州の若きは明麗は之あり、而かも其の山太だ近きが爲に、全く雄偉の趣なし、金陵の地山太だ遠からず、又太だ近からず、蒼翠縈繞して、時々其の角を缺く處、更に幽遠際なきの思を生ぜしむ、且つ鍾山の若きあり、甚だ大ならざるも、而かも、雄特の姿に富む、野色遠近、高城百里、孝陵廟前より、朝陽門に至る高原に馬を驅れば、坐ろに千軍萬馬を驅馳して、旌旗野を蔽へる、古英雄を想はしむ、吾れ本願寺の一柳氏に語て曰く、金陵に總督として、謀叛氣の起らざる若き人物は、其人必ず庸愚なりと。

武昌の形勝は、湖廣の沃土を控え、亦甚だ雄偉なり、然るに其地金陵上流の雄鎮として、一方を制馭するに宜しくして、以て帝王州と爲すべからず、黃鶴樓址若くは龜山の頂に登らん者は、轉た吾が言の河漢ならざるを知らん。

○金陵の詩材

金陵の翠微亭に登りて、遙かに三山を望み、然る後詩人材を取る用意の凡ならざることを知るべし、蓋し金陵の四周、山巒の以て詠ずべき者、何ぞ限らん、而して太白乃ち獨り三山を取て句中に入る、三山は近づいて之を見れば、平岡凡巒、他の奇なしと雖も、金陵より望で、其の曠遠縹渺の想を驚すべき者は、實に此の半ば青天の外に落ちて、水中に浮べる若き平岡、凡巒ある耳、此れかの浮雲の日を蔽ふが爲に、長安見えず人をして愁ひしむべき景物としては、龍蟠の鍾山、虎踞の石城に比して、更に切當易ふべからざるを以てなり。

○畫の南北宗派

畫の南北宗派を言ふ者、之を禪家に倣ふを知ると雖も、而かも其由て本づく所に於ては、猶ほ之を南北山水の感化に歸する者、芥舟學畫編に所謂

天地之氣各以方殊。而人亦因之。南方山水蘊藉而縈紆。人生其間。得氣之正者。為溫潤和雅。其僞者則輕佻浮薄。北方山水奇傑而雄厚。人生其間。得氣之正者。為剛健爽直。其偏者則麤厲強橫。此自然之理也。於是率其性而發為筆墨。遂亦有南北之殊。

一應尤らしき理窟なるが若し、其の實然らざる也。北方の山水誠に間々奇傑雄厚なる者あり、然れども大抵蕭索枯瘦、衰颯の氣象多く、絶えて剛健爽直を見るに縁なし、寧ろ明清文人畫のつくいも山水に肖るありて、北宗の嶮巖磊落、蒼潤秀勁に似ず、而して南方の山水は、間々亦蘊藉縈紆の致なきにあらざるも、其の蒼潤秀勁に至りては、宛然たる宋明北宗の妙品に似たり。且つ其の畫家の郷貫を以てするも、馬遠、劉松年、戴文進、周東村、唐伯虎、北宗の大家、豈に皆江南に出でたるに非ずや、蓋し北宗の盛は、南宋畫院の諸名手に至りて極まる、而かも其時名手宜しく摸するを得べき所は、江浙の山水に在りて、絶えて河北の地を見し者あらず、王摩

詰は後世南宗の尊で祖とする所、而も反て太原に生る、以て畫派南北必ずしも地方風氣に由るに非ざるを斷ずべし。芥舟學畫編は、亦此説の破綻を知るか故に、之か解を爲して曰く、或氣稟之偶異、南人北稟、北人南稟。或淵源之所得、子得之父、弟得之師、是れ明らかに其の論の矛盾を見ず者なり。意ふに畫の南北の辨は、只だかの南宗一派が、頓漸の旨を以て、士夫と作家との畫品を分つに始まり、然る後強て其説を求めて、遂に南北氣稟の異を附會するに至れる而已。

○不是塔

蘇州に一笑話あり、嘗て京人あり、蘇州に遊び北寺を觀、其の大塔を指し、蘇人に其名を向ふ、蘇人云く、北寺塔と、蘇音北寺塔、京音不是塔と、近し、大に怪て云く、不是塔ならば、是れ竟に何物ぞと、蘇人復た對ふるに、北寺塔なるを以てす、京人益々解せずと、南北語音の異、此の如き者あり、大抵南音は我が吳音に近く、北音は漢音に似て、而して更に變化せる者なり、分

けても蘇州語は、尙ほ古風の助辭を存して、文字の上より看れば、甚だ床しき節少からず、而かも其の音聲を聞けば、京話の清輕なるに比して、甚だ鄙俚なるを覺ゆるは、猶ほ是れ我が邦の土佐九州、奥羽の若き僻地には、多く古語を存するも、其の音調は甚だ鄙俚なるがごとき耳。若し夫れ廣東音に至りては、其の清濁明らかに、拗音少く、侵覃鹽咸諸韻の閉口呼なる、最も邦音の規則に似て、而かも歐人並に支那學者の説にても、最も古音を存したるを、廣音とすれば、則ち廣韻集韻の古に溯りて、支那古音を研究せんには、支那人も反て我か邦讀の字音を學ばざるべからざるこそ奇異とはいふべけれ。

○招牌の典故

記中にもいへる、聯句と同じく、支那人智識の特性ともいふべきは、典故の應用なり、蓋し支那文明の全部を擧て古文學風なりとも謂ふべし。士庶に限らず、最も多く用ゐらるゝ門聯は、周銅盤銘、富貴吉祥、漢瓦當文、延

年益壽の語なり、商家が善く用ゐるは、越國大夫曾貿易、孔門弟子亦生涯といふ語なり、茶店の招牌に、廬陸遺風、居酒屋に、劉李停車處などあるは、文盲多き支那庶民に、無論解し得べき理なけれど、見え張ること、世界に無類なる國民なれば、さすがに酒めしなど、剝出しなる筆法をば用ゐざるなり。

○書法と金石

(219) 我邦にて、唐時の筆の製法を傳へたるに、雀頭、雞距、柳葉、諸式あることは、筆道家の記録に見えたり、南都正倉院に遺れる聖武帝の御物には、雀頭筆あるよしにて、そを摸して、製せる一枝、多田親愛翁が藏せるあれば、予は之を借りて、齋らし、往き、かの地の書を曉る者に示したり、中に嚴又陵羅叔韞などは、又試みに字を寫したるが、嚴は用ゐ慣れざるが爲に、運筆に難しといひ、羅はたゞ粘なりといへり、意ふに支那運筆の法を亡ふこと久し、撥鐙の解懸腕直筆の法、徒らに紛々の議論を滋し、而して古法遂

に復すべからず、我邦に傳ふる空海の執筆使筆の法を以て之を驗し、唐代美術の我に存する者、雅樂、舞容等に具有せる一種の節奏を以て之を律するに、宋は米元章までにて、以後元明清一も正鵠を得たるあらず、今の清人が雀頭筆を用る得ざるは異しむに足らず。かの六朝風を浮慕するの徒、亦徒らに碑本の形似に屑々として、刻畫太だ過ぎ、曾て其神を我邦に存する眞蹟に求め、其法を我邦に傳ふる入木道、必ずしも單に加茂家の傳ふる所を指すに非ず、予は寧ろ御家流の相傳、最も注意を要すと、いふ者なり。に求むることを知らず、古法の果して復すべからざるか、抑も求むる者、其の正鵠を得ざる耳。篤學の人は、須らく先づ我が入木道より入り、其法によりて上は因果經以下、寧樂の諸經、卷魚、養空、海逸、勢前後、かの隋唐と筆跡、差別あらざる時代の字様に習熟し、其の得る所によりて、上は法隆寺釋迦藥師像背銘より、以下は南圓堂銅燈臺銘、神護寺鐘銘等、あらゆる金石文字を翫味せば、眞蹟と金石との間に生ずる關繫、自

からにして融會すべく、而して我が金石と殆ど差別なき同時支那金石文字の遺格、勞せずして手に應ずるに至るべく、晋唐の逸趣、庶幾くは今日に興すべし。  
 法隆寺釋迦佛光燭背銘は我邦金石文の最古なる者、其の温粹醇雅、宛然たる晋帖之を少王法書の間に置かば、明眼と雖も辨じ難かるべし。宇治橋斷碑の清妍雋逸、藥師寺塔櫨銘の蕭散澹樸、那須國造碑の端麗秀勁、皆北碑に彷彿たり。多胡郡碑は楊守敬等以て瘞鶴銘に似たりと爲す。敏行の神護寺銘に至りては、唐人の勝境といふべし。弘法大師の書、往々點畫波撇、一種飛翔の體を爲す。或は以て大師特に筆に縱せて巧を弄すと爲し、其の創意にかゝるとおもへり。然るに龍門二十品中、北魏の神龜三年比丘尼慈香慧政等造象記、唐の景雲二年景龍觀鐘銘、もしくは碧落碑等の若き、往々同様の筆致を用るし者あり。魏の李仲璇孔廟碑の若きは、處々篆法を以て正書に雜ふ。蓋し此等游戲の筆、亦彼土已に久しく之あり

しなり。且つ菅家、小野道風以後、和様乃ち生ずとは人の疑はざる所、然るに杭州に存する唐の開成二年、胡季良の書に係る龍興寺尊勝陀羅尼經幢を見れば、則ち菅家道風前後、寫經の字様と殆ど相類す。降て伏見院御父子の若き、亦米元章等と神味相似たる處なしとせず、乃ち知る彼邦唐代の書格、我之を傳へて遺すことなし、而して彼土は宋代よりして已に正傳を失ひ、益々降りて益々古意を失ひ、明清に及で蕩然地を拂ひしことを。

又一種の看やうあり、叡山の所藏なる唐の台州刺史淳給の字は却て宋人に近く、唐の天寶中、田穎行書張希古墓誌の若きは却て趙松雪などに似たり、意ふに唐時の極盛書法の發達につれて、其の風格も亦多様なるを致し、各後代の祖と爲る、後世學ぶ者、其の中に擇ふに當りて、或は偏せる者、粗なる者に就きて、而して正なる者、精なる者を遺し、唯だ其の入り易き者より入る、故に俗體鄙格益々出でて益々多し、我邦は則ち専ら二

王の法に依り、謹で古格を守る、道風、佐理、行成、法性寺入道、伏見院御父子、代に從て變化あるも、敢て二王の範圍を脱出するなし、其永く正格を失はざる所以、然るに尊圓親王や、一變の格たり、世尊寺氏絶て、青蓮院流と爲り、持明院氏と爲る、亦風氣の相感ずる、已むことを得ざる者あるか、徳川氏に及では、加茂敦直、大師の正傳を得たりと稱す、已に其の由る所を詳かにせず、其後は、則ち狩谷核齋が所謂廣澤出で、世人惡筆になり、東江出で、世人無筆になる者、蓋し亦支那元明以來の惡習に染みたり、貫名海屋出で、世人頗る正鵠を知る、而かも古法未だ全く復せずして、而して又六朝の刻畫に誤まられんとす、書は小道と雖も、其の盛衰の故を尋ぬれば、猶千古の慨なきに非ざる也。

○支那人の篤學

支那人の篤學に至ては、邦人のかけても及ひ難き處あり、上海に流寓せる宋伯魯の若き、禍を懼れて外出たに、掛々しくは得せざる身を以て、其

寓に至れば則ち輿雅堂叢書等大部の書を始めとして、牙籤湘帙紛然として室に滿ち、我に在ては一通りの藏書家と稱する者だに、かばかりは有たらじと思はれたり。張菊生が家に至れば、こは又エンサイクロペディア、ブリタニカ、哀然として卓上に載せられ、價廉ならざる種々科學の懸圖、四壁を掩へり、専門家といふにもあらざるに、其の篤志感すべきなり。文雲閣の若きは其の官に在りし時、裕朗西星使に托し、數百金を投じて、我が縮刷藏經を購ひたりといふ。されば古佚叢書が、楊守敬の計畫にて黎純齋星使の手に影刻せられし大事業は、姑らく置くも、經籍訪古志の若きも、同じく徐星使の時に印行せられ、日本金石年表の潘氏滂喜齋叢書中に刻せられしなど、古人が畢生の精力を注ぎし著述の、此邦にては其の名だに知る人少きに、支那人などにかく先づ印行せらるゝこと遺憾の至と謂ふべし。黎氏の若き其の國に歸るや、古逸叢書全部の版を以て蘇州書局に寄附せしより見れば、其の計畫の營利の爲にせざりしこ

とも亦瞭然たり、近日邦人果して能く此等の事を爲し得るや否、孰れか支那人を利欲に専らなりといふや。

○高塔

我邦の浮圖が大抵五重若くは三重なるに、支那の塔は多くは七重、九重以上なり、其の形も亦宛として、我が淺草凌雲閣に似、絶て簷牙高く啄むの奇あることなし、其の位置の若きも、我邦は多く山の半腹以下を占めて、其の九輪の尖端、最上層の簷角微に老樹の梢より露はるゝ等、甚た畫趣饒きに、支那にては多くは山巒の巔に立ちて、七八分若くは全部を露出するを常とす。長江の航路圖にも、清人の長江圖說にも、はた歐人の新出圖にも、皆沿岸幾多の高塔を以て、鍼路の標的として、甚だ有用なるを見、江浙水路縱横の區は、勿論、北清地方にても、平衍廣豁の地は、行旅は常に此を標的とするの便あれば、浮圖の建築は、或は此の實用の目的をも含有せられしに非ずやと思はるゝなり。

行其田野視其耕耘計其農事而飢飽之國可以知也

行其山野觀其桑麻計其六畜之產而貧富之國可知也

入國邑視宮室觀車馬衣服而侈儉之國可知也

課凶飢計師役觀臺榭量國費而實虛之國可知也

入州里觀習俗聽民之所以化其上者而治亂之國可知也

入朝廷觀左右本求朝之臣論上下之所貴賤者而強弱之國可知也

置法出令臨衆用民計其威嚴寬惠行於其民與不行於其民可知也

計敵與量上意察國本觀民產之所有餘不足而存亡之國可知也

以此八者觀人主之國而人主母所匿其情矣

(管子八觀篇)

## 禹域論纂

### 所謂日本の天職

豊島の海戦一たび捷て、繼ぐに牙山の進剿を以てす、彼れ其の精銳を擧げて、大軍南下、前耻を雪がんと欲するの色あり、而して我が絶海の魏貅又已に八道の要衝に填ちて、長驅して鴨綠江を渡り、西奉天北京を指さんとし、其の艦艦は則ち日夜渤海の口を巡警して、北洋水師を粉壘し、機を相て天津を衝かんとす、士氣奮ひ、民志張る、謂ふ必ず城下の盟を爲さずんば已まざる也、事の端朝鮮に起ると雖も、争ふ所已に區々半島國に於ける權力の重輕にあらざ、嗚呼李鴻章初心、特に一隊の練勇を派して、屬邦の内擾を鎮す、伊藤内閣初心、特に李の面目憎む可きに堪へずして、居留民保護の旅團を遣る、豈に兩つながら事竟に此に至るを料らんや、逆むめ料るに非して、而して事も亦竟に此に至るを免かれず、其れ偶然



に出る歟抑も大勢の驅る所、必ず此に至らざるを得ざる歟。之を釋する者あり、曰く清の我と唇齒の邦なり、東洋の平和を保ち、西力の侵蝕を禦かんと欲す、唯二邦心を一にし圖を同じくするに在るのみ、伊藤伯嘗て李鴻章と手を一堂に執り、約するに和好を渝へざるを以てせり、鷄林の土寇傳ふる者誤て大變と爲し、兩國の因て兵を派するや、兩狗の一鬪の側に相値ふ、勢相疾まざるを得ず、加ふるに我が不平の徒、生平對外の政策を云々する者、動もすれば民心を煽し、政府を咎むるに師出で徒手にして還るを以てせんとし、而して後進武官の沈滞に怫鬱して、治平の澤を戴くを希はざる者、或は法度の外に自棄せんとす。騎虎の勢、萬已むべからず、かの平和を愛好すること好聲美色の若き伊藤内閣と雖も、竟に一戰に出でざると能はず、事誠に意外に出で、偶然に成る、而かも我の以て終に清國と和好を傷るべからざるは、則ち今猶ほ昔のごとき也。天津彼に在り、伊藤伯一日李君坐談の言に忘るゝ、能はず、李君亦

何ぞ伊藤伯を少弱として欺かんや。一戰再戰、殺傷相當る、地を相て進退日を消する少きに非ず、彼れ固より大國を以て、究に海島の倭虜に屈辱せられんことを重かる、而して我が將士戰を好むの心稍やく慰し、國民敵愾の情稍やく紓ふ、加ふるに唯だ利是れ急なる紳商の輩、産業の不振を號呼して、懈り易き人心に投せば、和好の復し易く、軍費の耗損、彼此同しく然りとして、必ずしも相償はず、而して半島の事、復た清と協同して改革に従ふに至らんこと、東洋萬年の慶なり、而して有識なる伊藤内閣の冀ふ所も、亦此に外ならざるを知る也。但だ偶然派の説たる、其の決して國民の公議たる能はざるや、かの心之を主持する者と雖も、口和好を公言するを耻づる、以て微明すべき也。又釋する者あり、曰く大なる日本を建るは、必ず已むべからざるの勢なりと、而して其の快意縱横の談を爲す者は、以爲らく、優勝劣敗は進化の大則、弱肉強食は戰國の常態、歐洲列國、方さに各々其の軍備を盛にし、以

て相雄長せんと謀る、餘勢東に及で、亞細亞の大陸、獅鷲相搏つゝの場とならんとすと、拔爾幹の劫持、巴密爾の耽視、悉比利亞鐵道、尼加拉瓜運河、形勢を縱談すること、掌上に賭るが若し、是に於て我の此の際に處する所以を説き、某の島嶼警備すべし、某の港灣軍港とすべし、文祿の役、得某事に在り、失某事に在り、南洲の征韓論、七年の征臺役、意迎へて而して加ふるに臆斷を以てし、往事に切齒して、而して今回の舉に雜然として其の奇計妙策を列陳す。四百餘州、收めて掌裏に歸し、天子を燕京に奉して、四億生口をして盡く我が國語以て其の國語と爲さしむ、豊公の雄圖、今之を實にすべしと謂ふ也。其の所謂科學的緻密の理論を爲す者は以爲らく、人口の増殖、年を追て益々甚しく、三十五年にして、將に今日に倍するに至らんとす、今日の領土、以て支ふべからざる一也、金利の年々に低落するは、資本の年々に剩餘を生ずるとを示し、移民出稼の舉、募れば便ち應ずる者を得易きは、勞力の漸やく充溢に近きを見はす、此の二つの者、

其の之く所を疏通して、新たに利源を開くは、宜しく之を域外に求めざるべからざる二也、南洋南米は則ち稍々實に事に従ふ者あり、かの亞細亞の大陸、亞爾泰嶺の含藏する所、黑龍松華漑く所の沃土、猶ほ以て我が鬱積せる人口資本勞力を容れて餘あるべし、我進て其の之く所を拓かざるべからず、之れを爲す今段の事より始まると。

此の二つの者、未だ取るべきなくんば、あらざる也、夫れ我の國を絶東に建つること三千年、其の血統、其の國語、純一比なしと稱す、其の國民の懿親に厚く、閭閻禦侮、折衝の効を見はす、元寇の時、大覺寺統の皇家、力を鎌倉に并せしか若き、征韓の役、石曼子、明の説士を拒みしが若き、證例尠からず、其の風尚、其文明、頗る大陸に資る有り、雖も、大海天塹、交通の不便は、反て我をして特に彼の輸する所を同化して、爲に侵略せらるゝを免かれしめ、温雅秀潔、自から特秀を見る、其難を域外に構ふるは、三韓進貢の時、世々之れ有り、嘗て高麗の隋煬唐宗を禦くを助けて、其の混一の

餘威を聳爾たる一角の地に挫ぐ、天智の百濟を救ひて濟らざりしは、任那已に滅びて、其國又内擾ありしが爲のみ、其の後經略東邊に専らにして、壤を鞅鞅に接するに至り、繼ぐに威臨の擅制、文恬武熙を以てし、九國二島、屢々海寇に困しむ、而して弘安一役、其の最も大なる者、又其の最も後なる者、是よりして形勢一轉、而して胡蝶軍大に彼の邊を擾せり、其の終りや、恰かも西葡南蠻諸國が遠略を務むるの鋒と接す、豊太閤が四海奄有の雄圖、乃ち此時に乗じて、而して畫せらるゝなり、豊公の遠征、人恒に其の夸大を好むの弊に出づと爲す、豊公身家の計に在ては、或は然らん、然れども亦國勢の已み難き所の者あり、割據の形勢、魁傑挺特の士、一時簇起す、併せて而して一となる、尾參遠の郷士、方伯通侯と爲して、而して器に餘裕あれば、則ち所在の茂材、盡く彼等に並肩し、特に際遇の難易に因りて、或は陪隸に屈し、或は逋臣と爲る者、其れ何の地にか之を措くべけんや、材器の鬱積、其禍亂を招き易きこと、資本勞力の比にあらず、其

の疏通の地を大陸に求むるは、固より其の計を得たる者、故に文祿の役濟らざるは、偉材天壽に屈せらるゝと、方畧の失とに歸す、企圖の過に非ざる也、徳川氏内治の安康に汲々として、人の國を廢絶すると、五世に至りて已まず、蓋し數十を下らず、其の地を併するや、數百万石、以て計を得たりと爲す、而して材器の鬱積益々甚しく、其の輕價なる者、雜劇衆伎に追れ、其の分に安ずる者、儒佛茶醫に樂み、其の偏詭なる者、遊俠乞丐に入り、三百年文物の隆興を致せる者、興りて大に力ありと雖も、其の初世猶ほ貿易遠畧に逸する者、少なからず、巨舶國禁たりしより、勢力内攻し、王霸の論興りて、儒徒已に一生關東に嚮はざる者あり、兵學の師、侯伯士大夫の心を收攬して、嫌忌に觸るゝ者あり、元祿の繁華、天明の逸樂を歷て、覬覦する者遂に絶えず、一旦外交事繁くして、而して覇氣全く銷したり、維新の宏謨は、三百藩國を併合して、集權の治と爲す、當時材器、卿大夫に在らずして、遞降して下庶士に在り、故に相長短し難き者、所在林々たり、

南洲其餘勇を以て大陸を經營し、國を死地に置て、遊惰を策ち、氣力を興さんと欲す、議行はれずして、而して丁丑の後、人皆政論に嚮ふ、而かもかの藩閥を咎むる者は、仍ほ材器の鬱積を愬ふる者なり、數年來、人心漸やく外嚮の勢あり、議院政治は頗ふる其の進路を阻絶すと雖も、有志の士、蠻觸内訌に饜くこと久し、故に或は縱横捭闔の談を喜び、天下の形勢を揣摩して、虚しく策士名流と稱せられ、或は人口勞力資本の説を新異として、内兼併を制せずんば、外利源を拓くも、益々貧富勞逸の懸隔を長する所以を思はず、着實洞窾の議少く、塞源拔本の論乏しと雖も、其の歸を要すれば、則ち皆有餘の材器、内に鬱積に堪へずして、疏通の路を域外に求むる者、故に吾れ其の議論の趣旨に取らずして、而して其の結果に取る、ことある也。

但だ彼の縱横家の喜ぶ所は征服に在り、然れども馬基頓、希臘を合し、東のかた亞細亞諸文明國を并せて、歷山馬蹄の蹂躪する所、文物皆此より

摧殘に就く、北狄神聖羅馬帝國を亡して、風尙文化は則ち皆前朝の爲めに克服せらる、朔遷、貌利敦を零取して、文學遂に勝國の風に歸し、諾耳曼朔遷に克て、佛語の英に存する者、今に於て幾くぞ、露西亞南下の計、列國の大患たり、而して彼が腹心の疾、空想の激徒は、則ち多く其の學説を日耳曼に得る也、夫の東方を觀るに、其の跡殆ど相類す、秦山東諸國を并せてより、漢も亦關中に都す、而かも西都の太平を粉飾する者は、則ち鄒魯の儒術、燕齊の方士、三晋の策略、吳楚の詞賦なり、五胡雜居の後、拓拔魏江北に蟠據し、數變して隋、宇文周を承て、江南を混一し、世民隴西に起りて、又諸蕃の大可汗と稱す、而かも其の文學は則ち初唐の綺縟、猶ほ六朝粉華の遺なり、開元天寶、鬱勃として北地の風氣を恢復せしも、中晚漸やく輕靡に流れて、宋初西崑、又江南の賸馥に醉ふ、其の南北の文化を統合し、更に新に萌芽せる巴蜀の散文を加へ、華實共に全く、詞章理學並に盛なるは、唐宋の運、蓋し古今有數とす、胡元宋社を覆すこと、枯を拉き朽を摧

くが若し、殘暴淫荒、綱常を敗壞すること百年、其の宗教に於て發思巴喇嘛を傳へて、流傳今に至る、而かも彼れ猶ほ孔子を尊崇して大成至聖文宣王とせり、朱明徒らに舊物の復興に忙しく、滿清又襲うて之れを取る、而かも其の支那文物を崇尙すること、前代に加ふるあり、明氏の遺響、并て康熙の盛を鳴らして、新進の名家、競うて乾隆の化を揚げたり、嘉慶道光の後、益々下りて益々振はずと雖も、曾文正の人物文章、獨力中流の砥柱たり、流風餘韻、將相の能、湖南安徽に出づる者、猶ほ絶えざる也、今乃ち無前の雄略を奮ひ、遼東燕山の形勝を奪ひ、吭を扼して背を拊ち、禹域全土を控制するも、風を移し俗を易ふる、豈に胡服辮髮の末にして足ると云はんや、四億生口をして言靈の幸はふ國語以て其南北の官話に易へしむ、談容易に非じ、彼の利源論家の言ふ所、亦未だ遺策なしとせず、夫れ開化せる國民を征服して、其の貨權を擅占せし者、古羅馬の加爾答額に於ける、近ごろ英の印度に於けるが若き是なり、羅馬の誅求、巴爾巴里を

して永く墟草離々たらしめて、利源の涸渴を致し、印度は猶ほ混々として無盡の觀ありと雖も、其の風土英人の堪ふる所にあらず、戸口の移殖に益なし、支那の我と若し皮相見を去らば、其の開化相若ける也、滿蒙朔北の地、猶ほ蠻風を脱せずと雖も、風土の險惡は則ち濱海の地の比すべきにあらず、其中土は則ち戸口繁密、溢れて太平洋の沿岸を蠶蝕する者、皆其の流氓なり、大なる日本を建つること、豈に机上一夕の論にして能く當るべけんや。

且つ此等の議、皆日本に私す、列國並峙、各々其の雄を競ふ、故に國家主義、方さに社會萬象の上に加へて、倫理政治、皆此を以て準と爲す、此の時に當りて郷國を僻愛して、専ら此に利せんことを圖る者、情に於て嘉すべし、義に於て亦未だ失せりと爲さず、唯夫れ坤輿文明の進運、坤輿自ら之を營むか、將た之を使むる者ある耶、坤輿自ら營むが若きは、坤輿の内、封疆相割して、各々國家を爲す者、相資し相生するは、坤輿の自營を成す所

以なり、之を使しむる者あるが若きは、使むる者の意や、其れ必ず各々其の特能を發揮して、坤輿文明の大成を致さしむるに在り、必ず彼を憎み此を愛せざる也。且つ有餘不足相補足するは自然の數なり、世情動もすれば富資貴榮の有餘に益して、不足に給がざるを見て、淺見者乃ち裁うる者は之に培ひ、傾く者は之を覆すは、天の道なりといふ。知らず有餘に加益せば、適さに其の内より自ら腐敗するを致し、不足に培克すれば、死せずんば必ず激するを。故に有餘を割て不足に填ち、斯に逸者逸を以て自ら傷り、勞者勞に困憊せざることを得、個々の人然る也。國も亦此の如し、富資貴榮然る也、文物典章も亦此の如し。故に我の清國と、事意外に起り、而して竟に大角逐を見るの已むを得ざるに至りし者、釋して我實に命せらるゝ所ありて、其の天職を効す者なりといふ者あり、吾は則ち最も此の論を善しとす。

抑も所謂天職、亦言ひ易からざる也。輕卒なる者、動もすれば輒ち謂ふ、支

那の坤輿に在る、守舊の代表たり、而して日本其の旁らに國して、東洋進歩の先鞭たり、兩國の衝突は、守舊進歩二主義の衝突なり、我れ宜しく四億生口を警醒して、諸を進歩に趨かしめざるべからず、是れ我が天職なりと。其の謂ふ所進歩は、則ち近世西洋の文明形似を我に得るの謂なり、四五百年來、西洋文明の進運、誠に前古無き所と稱す、希臘の古文學を復興し、サラセンの開化を輸入し、教權の統一を破り、自由の思想を弘めてより、勃焉として隆洽、以て今日の極盛を致せり、目して進歩といふ允當を失ふと爲さず。然るに支那の果して守舊の代表たると否と、未だ遽かに斷ずべからざる者あり、三代の禮文一たび秦火に燔かれてより、國を爲す者皆古を尙で、以て之を復せんことを求む、封建井田の復た行ひ難きすら、輕銳の學人、猶主張して已まず、王安石一たび新法を行へば、群起之を咎め、後世之を毀る、守舊に似る也。顧ふに三代の禮文、久しく戰國の時に廢す、戰國處士の横議、其の言皆後代に垂るゝに足る、三代盛時の材

と雖も無き所なり、漢孔氏を宗とし、六經學官に立て、訓詁の學盛んなり、是れ猶ほアリストートルの後、煩瑣學派と爲るが若し、而かも魏晉六朝、佛敎新來の勢、潮の方さに至るが如く、儒の衰を補ひて、所謂震旦十三宗、蘭菊芳を競へり、唐は詩賦の極盛、諸體皆備はり、十道藩鎮、和庸銓衡、禮樂刑政、三代の後に在て、美を盡し善を盡せり、散文宋に熟し、心性を論ずること精微に入る、其の末や往々諸科を統合して、實驗史蹟に志ある者あり、王應麟、馬端臨は實に明清考證家の先聲たり、一たひ胡元に挫かれしも、有明の興復、猶ほ王氏の學あり、二たひ滿清に頓して、學博洽考證に偏し、且つ科擧制定まりて、士精を四子五經に耗し、靈能異材、皆爲めに溷晦す、而かも三代以下唐宋に至る、世に隆汚あるも、代各特色の文明あり、變して而して遞移す、此れ西人の所謂進歩ならば、支那未だ嘗て進歩無くばあらず、元以下の挫折は、晉の五胡に擾さるゝに類す、焉ぞ其の文物の中ごろ衰ふるは、適さに後の大成を待つ所以にして、愛親覺羅氏に繼ぐ

者、唐の漢番西域の開化を集めて大成せるが若くならざること知らんや、果して以て守舊と爲すも、其の西洋文明を探りて進歩に趨く、必ず我が紹介を待つべしと謂ふは、亦怪しむべきなり、何となれば支那の西洋に交通する、固より我より舊く、利瑪竇來りし後、加特力の宣教師、深く其の内地に入りしは、早く我が鎖港攘夷の令嚴なる時に在り、曆算技巧は康熙已に彼に採り、美術貨珍、海舶の齋らす所、皆我に先せり、其の今日に於ける、彼も亦生員を派遣して、直ちに西洋に留學せしむ、何ぞ必ずしも我に介して而して之を學ぶの迂を爲さんや。

曰く是れ器の進歩のみ、かの道に至りては、支那の尊大にして自ら高うする、其の道に非ずんば、以て道と爲さず、故に歐洲近世の思想、皆會通することなくして、徒らに之を峻拒す、而して我は則ち早く其の理義を喜び、憲章文爲、學官教育、一に此に規倣す、西人の支那學風に通せざる、其の誘掖して新思想に啓導するは、殆ど能し難き所、獨り我は則ち嚮者は支

那の學を傳へて、百家俱に播し、今は又西洋思想に通して、其の堂奥に薄る、是れ以て兩者に介して以て支那を變ずべしと。是の言や尤も理に近くして、而して其實尤も謬大なる者なり。近世西洋の思想、之を始むるに疑を以てし、之を行るに放縱を以てし、而して思想の自由、研究の自由と稱せり、故に其の利や、新を索め奇を發くに於て、拘束せらるる所なく、結構の諧和を破りて、美の定調を亂るを愛まず、倫理の秩序を犯して、善の律法を廢するを避けず、物の真相、事の眞態、盡く前に呈露して、能く其の醜を掩ふことなし、而して其の結果や、人間功利の情に投して、利用厚生の方、啓發して遺す無からんとを期せり、此れ形而下の文明、無前の高度に達せる所以、而して其の弊も亦此に存す。思想已に多岐にして統紀なく、行實専ら力能を尙で、義制を後にす、故に其の美を説くや、寫生摸眞に流れて、結想の創才を遺し、其の善を論ずるや、實利便宜を主として、天職の妙用を忽にす、人に征し、異邦に征して、其の身家、其の邦國を逸樂富

饒にせんことを求め、偶々結轄して通せざれば、爆然轟發、相殘虐を爲して恤まず、彼も亦其弊に堪へざらんとす、而して其の救治を求むと雖も、各々其の欲を伸べて、而かも各皆足ることあらんとを欲し、曾て自ら矩度に就て、相譲り相割くを欲せざれば、血を以て血を洗ふ、何の時か已むべけん。此の思想や我れ已に浮慕艶羨、倣ふて而して其の弊を承けんとす、即ち介して傳ふべきも、何ぞ其の前轍を指して、人をして之を復ましむるに忍びんや、醫の術或は微菌を以て微菌を除く、西洋の弊を以て支那の弊を救ふ、奇法にあらずとせず、而も前の微菌去りて、後の微菌仍は健康を傷らば、更に之を奈何すべき、好て危道を取るは、其の内質を養て、漸やく平康に復せんに孰若そ。且つ支那汙れる乎と雖も、所謂文武之政、布在方策、前時文明の跡、典籍存する者、汗牛充棟、未だ全く繹ぬべからずとせず。かの印度の教旨、怪詭空遠なるすら、歐洲の學者、沙を淘して金を篩ひ、珍重の餘、百年來の學風、頗る爲めに變化するを致す、支那の平實穩



健、好奇の念を動かし難きを以て、其の入ることや遅からんと雖も、己に入る、其の殘肴冷炙も、猶ほ將さに彼が甘美に傷るゝ口腹を愈やすに足らんとす。乃ち我の天職、其の燼餘を吹いて死灰再燃せしめずして、而して又之に水を濺ぐに在りとせんか。

日本の天職は日本の天職なり、西洋の文明を介して、之を支那に傳へ、之を東洋に弘むるにあらざるなり、支那の舊物を保ちて、之を西洋に傳るにあらざるなり、我が日本の文明、日本の趣味、之を天下に風靡し、之を坤輿に光被するに在るなり、我れ東洋に國するを以て、東洋諸國、支那最と爲すを以て、之を爲すこと必ず支那を主とせざるべからざる也。

右の斷篇は是れ明治廿七年、戰役方さに始まるの日草を起せる所に係る、原と一大論文を作さんと欲し、而して故ありて果さざりし者、今より之を觀る、其の推測中らざる者、頗る亦之あり、然れども余が支那

に對する意見は、其の大幹に於て、當時と大差あらず、觸緒隨感、皆此篇に論せんと期せし所の宗旨より流れ來り、特に其の小節目の時に變化せざるを得ざる者あるのみ、因て其の未完の稿なるを以てせずして、特に論纂の首に冠す。

### 東洋問題の講究に就て

劉慶二人の使命は、甚だ値なき者と斷ぜられたるも、其の初め伊藤侯延請の旨を帯び來りしことは、必ずしも訛傳にはあらざるが若し、若し使者にして其人を得、或は慶邸の若きをして、親しく伊藤侯を請はしめんに、伊藤侯は能く其の請に應じて、而して變法の顧問に備はるべきか、將た之に備はる準備あるべき乎、是れ獨り伊藤侯の爲にのみ發するに非ず、近日論者、往々易く東洋問題を談じ、動もすればかの康有爲等の敗を晒ふ、而かも其をして局に當らしめんに、何を以て彼が自強の望に副ふ

べきかは、茫然として定見なからん、是れ獨り康有爲等の晒ふに足らざるのみならず、又伊藤侯の危ぶむに足らざる也。

康有爲一派と云はず、凡そ支那の變法を言ふ者、其の書に著はす所に觀るに、現在制度國情の病弊、盡く諳知せざるなく、而して其の宜しく釐革振作すべき事體も、亦講究粗ぼ盡せり、而して近日論者の易く支那問題を談ずる者、此等の著述に於てすら、略ぼ查究を加へず、其の所論の得失すら、已に以て之を斷ずるに足らざれば、即ち一日之を延き之に問ふに、變法の實際問題を以てするあらんに、其の告語する所の肯綮に中らんと、を求むる、亦難からずや。康有爲が嘗て伊藤侯を嘲りし者、今に於て猶支那保全論者、分割論者が、彼間變法者流に晒はるべき者たらざらんや。朝鮮の改革すらも、井上伯の手、能く之を遂ぐる所にあらざりき、日本の現状すら、已に大隈伯、伊藤侯が其の政治上の施設に於て、目的の若く結果を收むるには大に過ぎたり、支那の龐然として大なるを以て、其の

奇異なる財政、變則なる統治、世界に類なければ、歐洲の名政治家と雖も、殆ど手を着くるを難すべき所、南洲、甲東、松菊諸人が創業の後を受けて、纔かに其の守成の功を收めし現存元勳輩が到底料理し得べきに非ず、况んや此より以下、么麼數子、易く支那の保全と分割とを言ふ、危い哉。

吾輩は現時彼間變法論者が所論の梗概なりとも、且らく方寸に存せんことを、此間保全、若しくは分割論者に望まざるを得ず、西太后は方に康有爲等の章疏、變法の書を読むと聞く、伊藤侯の若き者をして、實に彼の延請に遣はしめん時、其の奏對する所、又徒らに彼をして晒笑せしむるなからんことは、苟くも東洋問題を口にする者の宜しく意を留めざるべからざる所にあらずや。意ふに支那の龐大なる、有る所世界の政治家が手腕を施さんにも、甚だ大に過たり、周公、カイセル再生すとも、其の目的と結果と相副はしめんことは、殆ど望むべからず、唐宋以來、實に未だ一も此の如くして成就したる者あらざる也。故に之に處するの道、或は

専ら新智識の刺激と、新文明の光被とを之れ務めて、其の如何に影響して如何に成熟するかは、其の至る所に縦せざるべからざるやも、亦未だ知るべからず、然るに此等の意見を決定する者、亦支那の歴史と現状と、其の世界文明との觸接とに徴して、明らかに辯じ、審らかに思ふの後に在らざるべからず。かの清廷の運命を談ずるが若きも、清廷の運命の決し難きに非ずして、實に奄有者が、清廷より寛簡なる治術を以て人心を撫恤すると、清廷より精密なる兵備を以て疆域を防護するとの二者、並立するを得べきかの難問決せざる也。是れ豈に易く東洋問題を談じ、易く大局打算を談ずる者の決し得る所ならんや。かの戦利艦還付の説の瑣屑と雖も、固より未だ論者をして、其虚與實得の術たるを曉らしむるに足らざる者、今日の實狀なるを奈何せんや。(明治三十二年八月十四日稿)

### 支那改革の難易

タイムスの北京通信員は、日英米三國にして同盟せば、以て清國を改革すべしと曰ふ、此れ甚だ庸常なる議論にして、必ずしもタイムス通信員の言を待て知るべきにあらず、清國は改革の難きに非ず、而して其の成功を收むるの難き也、其の人民は改革の必要を知らしむるの難きにあらず、而して何處より手を着くべきかを知るの難き也。

北宋の大變法家なる王安石は、青苗錢の法を以て、天下に禍すと稱せらる、而かも青苗錢の法、安石より始まらず、李參が陝西の轉運使たりし時之を行て効あり、安石が鄞縣に知たりしや、亦之を行ひしに、民甚だ之を便とせり、然るに其一縣に施して効あるを以て、之を天下に行ふに及では、則ち汚吏資縁して奸を行ひ、遂に失敗に歸せり。且支那の政を言ふ者、周官に師法せざるなし、而も之を實行せんとして敗れし者、王莽、安石、方孝孺諸人、乃ち身を亡ぼし國を誤まるに至る。意ふに周公の法は、以て方幾千里の間に行ふべくして、必ずしも旬服俟服に行はれず、况んや要荒

鄙裔をや、然るに秦漢以後、郡縣の治、四海の内、皆王畿たり、幅員三代に什百倍し、必ず千里の間に行ふ所を以て、之を萬里の域に行はんとすれば、則ち禍敗之に踵ぐ。支那の政治、毎に英氣ありて事を好む者に便ならざるや、蓋し此の如き者あり、而して彼間の人も亦自ら其故を知る能はず。現に光緒帝の昨年、に於ける改革の若き、大號煥發、志美ならざるに非ず、事勉めざるに非ず、而かも雨下せる上諭は、多半は空文たり、徒らに守舊の人心を激動して、大事を債らしむるに終り、康有爲諸人は王叔文、王伋等の唐に於ける、齊泰、黃子澄の明に於るが若くにして、其事浪焉たり、支那の改革、談豈容易ならんや。

近時支那の所謂志士なる者の改革に關する言議を閱するに、其の數百年來の病弊、明に之を認めざるに非ず、而して西法の宜く用ふべき所の者、詳かに之を講ぜざるに非ず、唯舉て之を支那人民の上に措き、其能く功あるを得べきや否は、實に大疑問たり。支那の若く、其の人民の富實に

して、而して其政府の窮乏を患ふる邦國は、未だ曾て有らず、故に支那改革の第一着は、其の財政を整頓し、現在政府歳入に比して、少くも五倍以上の收入を得せしめざるべからざるに、剛毅が江南に於ける搜括手段の若き、固より其法を失せる者、而して其の税法を歐洲に師法せざるべからずとして、乃ち支那官吏をして歐洲の税法を行はしめんに、豈安石が青苗錢を天下に行ひし轍を履まざらんや、ロバート、ハートの成功は、之を天下に推すべからざる理、略ぼ知る可き也。

タイムス通信員が、清國改革を談ずるの容易なる者、豈に此等の消息を解了して、而して之れを言ふか、未だ其の詳かなるを知る能はざるも、要するに支那の改革は、人爲の手段を以て、之を歲月に期するを得べきと、其の風氣の開發を務めて、自然に機熟するを待つべきとは、大なる研覈を要する疑問たり。かの好奇心に驅られて、其の革命を豫想する者が、望を讀書人に繋くるの不可なるは論なく、かの會匪の若き、漢高明祖、成功

者の系統に屬するの徒を待むも、亦甚だ危ぶむべしとするを免かれず。此の疑問釋了する後にあらざれば、眞成なる支那保全の手段も定まる能はず、意ふに世の支那問題研究者は、果して此の疑問をすら心に存するあるか、吾輩不肖、聊か之が解決に志あり、庶幾くは研覈數月の後、其の所得を以て之を讀者に質すを得ん。(明治三十二年八月廿七日稿)

以上二篇游意已に決して未だ發程せざる前に草したる也



## 清國に於ける專管居留地

### 其一

清國諸開港場に於ける我が專管居留地の不振は、足未だ清國の地を踏まざる者と雖も、嗚々せざるなし、而かも是れ實に蔽ふべからざるの現狀に屬す、乃ち其の由來する所に至ては、萬口一辭、罪を我が商業家が進で其の利權を開拓するの氣力なきに歸せずんばならず。是れ實に之れあり、然れども我が商業家の指を清國貿易に染むるや、之を前時英國の若き、競争者なきの地に獨り自ら擴張せるに比して、較や力を爲し難き者あり、北清貿易の偶然成功せるあるも、未だ遽かに同一例を以て、般富充實せる長江流域を視るべからず。蘇杭の地は、其の開港の利、最も厚く望を屬せられし所たるを以て、今日に及では又其の貿易に於て寸長なき者、最も世論の是非を招く所と爲る、然るに蘇杭の貿易に於て成功なきは、亦獨り我邦のみとせず、蘇州に嘗て一英商の來り營むあり、而して

尋で閉づ、居留地の利用、大に快敏なるを得ざるは、各國同じく然り。且つ單に通商上より見を起さば、居留地を以て專管とするの利害も亦一の疑問たり、居留地の歴史に最大適例を示すべき上海に在て、雜居地たる英米居留地の成功が、專管地たる佛國居留地の上に抜くを觀て、以て推斷し難からず。故に清國に於ける專管居留地、就中蘇杭兩地の不振は、單に我が商業家の氣力なきに由るに非ずして、更に幾多の緣由ある也。是を以て若し清國に於ける居留地の不振を咎めば、最も其の專管地とせるの力を量らざりしを咎めざるべからず、北清貿易が近時の盛況を呈せしは、更に專管居留地と相關涉する所あらず、獨逸の貿易は、英國をして其の長足の進歩に懼怖せしむるに足る者なり、而かも彼は上海に於てすら專管居留地を有せざる也。但だ吾輩は猶ほ他の理由ありて、我が到る處に專管居留地を有せるを不利とせざる者なり、而して大に之を利用する所以を講究せんとする者なり。他なし支那開發に最も適好

なる機會を把握すべきの望、此に繋る有るが爲なり。少しく實例に徴して、吾が言の河漢ならざるを明にせんか。上海居留地に於ける支那人の富は、居留外國人の富に幾十倍するを知らざる也。而かも彼等は上海市政に參與するの權利を有せず、甚しきは外國人が設立せる公園には、支那紳士の出入を准されざる若き、凡そ事の外國人と交渉せる者ある、十二分の道理を有するも、動もすれば其の權利を蹂躪せらるゝ若き、侮蔑枉屈を被ること、勝けて計るべからず、居留地を劃して、隱然清國政府の權力及ばざる獨立市を形成する觀あり。然るに支那人に在ては猶其の本國權力の及ばざる所たる上海居留地内に在ることの安全は、遙かに其本國權力の及ぶ所たる他地方に在るより愈れりとする所にして、上海居留地の繁華は、過半此等の見地より誘致されたるを見る。何となれば其の法術は、支那官吏の苞苴を貪りて、兩造の産を傾くるに至らざれば、已む期なきが若くならざる也。其の警察は緝捕

効あり、盜賊の患なし、支那巡捕の自ら奸宄の淵藪たるが若くならざる也、生命財産の安固は、尙ほ以て信托するに足る、支那人をして西歐政治の美を感ぜしむる者は、上海居留地制度、實に與て力あり、其人心に敷治するや、決して精銳の兵器、名譽ある戰捷の下に在らず。近日に至て蘇州の地、開港場と爲るや、彼地の洋務局は、乃ち其制度に撫倣するに意あり、外國居留地の隣地に於て、一區を劃し、其市街道路、建築の規制、一に上海居留地に則を取り、警察を設け、巡捕を密にし、外觀の整美、頗る稱歎すべき者あり、一二年ならずして、商民の此區内に雲集するを致し、馬車を驅り、傑閣に住し、卷煙草を喫し、シャンペンを飲む、江南浮華の習氣、一時煥發して、蘇州從來最も繁華の區たる、閩門内外の街坊も、殆ど遜色あるを覺るに至る。然るに其の制度外觀の美は誠に之あり、但だ操縱する者の支那人たるを以て、弊害從て生じ、其の警察巡捕の不信用は、竟に從來支那巡捕と異なるなきに至り、刻意撫倣の制度も、將さに其の効を失はん

とす。此の實例の得失は吾輩をして我專管居留地の最も適好なる利用法を發明せしめて餘師ある者なり。吾輩の所見を以てすれば、我邦已に通商上の得失を審かにせずして、專管居留地を擧取す、宜しく更に眼を通商以外の利害に着けて、以て其の利用を大にすべし、即ち此を以て、模範行政區と爲し、清國官民に示すに、變法の利益を以てし、其嚮慕改圖の途を啓くは、專管居留地の利用に於て、計の最も得たる者とする也。故に我が薄資の商業家に強ふるに、進で利益なきの地に危険の商業を試みんとを以てするを要せず、之を試みる者に乏しきも、亦遽かに患ふるに足らず、先づ居留地に招徠するを務むべきは、清國人に在り。蘇杭兩地の如きは、苟くも其居留地にして、市區の規畫、道路の開通だに一たび成らば、清國人の此に移住し、我が警察權の下に立たんことを希ふ者、決して少からざるべきは、疑を容れざる所たり。市區の規畫、道路の開通は、蘇杭兩地を通ずるも、十萬圓を出でずして辨む得べし、而して清國人にして

陸續移住するに至らんには、此等の費用を償て餘あるのみならず、領事館、郵便局、警察等、設置の費の若きも、必ずしも國庫を煩さるに至るべく、此の如くして彼地の富商豪賈を集中するを得ば、我が商業家が通商上の端緒も亦因て以て容易に尋繹するを得べし。加ふるに我が專管居留地内の行政をして、決して支那人の權利を蹂躪せず、其をして上海の利ありて、而して其の横暴無からしめば、則ち居留地の繁榮は三年を出でずして、現在地面の狹隘を感ずるに至るべく、豈に復た許大の美地、徒らに草芊々たるに委するの患あらんや。

蓋し上海の繁華も、亦彼の支那人を縱して、其の移住を准せるの結果なり、上海縣城は舊と松江府の一鄙地、沮洳の郷に過ぎず、居留外人の數、万人に及ばず、而して今日の繁盛を致せる者は、實にかの髮匪の亂、安全なる避難地たりしに由り、蘇省の繁華全く此處に吸收せられしが爲め也。今や我が專管居留地も亦平日に於て、已に支那商民をして其の政府の

培克誅求に對する避難地たらしめて餘あらんとす、上海の成功、之を蘇杭の若きに再びし難きを慮るに足らざる耳。若し其の行政に於て、更に其の習俗、衛生等百般の點に於て、注意を續密にし、規制を嚴整にし、居留地内の支那人をして、文明風の生活が却て便宜多く、其の行政が極めて信頼すべき者たるを知らしめば、則ち今日苦言痛語、之をかの當局に望んで、而して得ざる所の變法、之を實力ある民間の要求より成立せしむるの漸を成すこと、架空の結想と言ふべからざる也、其れ此の如くにして、而る後真正の變法以て行ふべし。

彼邦の志士にして稍や識見ある者は、亦明らかに徒法の効あるべからず、所謂變法、之を今日の支那人の手に成功せんこと、の望むべからざるを悟り、苟くも變法の機あらしめば、則ち多く邦人を聘し、之をして要路に當りて、事々に成例あらしめ、然る後清國官民をして其の貽範に率由せしむるを便とすべしと唱ふる者あり、海關郵政が外人の成例に成功



せるを觀れば、此議の根據あるを見るに足り、而して變法の道、此を措て他あらざるを知るを得べし。然らば則ち吾輩が專管居留地を以て模範行政區とするの計、最も以て清國官民開導の急務とすべからざらんや。』清國開導を主張する論者が毎に遺す所の議あり、何ぞや變法の大成功は、其習俗を變せずして能すべからざると、是れなり、其の孤立自衛して官府に信賴せず、社會に信賴せざるの風を改めて、公共心の發達を促がすに非ずんば、變法の結果は、亦汚吏の私便に供して已むに過ぎざらんとす。清國通商を主張する論者が常に遺す所の議あり、何ぞや、散漫せる商業を一燒點に集中して、其の物貨の運行を察するを後にして、徒らに無經驗の地に無標準の營業を強勸するの不利たるを覺らざること、是なり、英國人が埠頭に安坐して、物貨の需要を待ち、而して意外の利益を享けし時代は、將に終らんとす、今日の支那貿易は、須らく未製品の輸出を以て一大眼目とすべし、新開港場に向て、直ちに輸入貿易の成功を望

むは、其の望み已に左ふ、其の功の成らざるに異しむことなきなり。吾輩が專管屬地利用策は以上の二議に於て、兩つながら其の過ちを避けて其利に就くことを得べき者なり、此論未だ悉さざる所あり、將さに他日を待て重ねて之を細説せんとす。(明治三十二年十二月八日及び九日稿)

## 其二

清國に於ける我が專管居留地を以て、模範行政區の端緒とすべしとは、前に已に之を道へり、請ふ少しく一二重要なる專管居留地の現狀を説て、以て前議を補はんか。

北清地方、天津、牛莊の若きは、其の貿易の進歩、昨今に於て著しき成功を見るも、其風氣の開發は、猶ほ江南地方の若きこと能はず、其天然の地力も、亦文明國の政治を敷て、得失相償はざるの疑なきに非ず、されば姑らく其貿易成功を恃みて、專管居留地の利用も、亦自然の發達に任ずるに如かず。但だ天津の如き、現在居留地區域内に存する支那人の家屋は、其

市區の區畫に差支なき限り、必しも之が立退を強制して、民情に違ふを要せず、又許多の費用を徒糜して、遽かに我商民移住の成算なき、空漠の居留地を形成するを須るざるべし。南方に至りては、上海は近日各國共同の居留地區域を擴張し、我邦が專管居留地を要求せざるは、寧ろ計を得たる者とすべければ、必ずしも論せず。漢口に於ける專管居留地の若き、其市場従前發達の速度を以て推せば、我が居留地の城壁外に在り、頗る北方に僻在するを以て、英、佛、露、獨の居留地が逐次に繁華と爲れる後に非ざれば、我が居留地の繁華は望むべからざるが若し、但だ數年の後、或は好良の埠頭たるなきを斷ずべからずと雖も、其地勢の江に瀕して、加ふるに蘆漢鐵路の終點に接せる利益を失ふに至らば、其の有望の度、實に十の六七を減すべし、而して是れ蘆漢鐵路に關係ある諸國の朶圖するを免かれざる所たれば、我が當局の最も注意を怠らざらんことを要す。若し夫れ模範行政區としての利用は、猶ほかの繁華の區たるべき

成算の定まれる日に待たざるべからず。模範行政區としての利用に、最も速かに奏効すべき見込あるは、吾輩は實にかの蘇杭兩地に在ることを信ず。

蘇杭兩地は、支那國內の關係より言ふも、原と工業生産地にして、物質集散の大市場に非ず、我工業家が進で此等地方に手を下すの企畫あらざるよりは、今後數年、貿易の大なる進歩を致すべき見込なしと謂ふも妄斷とせず。然るに盤門外に於ける蘇州の居留地は、其の一面、洋務局の擬制居留地に接せる部分、已に支那人の借地者、陸續として生ぜるを見、拱宸橋北なる杭州の居留地も、亦税關に接せる便宜より、其の繁華の區と爲るべきは、一兩年を出でじ、若し招徠の道を講じて、措置宜しきを得ば、模範行政區の成功は日を指して期すべし。且つ蘇杭は、現在支那文物最盛の地にして、其の殷富と奢華と、亦た此に若く者なく、其の新文明に嚮ひ易きも、此の如く便好なるはあらず、是れ寧ろ邦人が其の清明なる行

政的技倆を見はすべき最第一の地とせざらんや。聞く兩地の居留民、近ごろ居留地道路修造を政府に請願せんとするの企圖ありと、支那人招徠の第一急務は、實に居留地道路の修造に在り、是れにして苟くも成らば、招かずして來らんとす、吾輩は政府並びに議會が、須らく此の清國開發の長計を認めて、其の十万内外の費を吝まらず、之を許可せんことを切に希望す。

居留地を以て模範行政區とするの策に伴ふて、最も注意せざるべからざるは、領事官の選任を慎しむに在り、何となれば支那に於る各埠頭の領事官は、單に通商事務官として視るべからずして、實際上一種の外交官たらざる可らざるを以てなり、吾輩は將に稿を更て、再び此議を申明せんとす。(明治三十二年十二月十三日稿)

### 清國に於る領事官

#### 其 一

領事官なる者は、原と通商事務を辨理するを以て任と爲し、外交官が實際の關係事務を處措する者と、判然別あるは、論を待たざる所なり。惟だ清國に於ける領事官は、則ち稍や變例を以て視ざるべからざる者あり、是れ一は清國地方官の性質、他國の地方官と同じからざるに因り、二は清國に對する列國の態度、近年に至りて、單に修交通商を以て目的とするに非ざるに因る、請ふ少しく之を言はん。

清國地方官は總督、若くは巡撫を以て最も高しとす、此の二職は有明以來、一種變則の變遷を経過し、臨時の職より常設の官と變ぜる者たり、明の初制は、承宣布政使を以て最高地方官とし、六部尙書侍郎と輕重する所なかりしが、正統以後に及びては終に然るを得ず、而して邊疆事あるより、遂に總督巡撫の設あるに至り、都察院の正副都御史を兼ねて、一方

の政、天子に代りて處分するを得、但だ皆事に因りて特設して、定めて常制と爲さざりし者、清朝に至りて、之を令典に著し、疆理の任を以て、兵馬の權を握る、故に其の制度は、大小官職、互に相却制して、豪傑の地方官たる者が心を生ずるを防杜すること、甚だ周備せりと雖も、而かも其の任に在るや、實に一方の土、百司の事を統べて、儼然たる藩國の若し、疆場事多く、叛亂數々起り、專任の必要ありてより、中央の權益す軽く、而して地方尾大の勢生ず、今日に至りては、總督巡撫の官、名は朝廷一紙の令、能く之を更置して、聲息を動かさざるを得べき所たるも、其實は則ち地方の大官、勢力を一方に樹植せる者は、中央政府の命、一々奉承するが如き従順なる者に非ず、其の大號威令を拒絶するの力なしと雖も、而かも左右支吾、以て其の實行を頓挫するに足る。且つ南北兩洋大臣の設ありてより、國際の交渉も、一時此等疆吏に決すること數十年、總理衙門の設も、虛名たるに過ぎざりしことあり。日清戰役以後、權力を中央に集むるの跡

あるも、而かも居留地の選定、鑛山鐵道諸權利の要求、教案の難件、一たびは督撫の手を経て勘査せられざることなく、去春に至りては、又總理衙門事務の一部を割て、督撫が直接に外國交渉に當るの制を定めたり。夫れ此の如く、清國の政治上、實際の權力は、各疆吏に分與せられ、地方に關する交渉事務の若きは、之を地方大官に謀ること、是を總理衙門に應酬するよりも便捷なり、是れ駐清領事官たる者、辨理の迅速を要する事件に於て、公使館の手を経ずして、直ちに交渉するを得るの便宜なかるべかざる所以の一。

日清戰役以前に於ては、列國の支那に對する、即ち禍心を包藏せしむとも、猶ほ敢然として之れを公表するの忌憚なきに至らざりき、支那分割の問題、時として世論に上ることなきにあらざるも、猶ほ悠遠なる空想として、旦夕に實行し得べしとは目せられざりし也。故に其の交渉も、頗る單純にして、料理極めて容易、露國が北支那戰爭に乗じて、滿洲の沿海

地方を割取し、回匪の亂に乗じて、一時伊犁を占領し、佛國が干戈を稱げて、越南を割取せる等の事あるも、其の取與分明にして、清國を待するに一獨立大國を以てするは、則ち之れ有りき。戰役以後、諸種の要求、紛々として起り、土地の租借、鑛山、鐵道、諸權利の獲得、勢力區域の劃定等、支那帝國を視ること、一の統制なき土地と一間のみ。列國皆な競て、先づ佔據するを以て勝を争ふが故に、一々之れを北京公署に委して、其の總理衙門と交渉し、總理衙門が各省督撫に照會して意見を定むるを待つゝの迂路を取るに違わらず、先づ地方大官に交渉して、我より要求の聽否を認め得るの便捷なるに如かず、去年四明公所の件に關して、南洋大臣と佛領事と往復の跡を観るも、以て地方大官の重きを置かざるべからざるを見るべし。且つ督撫は其の管内に於て、練兵の爲に外國將校を聘し、學校に外國教師を雇ふ等、皆實際專斷自主して、中央政府の全く關知せざる所たり、此等の交渉を機敏にして、到る處に自國の感化を廣布するは、目

今列國の務むる所、其の周旋往々隱秘の間に行はる。然らば則ち督撫の居城に近き領事官が、實際外交官の任に當りて、機敏に周旋するの必要あるも、亦明白ならずや。

此の觀察點よりして、我が在清國の領事官を評せば、其の任に適せる者幾人ぞ、是れ選任の宜しく注意せざるべからざる者、然るに一領事あり、余に語て曰く、我輩の無能なるは、本國外務省の無能の反影のみ、外務攻撃の犠牲として、駐劄を免ぜらるゝ北京公使の若きは、冤の甚しき者、亦憐むべからずやと。知らず我が外務省は、何を以て此の如き領事の放言に對せんとするか。(明治三十三年一月四日稿)

## 其 二

既已に支那に於る領事官は、實際外交官たるの資格と伎倆となかるべからざることを論じたり、意ふに現在の外務當局に責むるに、支那問題に對して、機敏なる措置を以てし、適當なる人物の配置を以てせんこと

ば、ただ難しとする所なるべきも、現在當局が難ずる所なるを以て、之を責むることを廢するは、我輩の言責を怠るなり、故に其の言の行はれざるを覺悟して、亦嘔々を費すの竟に己むべからざるなり。

現在清國に於て、伎倆ある領事官の必要なることは、其の實際の得失より校量すれば、寧ろ歐洲の大市府に於けるよりも切なる者あり。然るに從來領事官の地位は、かの崇歐の餘習を承けて、歐洲駐劄を重しとし、清國駐劄を輕しとし、唯だ輕しとするのみならずして、又此を鄙厭するの風あるは、尤も急に改めざるべからざる弊なり。此の弊や決して改め難からず、外務省にして駐清領事官の地位を高め、其の選叙必らず伎倆ある人物を需むるに到らば、人材の乏しきこと、各省中に在て最も甚しと稱する外務省と雖も、豈に終に數人の適任者を得るに苦しまんや。陸軍省の若き、清國派遣の武官、往々其人を得、現に一の陸軍大尉に過ぎざる井戸川氏の若きを以て、其重慶に在るや、能く四川總督奎俊を説て、提督

丁鴻臣等をして東方觀光の舉あらしむ。若し北京公署をして其人あらしめば、疆臣中の人材と稱せらるゝ、陝甘總督陶模が、近日北京に來るべきの上諭を奉ぜる若き、之を機として陝甘地方の將校をして、亦東方觀光の舉あらしめんことも難からざるべし。甘肅新疆に五千乃至一萬の新式訓練兵あらば、彼の虎耽狼視の邦と雖も、頗る後顧の患ありて、其の全力を絶東の經營に竭し難きや、的なり、絶東問題の一部を移して、之を中亞に發せしめば、我邦の幸、果して如何とか爲す、而して喀什噶爾地方の屢ば警報ある、陝甘總督、新疆巡撫、皆其の防衛を固うするに意なき者にあらざる也。浙江に於ける武備學堂の總教習に、我が武官ある若き、若し各地駐劄の領事官をして、意を用ゐること、杭州の領事官の若くならしめば、此の例之を其他省城に及ぼし難からざるべし。吾輩は某開港場に於て、新に一書院の設立せられし際、在留邦人、該地の本邦領事に勸むるに、此の如き好機、須らく竭力周旋して、其の教官に日本人を聘用せし

むべきを以てせるに、領事は冷然として、果して然らば足下能く無報酬にして其任に當らんとせらるべきかと答へたりしことを聞けり、用心此の如く疎冷にして、曷ぞ能く清國問題に關して、他列國と比肩並駕することを得んや。

其の領事館設置の若きも、若し一人の居留民もなき歐洲の市府にすらも、之を設置すべくば、清國の若きは、其の設置を要すべき開埠場、豈に更に之なからんや。外務の領事館配置の若きは、往々其の當を得ざる者あらざるかを疑ふべき者あり、但だ吾輩は沙市の若き地方に、一時設置せしを以て之を得たりと爲す者に非ず、然れども南京の若き、其の兩江總督の居城たる上より言ふも決して輕視すべきの地に非ず、况んや東本願寺の若き、已に學校を此に開けるあり、其人商賈に非ざるも、居留者の數は、將さに漢口、杭州等に雁行せんとするの傾向あるをや。其他九江の吾輩が宿論たる福建江西鐵道敷設權の必要と相關し、鎮江の内河航路

擴張と相關するに至るべきが如き、安慶の安徽の省城として江北岸の要鎮たり、江陰の長江の關隘として注意の價值あるが若き、皆領事館の設置、若くは武官駐在の必要あることを忘るべからざる者なり。夫れ日露の間に、大なる衝突なくして終らざるべからざるは、近日に至りて苟くも眼を外交に着くる者の皆疑はざる所、且つ露國は方さに東三省の經營に忙しく、殆ど未だ他に及ぶに遑あらず、英國の南阿に於けるは、則ち萬目の睹る所の若し、即今實に我邦の最も力を爲し易き時にあらずや。此時に當りて、其の進取の經營を爲し得ざるは、姑らく論ぜず、其の平生の宜しく講究すべき所に於てすらも、猶ほ意を留むることを知らず。數月の後、東方の事復た般なるに至り、乃ち遽に慌忙して之に應ぜん。と欲するも、亦ただ難からずや。(明治三十三年一月十三日稿)

## 支那の内河航路

專管居留地經營の必要は、吾輩の所論、聊か世議を動かすの効ありて衆議院に於ける質問となり、貴族院に於ける建議と爲り、政府も亦稍や醒悟する所あり、將さに此に對する處置を定めんとする者の若し、此れ國家の慶なり、專管居留地問題と相並馳して、現在の支那經營に最も必要なるは、蓋し内河航路の擴張なり、今や支那に對する經營は、漸やく疎大なる保全論より、移りて實際問題に入らんとし、而して政府と議會と、亦此問題を度外視する者に非ざれば、則ち此の如き好機會に際して、内河航路の擴張を苦勸せんと、必ずしも効なしと謂ふべからず。

意ふに我が支那經營中に於て、北清貿易の近年大に起色あるを除けば、小汽船内河航路の若く成效せる者は、寔に鮮しとす、固より其事業は微微たる者、現在の航路は、僅かに滬杭間、滬蘇間の二線に過ぎずして、蘇杭間の聯絡すら未だ成らず、蘇州鎮江の大運河航路の企畫せられざるに

論なしと雖も、而かも支那の内地に入り、利に敏なる支那人と競争して、駸々之れに駕軼するの實ある者、凡百邦人事業中唯だ此あるのみとすれば、其の事業の微少を以て、決して之を輕ずべからず、郵船會社の香港浦鹽航路は、單に支那沿岸を目的とするに非ず、昨年の末に開ける上海天津航路の成績は、未だ聞く所あらず、大坂商船會社の長江航路は、猶未だ英、清兩國の航業と競争するの地に進まず、此間に於て、小汽船航業の獨り觀るべきある者は、豈に小資本の經營は、恰かも我が航業者に取て、手頃の事業にもあり、航行の規定、船客の待遇は、流石に支那航業者よりは注意深く、而して其の少額の報酬を以て事に當ることを得るの便は、遠く外國人の及ぶ所にあらざるを以てするか。夫れ此の如く、成功の要素にして、明白に具備するを以てすれば、則ち今後航路の擴張や、亦必ず敗跌の患なきを信ずるを得べし。

聞く蘇滬杭滬の航業に已に成功したる白岩氏は、險を冒して湖南の湘



潭に至り、洞庭湖及び湘水航路を視察し、其の開航の利を認めたりと。此の漢口湘潭間航路には、現に長清輪船公司なる者ありて、不定期の航行を爲し、近日に至り、外國人が此航路に注目するを知て、名は定期航路に改めたりと稱すれども、其の實は未だ行はれざるが若し、是れ宜しく乗ずべき時機とす。又た漢口より襄陽に至る、漢水の航路の若きも、須からず、注目せざるべからざるもの、且つ洞庭湖の航路にして已に成功すべしとせば、鄱陽湖の航路も、亦た九江南昌間を航行するの利益あるべきなり、前に言へる大運河の航路の若きは、其の淤塞して舟を行るべからざる部分の外は、長江と交叉して、大陸最富盛の地方を申通し、杭、蘇、常、鎮江、揚州、淮安等より、以て濟南、天津に及ぶ大水道、其の交通の利益は豈に大に長江に減すべき者ならんや。若し航業者にして、規畫を誤らず、堅忍事に従ひ、而して政府當局の奨励、亦其の宜しきを得ば、此の輕ずべからざる利源は、我が手中に落ち來らざるを患ひず、而して其の成功は或は

外海、長江の大航路よりも確實なる者あらんとす。政府及び兩院の有識が、此の重要問題に注意するを遣れざらんこと、切望に堪へざる也。近日は北京朝廷の變報、頗る世人の好奇心を惹き動かして、邦人の得意なる揣摩臆測を逞しうし、東邦大變の空想を胸中に描く志士、甚だ乏しからざるに似たり。然るに支那宮廷の變事は、毎々大なる影響を全國に與ふることなきを例とする者の若く、かの地方愛國者が檄を飛ばして、廢立に反對すといふ上海電報の若きは、蓋し滬上新聞業者の相驚懼せるより起れる風説に過ぎざるべければ、此れ等變事は、寧ろ冷眼に看過するを妨げず、而して熱中して一日を緩うすべからざるは、實に實業上より實際の支那經營に在れば、吾輩はかの支那論者に望むに、一時の問題に驚擾するを須るずして、而して徐かに長計を策せんことを勧めざるを得ず、偶々内河航路を議するに因りて、此に論じ及ぶと云ふ。

## 支那留學生の簡擇

東亞問題の切急、一般に認めらるゝと共に、支那留學生の派遣、漸く多くなり行くは、喜ぶべき現象なり、三井物産會社は其の業務の必要上より、他に先て修業生見習生の派遣ありしが、尋で正金銀行も亦大學出身者をして、語學研究の爲めに南北中央地方に駐在せしめ、近日に及では、東亞同文會の留學生が陸續として渡航するあり、此れ皆外務、農商務等政府の留學生以外に在て、民間の私派に屬する者なり。往年荒尾精氏が日清貿易研究所を上海に設け、其の生徒を募集するに、容易に員に満たざりしに比すれば、其の勢の難易、懸絶せりと謂ふべし。然るに吾輩は此の喜ぶべき現象に對して、猶ほ一片の杞憂を存するを免れざる者あり、何ぞや、かの支那留學生の簡擇、是れなり。

日清貿易研究所設立の當時に在ては、其の設立者の若き、既に一種氣概自ら喜ぶ人たり、而して其の募に應ずる書生は、固より一代の風潮に反

して、立身出世の容易なるべき學術を廢して、人の盡く厭棄せる支那に向ふ者たれば、其の英雄自ら居り、疎放豪宕相尙ひ、尋常の規矩に入らざるは、亦勢ひの免れざる所、研究所生徒の馭し難かりしは、當時事に當りし人、今に至りて之を説けり、故に其の講習する所、宜しく商工貿易の着實平和なる業務に在るべくして、而かも其の群居せる少年は、皆夢みる所は風雲變態に在り、期する所は四百餘州を席卷して、無前の功業を建つるに在り、殺伐風を成し、醉酗習と爲り、其の利や則ち日清戰役、軍事の偵察に任じて、危を履み險を冒し、身を捐て國に報ずるの士を生じ、而し其の弊や則ち在申邦人間に、醫すべからざる一種浪人の習弊を貽し、動もすれば在留少年を感染して、アルコホル性豪傑と爲らしむるを致す、餘風今に絶えず、前車の鑑、察せずんばあるべからざる也。

現今に在りては、支那留學志望者の得難きこと、決して往日の若くならず、若し其の人を簡擇せば、亦謹厚着實、警敏圓滑にして、實際實務の講習

に適當せる者を抜くべからざるに非ず、必ずしもかの膽氣鹿豪の英雄漢を待たざるべからざるに非ざる也。然るにかの支那留學生簡擇者の方鍼は、往々尙ほ舊時の遺習を帯びて、所謂氣槩ある少年を得んことに偏向するを免かれざるが若きは何ぞや。夫れ支那今日の形勢、之に對する邦人の研究は、並びにかの疎大なる經綸策に待つの時機已に過ぎたり、其の商工貿易の實務に従事すべき約束ある者は猶更の事なり、否ずして政治形勢の研究に従ふべき者と雖も、今の要する所は、大清會典の文字を通讀して、支那通を素人の間に極めんよりは、寧ろ一州一縣施設の實情、果して會典と幾何の差違あるかを精究するに在り、支那留學生ありてより、茲に幾年ぞ、其の支那の事情に通じ易き、勢負かに西人の上に在るを以て、而かも吾輩は現在支那財政の大略すらも、之を邦人の著より教へられずして、反て西人の著に頼りて之を學ばざるべからず。現在の留學生中に在りて、此等の用意を以て、研究に従事する者、吾輩は北

京に於て一人を見たり、而かも其人は官府及び團練の派遣生にはあらざりき。其餘上海地方に在る留學生の若きは、其の商工貿易の實務を研究すべき者も、皆殺伐醜醜、四百餘州席卷の策を高談するに、惟れ日も給らざるが若き状態なり。上海地方の現状彼が若く、而して上海を門戸として交通せざるべからざる蘇杭漢口の若き、亦動もすれば其の感染を受け易からんとするに、更にかの氣槩ある少年なる者を送つて、而して陸續として豪傑を製造せんとは、さらでだに豪傑の多過ぐる日本に取ては、薪上に油を加ふる類にあらざらんや。

蓋し支那大陸は、一望して人の雄心を鼓舞せられ易き處たるなり、故に詞客文士の閒遊者と雖も、彼地に於ける筆話は、動もすれだ全く形勢談を以て畢らざるべからざる事あり、故に支那に派遣すべき留學生は、寧ろ邦人間に在ては、沈實にして因循に近き程なるに須つありて、英氣過鋭の人に要すること少し。此の如くにして、徐に政治、經濟其他一切の事

情根柢より研究せしめ、以て他日臨機應變の實用を期すべし。單に氣槩ある少年を擇で、東亞經綸の空論と、醉醜豪傑の練習とに従事せしむるは、最早や今日に在て些の必要なきとなり。(明治三十三年二月廿六日稿)

### 支那問題と南京北京

支那問題研究者が、近日に至りて、俄然として南京に集注するに至りしは、注意すべき現象なりとす。昨秋までは僅かに東本願寺の日本語學校あるのみにして、其他は三井物産會社の修業生と、次で農商務省留學生の一部とが、此地に在るに過ぎりし者、今は則ち東亞同文會が南京同文書院を設くるありて、該會の派出員と留學生とは、已に十數名に上り、幹事長佐藤少將も、亦かの地に赴かんとすと云ふ。意ふに是れ近衛公爵の一游、總督劉坤一の眞摯なる同情を得たる者、興りて大に力あらんずばあらず、加ふるに長江沿岸に在つて其形勝最も人を動かすに足るの地

は、亦實に南京に若くは無ければ也。近日往々武昌の帝都たるに足るを説く者あり、夫れ武漢の地は、内地貿易の一大要會として、遙に南京の上に在れども、權力の重鎮たるべき都城としては、竟に南京の甚だ宜しきに若かず、是れ一たび兩地に遊ぶ者の直ちに感觸する所にして、殆ど絮説を要することなき者なり。南京は髮賊の亂を経て、頗る衰廢に屬すと雖も、而かも閑雅にして熱鬧ならず、山川縈迴して、尤も秀麗と稱す。學校設立の位置の若きには、蓋し此より適當なる地方あることなし。東亞同文會が書院を此に設け、留學生を此に集むる如きは、甚だ其の當を得たる者にして、吾輩は該會の首唱者に、早く已に上海の留學生を置くに不適當なるを知れる人ありて、遂に其の議を行ひしを以て、最も機宜を得たる者なりと爲す也。但だ學校以外の事業に於ても、亦力を南京に用ふる甚だ過ぐるは、則ち必ずしも贊する能はず、而して該會が太だ北京、天津を輕ずるの左計にあらざるかに疑を挾まざるを得ず。

南京の形勝は、天然にして奪ふべからざる者あり、而かも其の商業の要會にあらざるを以て、陪都の位地を失へること久しき今日に在ては、兩江總督の居城たる外、世局に大關係あるを得ず、此地に在る者の自から世情に濶なるを免れざるは、勢の已むを得ざる所なり、東亞同文會の若き有爲の目的を抱懐する團躰の首領が、此の如き閉地に居りて、日に繁き支那問題の解釋に應接せんとするは、吾輩未だ以て當を得たりと爲すこと能はず、且つ江南の雄鎮は、常に北京政府の猜忌を招き易き所之地なり、此の如き土地に在て、暴露せる勢力を樹植するは、或は北京政府に於ける、我邦の信用に累を及ぼすの患なしと謂ふことを得んや。若し夫れ支那の現勢に關する調査の必要ありとせば、南京の地は北京よりも、上海よりも更に廣東、武昌よりも猶ほ劣る所あり、吾輩は江南各衙門の聘請を受けしにもあらず、調査の便宜あるにも非ずして、語學研究以上の必要ある人物が、南京に駐留するの適當なるを知ること能はざる

也。

抑も近時の支那研究者が、何が故に甚しく北清を輕視するか、吾輩が亦其解を得るに苦しむ所なり、姑らく貿易上に於ける長足の進歩を別問題とするも、北洋留學生の我邦に來る者、決して江南、湖廣に減せず、天津の若きは、時務に通達せる人、亦決して上海に劣らずして、而して或は湖北に加ふるあり、但だ其北京に近く、一切の勢力は、竟に北京に牽制せらるゝを免かれずして、而して北京は實に排外黨の巢窟たり、邦人の行き遊ぶ者、與に談すべきの人なく、何となく陰鬱にして、甚だ不愉快を感ずるに因り、此間に在て手を下すに意なきを致さしむる耳、然れども北京公使館の若きは、實に局外有力者の刺激を受くべき必要あり、且つ其人を得て北京に於ける内外國人に交遊し、暗々裏に勢力を樹植せしめば、其の支那事業に効力あること、決して其他各地方の比にあらず、現に英露諸國は、皆此の方鍼を取りて、彼が若き結果を生ずる者、タイムス通信

者モリソンが勢力と行動とを察せば、思半に過ぐべし、而して我が有力なる團躰は、豈に北京を以て彼が如き公使館に打ち任せて顧みるなかるべしと謂ふ乎。乃ち此の如き大希望なしとするも、早晚支那の料理に當らんことを自ら期する團躰が、其政務の詳細なる調査をも爲さざるは、極めて不覺悟といふべく、而も之を爲さんとするには、固より北京より適當なるの地ある可らず、而して往々力を南方に用ゐるんが爲に、北京の空虛を避けざる議あるに至りては、誤れるも亦太甚しと謂ふべし。吾輩は支那問題の全部を舉げて、支那語通譯の養成に歸するの當否を疑ふ、かの日本語學の傳播の若きは、亦我が自ら學校を設くるを待たずして彼をして自ら設けしむべき手段なしとは信ずる能はざる也。

(明治三十三年三月三日稿)

### 今後の支那觀察者

伊藤侯が清國に遊びし以來、閒散の政治家、相踵で觀風察俗の舉を爲す者あり、松平、清浦の一行となり、近衛公の一行と爲り、加藤、水野の一行と爲る、其の一游の前後に於て、清國に對する見解、何等の進境ありしかを知らずと雖も、而かも對岸の形勢に昧きこと、歐洲よりも甚しき者ありし、従前の習に比すれば、其の游意の生ずるすら、猶ほ以て一段の進歩と謂ふべく、既に游べる人の用意は甚だ之を嘉するを吝まず、而して將さに游ばんとすと傳へらるゝ諸人に向ても、急かに之を斷行せんことを慫慂せんと欲す。

但だ其の觀察の法に就ては、將に游ばんとする諸人の爲に一言せざるべからざる者あり。曰く先づ従前邦人觀察の習氣を祛くべし、邦人の支那觀察眼には、從來一種の習氣あり、支那文詞の虛飾を事實として信據

するの弊是なり。邦人動もすれば白髮三千丈といへる李白の詩張飛が一睨して曹操百万の軍を長坂坡に退けしといふ演義の譚とを以て、支那人の誇張を笑ふ、而かも支那人が酒を被り氣を使ふ、豪俠の跡、甚だ其實に乏しくして、而かも喜で之を筆にするに動かされ、實に其事あるの想を爲し、已も亦知らず識らず、此等の状を爲すに至るの愚は、則ち自ら省みざる者多く、而して従前支那事業に志せる青年は、大抵此種の興味に感發されたる者なり。故に平生支那人の言、誇大荒唐なるを笑ふも、事變あるに遭へば、往々其の荒唐の言に憑據して、而して識見を立て、傳奇的架空の想像を逞しうして、以て自ら事情に通じたりと爲す、長江以南に在て、此弊最も甚し。一たび新たに游歴する名公士大夫あれば、先づ之に接觸し、之を圍繞し、日夜其の支那觀察眼の先入を爲す者は、此種の傳奇的空想家也。加ふるに支那人、特に長江以南の人は其の才氣俊俏、談鋒犀利、善く慷慨の言を爲し、又甚だ辭令獎揚に妙なるを以て、一たび之に

接すれば、則ち殆ど其の興に爲すあるに足るべきを思はしむ、此れ極めて誤られ易き所以、其の實は讀書の人にして、大事を思ひ立つ若きは、容易に有るを得べき所に非ず、かの草澤の英雄なる者は、又外來の游歴者と談論を求むるが若きこともあらず、又政治上の改革等に關する知識を有する者もあらざる也。廣東地方の人、往々輕銳の氣ありて、實に事を舉ぐるの志ある者なきに非ず、然れども嶺南人が遂に支那人を治馭するに適する、や否やは、猶ほ疑問に屬すべし。要するに従前支那觀察者の空想と、支那人の巧辭令とは、其の之を較量判斷するの尺度を方寸に有して、而る後に之に臨むの用意なかるべからざる也。曰く泛に多數の名公に交游するの益少なきを逆じめ知るを要す、邦人の游歴する者、必らず李鴻章、張之洞、劉坤一諸人を一見す、此れ固より不可なし、然れども已れが萬里遠游、支那の運命に關して、多少の憂念を抱きて來れるの故を以て、此等諸人も亦た必らず胸を披きて誠を推し、以

て己れと相語るべしと謂はゞ、亦謬たるを免れず、而して其の胸を披きて相語らざるを見て、直ちに之を志なきの徒と速断せば、更に大謬たるを免れず。要するに在位の名公鉅卿が一二接見の談話は、極めて好意を表するも、之を把持して何等かの實際事功を生み出さんとするは、能し難きを思はざるべからず、伊藤侯、ベレスフォード卿の款待を極められしを以てするも、此より生出せる何事も之なきに非ずや、其の信ぜらるること、此の二人より厚きを得べからずして、而して事功に効ある交遊を爲さんことは、有り得べからざる所たる也。若し彼間の實情を得んと欲せば、有爲の士大夫、志を得ざる者と熟交の際より之を得るに如かず、而して又支那人の黨同伐異の言、ただ過ぐる者あることは、逆じめ之を斟酌する所なかるべからず。

若し夫れ實際實務の觀察は、別に自ら一隻眼を具するを要す、武昌漢陽に游で、其の學堂、鐵政、紡織諸局の設備を觀て、此等の事業、果して幾許の

効果を生すべきを看得て徹底せんことは、其人識力の度に存し、口舌を以て傳へ難き者あり、夫れ李、張、劉諸人の丰采を瞻るを多とし、歸來便ち万口一辭、貿易の不振を歎じ、居留地の荒廢を罵り、保全分割の大體論を爲すは、時已に過ぎたり。今後の觀察は、須らく従前觀察先入の見を透過して、更に其の裏面を見るの眼光を具へざるべからず、况んや一政黨の領袖にして、其の觀察の結果と、其の彼に在りて談論するの巧拙とは、兩つながら關係小ならざる者に於てをや。(明治三十三年三月廿日稿)

## 支那調査の一方面

### 〔政治學術の調査〕

支那調査の必要は、現に福本日南等諸君の首唱するあり、我が雪嶺先輩も、亦十年前に當りて、已に大陸學術探檢の義を發せしことあり、其の大體に於ては、蓋し之を盡せるありて、必ずしも絮説を累ねじ。今、余が言は



んと欲する所は特に其の細節に涉りて、最も余が懐に根觸せる者を發する耳、而かも産業實務の若きは、迂僻なる書生の觀察、固よりの中するを得べきに非ざれば、且らく政治、學術等、余が觀察力の能く及ぶ所に止めんとす。

由來支那政治の調査は、最も困難とする所なり、乾隆會典の明文に據りて、僅かに其の形式を皮相し、猶ほ能く一代の支那通たるを得たるは、二十年の前に在り、唯だ世人の支那問題を忽略すること久しかりしを以て、乾隆會典の制度すら、未だ普通に支那問題を口にする人士に曉通せられざるに、形勢は早く乾隆會典の曉通を以て、時務に應ずるに足らざるまでに變じたり、保全の論、分割の議は、幾たひか之れを反復するを聞く、而かも計保全に決せる以往、何の術を以て其の目的を遂行すべき、分割の利を享けて而して後、何の道に由りて其の利益を保持すべき、此れ豈に空論の能く了する所ならんや、保全論者の必らず伴ふ所は、改革の

必要に在り、空文の改革は、康梁一派、一たひ之れを嘗試して、未だ澤の士民に及ぶに遑あらざるに、先づ其の身を危くするに足れり、自今而往、苟くも清廷にして改革に志あるも、之に教ふるに如何なる成功の方法を以てすべき、支那政治の情弊は、清一代に始まるに非ず、清朝が臣工權力、劫持の組織を密にし、以て其の心を生ずるを杜ぎしは、對外政策に著大の妨碍たるは、固より之あるも、即ち此弊を掃除するに因りて、千年以來、根柢盤固の弊政を改むるには足らず、何を以て此の弊政を改むべきとの問題は、決して新式の軍隊を組織し、外國語普通學の教習を開くが若く容易なる問題に非ざるなり、且つ政治の改革に最も必要なる伴生の問題は、財政の整理なり、而して支那財政の整理は、恐らくは土耳其の財政よりも、我が封建時代の財政を整理するよりも難かるべし、土耳其の若き、我が封建各藩の若きは、譬へば明代の財政の若し、弊は其の收斂の原動力、最上の地位に在りて、而して最も指目し易く、又最も少數なり、然

るに清國財政に於ける收斂の原動力は、官民の交接界に存し、樹木の内に寄生する蟲の若し、之を除けば併せて樹を枯らさざるべからず。故に支那の富力、以て現今に倍蓰するの財源を辦ずるに足ることを概算するも、其の精密なる統計に至りては、何人も之を查明せる者ならず、况んや我が支那研究者の若きは、其の財政の大綱すらも西人の撰著に據りて之を知らざるべからざるに於てをや。苟くも支那の保全を論ずる、此の根柢の研究なくして、而して何を資て、其の所謂改革なる者を成さんと欲するか、井上伯が朝鮮改革の効は以て炳然たる前鑒とすべからずや。其の分割を策する者に至ても、亦然り、臺灣割取の後幾年ぞ、其の徒らに糜費の地たるを聞く、未だ出入相償ふの計すら確立せるを聞かざる也。臺灣は清國の時に在て、必ずしも出入相償はざるの地に非ず、而かも一たび我が領土となれば、則ち顛倒此の如し、蓋し公然たる行政費の寡少なること、未だ清國政治の若きはあらず、故に何等の國代て之を治

するも、清國の若く寡少の費用を以て、行政を辦し得る者あらず。此れ清國分割に對する重大問題にして、或は私飽の弊を絶て、涓滴公に歸せしめば、則ち民に征する者増さすして、而して上に入る所數倍すべしといふ、然れども清國の土地を治むる、其の下僚親しく民に接する者は、必ず清國人を用ゐざる能はず、此の若くにして中飽の弊を絶たんことは殆ど得べからざれば、則ち上に入る所數倍なれば、民に征する者も亦數倍なるを免れず。嘗て戦役の時に當り、山東を割取すべしといふ者ありき、今は福建を以て、我が勢力範圍とすと傳ふ、此の二省の若き瘠薄の境に據りて、而して分割を談ずるに至ては、最も空論たるを免れざる者なり。意ふに清廷一時の變動、改革派一時の通塞の若きは、支那改革の大疑問に對しては、僅かに其の一部分の解答たるに過ぎず、かの一府若くは一縣になりとも、之を施して成效あるべき新政施行の手段にして、其の着落を得ると否とは、實に此の大疑問全部の解釋に値すべき者なり。余は

支那問題の研究者に向て、其の豪放過快の空論よりして、先づ此の地位に進歩せんことを望む者なり。

學術の調査に至りては、近日文部省が一二の留學生を支那に派遣するを見るは、一種の進歩と云はゞ云ふべし。然れども支那の學術は、歐洲の諸大學の若く、某の學科に關する統一せる智識、最新の學說を、一般學者に講說すべき組織とては、一も之あるに非ず、故に留學生として彼地に在るの人も、茫然として其の研究の緒を得難きに苦しむことなきに非ず、然れども此れ特に其の調査の方法、宜しきを得ざるの致す所にして、決して支那學術の調査に値せざるにあらざるなり。但だ此の調査方法宜しきを得ざるの緣由は、亦我が漢學の風潮、甚だ後れたる者あるより生ず。我が所謂漢學とは、經子二部の學を以て主とし、蓋し哲學の類に入るべき者に限る、而して明治年間漢學の復興は、最も先づ此方面より入れるを以て、近日二三の史學に注意する學者あるに至るも、其れすら未

だ編年紀事の史以外に於て、殆ど志書の研究に及ぶに違あらざるが若し。夫れ彼土に在て、義理の發明は宋明に盡き、攷證の精緻は乾隆に窮まる、故に其の學者も亦已に此の二途の外に於て、更に緯書佛書を以て經義に參するの風を拓き、又史學校勘の學等、別逕を求めて其の神智を發揮するに至り、金石礦物學の謂にあらざり、小學(小學近思錄の小學に非ず)の屬に至ては、實に無前の精を極めたり。然るに我が漢學者の現在風尙は、其の文家に至りては前明の舊套を脱せず、經學家も亦仍ほ乾隆の遺風なり、是れ彼土百年來の學風に於て、未だ通曉する所あらず、何ぞ其の今日に於て調査の緒を得難きを異しまんや。且つ我が學究は、大抵藝術の事に疏に、算數の學に至りては、最も善せざる所、此れも亦清朝學者が最も力を致せる精粹を領略するに不便なるの一因たり。今一々此種の不便を指摘するに違あらざるも、要するに支那學術の調査は、單に經子の訓詁、義理の講究以外に於て、別逕を求むるに非ざれば、其の得る所極

めて少かるべきは、論を待たざるなり。意ふに支那學術の調査は、宜しく材料の蒐集を主とすべし、蓋し支那古書の彼に逸して我に存する者、固より甚だ多し、而かも其の新古の著述の我に無くして彼に有る者は更に多しとす、一部の四庫全書提要を繕き、一部の彙刻書目を檢するも、亦其の然るを知るべし。朱筠嘗て乾隆帝に上言して、永樂大典中より古書五百餘部を抄して印刻せしことあり、意ふに其の未だ印刻せられざる者の中に、猶ほ邦人の目に觸れざる者あらん、清朝以來の掌故、實錄の類は、固より我邦の未だ有るを得ざる所、偶々掌故に精しき、魏源、王慶雲、何秋濤等の撰著に頼りて、九牛の一毛を得るに過ぎず。金石の類に至りては、其の史學に資すべき者は實に指數すべからず、而して我邦の有る所、百の一を存せず、亦唯だ藏弄家の其の富を誇るの資に供せらるゝのみにして、未だ一般學者の研究を助くることあらず、塞外漢唐金元の諸碑に至りては、史家の最も珍重すべき所にして、其の此間に傳播せる者極

めて少し、銅器金文の研究は、亦最も邦人の疎忽にする所、好古賞鑑の大家と稱する者にして、動もすれば輒ち商鼎周彝、盡く北宋以來の贗作なりと放言するに至る所以。此等材料の蒐集は、三四留學生、數年の力を極め、且つ蒐集し、且つ研究するに餘りあるべき者、而して其の成功するや、即ち學術界に新面目を開き、以て歐洲學者と抗衡するに足る、此を捨てて、而して陳々相因る訓詁、義理の舊套を穿鑿す、恐らくは留學生の効、望む所に副はざらんことを、此れ學術調査の必ず其の方法を改めざるべからざるを道ふ所以なり。

若し之を細論し、直接に調査を要する項目を列舉せば、世人の注意を精密にすること、更に容易なる者あらん、唯だ此れ寥寥たる短篇の盡す所に非ず、因て論及せずと云ふ。(明治三十三年三月廿日稿)

## 讀書に關する邦人の弊習附漢學の門徑

少所見、多所怪とは支那人の道ふ所なり、近日の我が學人は則ち之に反す、若し一二語以て之を蔽はゞ、少所見、多所斷といふべし。意ふに少所見多所斷は到底是れ今古に通ずる。我邦學者の弊なるか、其議論斷制、之を支那人若くは歐米人に比するに主我の見太だ強く、其幼學習慣の薰染より生ずる偏局の定説先づ胸中に横はるありて、誤て之を名けて見識と爲し、爾せしより後讀む所の書、一切箇の自ら名くる見識に據りて判斷し、其の見識と合せざる者は之を容るゝを欲せず、又之を信する能はず、譬へば猶ほ箱庭を受する者の若し、箱中の山澤樹石、盡く其の意のままに安排し得べきを喜ぶも、一旦此人を拉して、曠漠の野に遊び、天低れて野に接し、樹木暢茂、必ずしも槎牙輪囷の物ならず、草卉莽生、必ずしも清妍秀葩の物ならず、水の縱横、石の磊砢、皆矩度に中らず、之を移して安排當を得んとするも得べからず、是に於て天地の大觀、顧みて少小箱庭

の美に如かすと謂ふ、邦人の所謂見識なる者往々此に類す。伎樂、雅樂の假面、奇顔怪姿、人間の物にあらず、而して邦人は則ち之を變じて彼土雜劇の粉粧よりも和軟なる能樂而と爲さゝること能はず、周文雪舟の山水、嶽巖蕭散なる、邦人は則ち之を變じて四條圓山の穠麗明媚と爲さゝる能はず、不二の山容と須磨明石の浦瀨以外に逸脱せる趣味は、邦人の腦漿が融會するに堪へざる所、是を以て其學術に關する思想は、毎に經驗に傾て、宋儒の性命天道を談ずるすら、能く含咀して神味を領せし者少し、程朱を奉ずる者は、概して山崎派の褊狹と爲り、陸王より出づる者は、反て中齋子の唯物論に近き者と爲る、其の一家言を爲せる伊物以下の諸氏が、更に唯物現實の思想に囿せられ、考據小學家の流と爲りしは、異しむに足らざる也、乃ち其の考據小學の流も、亦顧炎武、閻若璩、戴震、錢大昕等の若く、歐西近日の學士の若く、源々本々、其の始終を綜べて、而して一家の言を爲すに足る者罕に、動もすれば一事の發明、一物の發見、微

引博を銜ひ、辯析異を立て、以て不急の著述を爲す者、大抵皆是れなり。之を要するに、見る所の少なき、反て盲者の蛇を怖れざるが若く、箱庭の天地に偃蹇盤踞して、獨斷自ら智とし、絶えて大天地の現象、紛々紜々、闐亂して、而して亂るべからざるの統紀、其間に存するを知らず、鷹鳩の大鷹を笑ふか、徒らに其の憫笑すべきを見る耳。故に近世三百年、其の見る所多くして、而して斷ずる所反て少なく、立言の苟くもせざる、精金美玉の珍襲すべきが若き者は、富永仲基の出定後語、帆足萬里の入學新論、狩谷望之の和名抄箋註、其餘寥寥指幾くも儘するに足るなし。

意ふに邦人は現在文明國民中、最も讀書を喜ばざる民族たらん、慶長の初、活字の製、一たび行はれて、而して大に盛なる能はず、更に木刻に退歩せるを觀ても、以て之を徵するに足るべく、近日印刷術の進歩、日月に滋々熾んなるも、苦心の著作、反て利を此に藉るとを得ず、乃ち其の偶々世に出づるも、亦杜撰濫作の書に壓せられ、後進青年、翰墨を弄するを喜ぶ

者、寧ろ其の多きを病で、而して乏しきを患ひざるも、其の趨く所を察すれば、則ち數部の兎園冊子を讀了する者、輒ち格に入らず、調を爲さざるの辭を綴りて、忽ちに小説の作を試み、忽ちに時事の議を立つ、スウヰントンの英文大家集を卒業せる文學者が、美文理想の高談、能く無數の文學雜誌の紙面を填塞し、眼光迷離、往々和漢文學を評隲して、當らざるの品藻、沾々として自ら喜ぶ。惟だ夫れ源を養ふと、此の如く其れ淺し、其の流の久しからずして、涸れざらんことを求むるは難し、故に近日所謂文學者、未だ十年にして、而して聲名大に墮ちざる者あらず、其の一二年間、倏ちに見はれ、倏ちに隱れ、蜉蝣の生を旦夕の間に寄するが若き者は、勝げて數ふべからず、商工業の進歩、中等教育の伸張は、方さに後進技術家と教員との不足に困しめるに、新聞雜誌記者に候補たるの少年は、供給負かに需要の數に浮ぎ、懸賞小説の偶中に誤まれ、文人無行の惡習に染む者、比々皆是れ、而かも近三十年、其の不朽の著述を成せる者、果して

幾人かある之を要するに弊の山る所、神味を前人の書に求むるの餘裕なくして、其の獨斷の見を誇張するに急なる、雷同と偏頗とを避くるに追わらず、死氣滿紙、自ら詫して靈活と爲す、噴飯を爲すに足る耳。

東西の學術、方さに我邦に集注す、之を薈萃し、之を折衷し、之を融和し、而して學術の生面を開き、世界文明の一大轉機を形くるは、地位我邦より善きはなし、而かも讀書を愛せざること、彼が若き國民が、能く其間に東西學術集大成の功を奏すべき天才を生ずるを得んや否、吾竊かに疑ひなき能はず。歐西の學者が、東洋の典籍を研究するを嗜るに、其の源委を知り、其の理會の力あること、竟に我が學者に及ばざるあるも、而かも其の着眼の警拔、涉獵の宏博、我が學者の及ばざる所なきに非ず。且つ我が漢學の老宿なる者は、大抵徳川氏末世の學風に養成せられ、當時此方の學者、一二有識を除く外、未だ支那近世學風の趨嚮をも知らず、文を講ずれば、時文評點の法を以て、一切古文の矩度と爲し、謝選沈鈔、以て文章此

に盡きたりとし、經學は宋明の餘習、一轉して穿鑿の考據と爲り、史學は綱目の書法、變して譌案の僻習となり、而して此れ清朝學者の久しく已に唾棄して顧みざる所たるを覺らず、往々門逕を取るに宜しきを得ずして、力を無用の途に費すことを免かれず、後進の人は、漫に漢籍の讀み難きを恐れて、之に趨く者既に寡く、之に趨く者も亦猶ほ門逕の宜しく改むべきを知らざる者、大學出身の人すら猶ほ且つ然り、其の汚下なる者、中等教育の漢文を主どるの徒が、茫昧として適從する所を知らざるは論ずるに足らず、既に漢學の門逕を知らず、其の西洋學術と如何にして薈萃し、如何にして折衷し、如何にして融和し、如何にして生面を開くべきかは、豈に此等の徒に望むべけんや、其の歐學の餘力、稍や東洋の典籍を一知半解せるの徒に至りては、或は我が三百年來、學術の來龍をも詳にせざる者あり、况んや支那三千年の久しきに涉るをや、邦人の讀書を愛せず、特に漢籍を愛せざる者、意ふに亦其の門逕の正を得ざるに由

ること多からずと謂ふべからず、然らば則ち今日我が士子に見る所の多きを務めしむるに當りて、先づ決せざるべからざる問題は、如何にして讀書門逕の正を得せしむべきかに在り。

大抵我が近時學人漢學の素養は、僅かに中學校に於て、零碎の篇章を誦せるに過ぎず、其の一旦漢籍涉獵に志し、卒然として四子、五經に臨み、卒然として先秦諸子に臨む、其の統紀なくして、而かも艱澁なるに辟易せざる者罕れなるは、固より其の所なり、此れ門逕を得ざるの過ちなり、其の國學に於けるも、亦然り、但だ吾は近日國學に浸淫して、其の局量を編淺ならしむる者多きを見るが故に、讀書を懲慰するの目的を以て、重きを本居平田諸氏の餘派たる國學に歸することを欲せず、主として漢學に就て説く所以なり。若し其の門逕を得ば、則ち數部の書、一半年の歳月、能くかの統紀なき讀書の十年なるに愈ることあり、學術變遷の序次は、支那學風の固陋を免かれざるも、亦歐西と神理相似たる者あり、故に歐

西學術變遷の大體に通ずる者、更に漢學を講じて、門逕を誤らざれば、其の同異を對照して、且つ記憶に便に、且つ發明に資すること、決して少小に非ざらんとす、此の如くして習熟せば、漢學の爲し易きを見て、其の及び難きを見ず、若し夫れ章句の艱澁を覺ふるは、僅かに三五月の勉強、以て之に克つことを得べし、英獨語學の許多歳月を費すが若きに非ざる也。既に其の門逕を得、讀書の快味を領せば、此より以往、千万卷を讀破するも、安車駟馬、熟路を行くが若くならんのみ、復た其の艱澁と統紀なきとを訴へずして、反て艱澁と統紀なきとに由りて、研究の餘地あるを樂しむに至らんとす。是に於て見る所少きの弊、矯めずして自ら正しからん、若し之に加ふるに、成見を持して書に對するを避くるを以てせば、かの斷ずる所多きの弊も、亦掃はずして自ら除かんとす。

漢學の門逕を得るの方は、自から私見の存するあり、然れども今盡く茲に陳ぶる能はず、篤學の士あらば、且らく張之洞が輻軒語と稱する一小



冊子の數章と、勸學篇内の守約一篇に就て、之を斟酌損益して可なり、但だ張氏の見、亦偏する所あるを免れず、此は則ち他日聞見漸やく廣きの後、自からにして發明する所あらんとす、(明治三十三年三月稿)

以上は遊畢りて歸りし後緒に觸れて略ぼ知見の一端を表出せし者、其中一二實行を經し者あり、意ふに亦吾が所見の偶ま時勢の纏ふ所に投せし耳、

### 支那人の一統思想

一統思想の人民に強有力なること、未だ支那人の若きはあらざる也。其の人民を稱して百姓といふを觀るに、已に其の種族の起源する所、必ずしも一姓の自由に非ざるを知る。伏羲、神農は尙し、軒轅氏は後代王者の盡く其の源頭を歸する所、五帝三王、蠻夷の君長に至るまで、稱して其裔

と爲さるはなし、然るに時には蚩尤の若きありて、之と涿鹿に相角逐し、黃帝克て而して諸侯之を尊て天子とす、則ち天下の黃帝の族に非ざる者衆し、且つ黃帝は師兵を以て營衛と爲し、遷徙往來、常處なし、亦其の西北游牧の種、襲て而して華夏を取れるに非ざるやを疑ふべき者あり、蓋し土着の族は、別に之あらざるを得ず、漢書地理志、路史國名記、三王以前、諸侯の國せし所を擧ぐる者甚だ多し、所謂百姓の漠然として言を立てしに非ざるを證するに足る。其後に及で、春秋戰國の分裂各雄とするあり、五胡十六國、夏夷糜亂、四海糜亂するあり、遼金は其の半を割取し、元清は其の全を奄有す、而して皆外より之を襲ふ者、異種の混淆は、人文の中心をして、自づから遷移なきを得ざらしめ、堪輿家所謂三龍の王氣、交遞して暢旺するを致し、決して一處に膠定することあらず、然るに所謂百姓、竟に一統の帝王を待たずして、而して其堵を安ずるを得ず、唐虞の時、五服の制、已に外を以て中に繫るの制たり、其當時百姓を以て人民の

義を表し、湯武の萬方を以て四境の義を表せし者、後には變じて而して天子に兆民といひ、諸侯に萬民といひ、百姓は僅かに附庸小諸侯の民を名くるに過ぎざるに至り、普天率土、以て四境の義を擴張するに至り、郡縣の制、嬴秦を待たずして、而して早く封建の日に啓けたり。七雄の時、各々地を有する千里、帶甲數十萬乃至百萬、加ふるに皆險固に據り、山河を界し、而して自ら守るを以てし、孟子が天下一に定まるの理想は、往々當時王侯に迂濶とせられたるも、齊や秦や、皆東面、西面して諸侯を朝せしめんことを望み、三王企つべからず、猶ほ桓文の業を再びせんことを欲せざる者なし、秦漢一統の局を開きしよりや、則ち更に説くを待たざる耳。

夫れ其の地勢を以てすれば、則ち顧炎武が所謂、

如し都門を出で、以西は則ち晉中、太行數千里、其東に亘り、洪河其西を抱き、沙漠其北を限る、自然に一省會なり。又西は則ち關中、河流と潼關

と其東を界し、劔閣梁山は其南を阻て、諸蕃其の西北に臂たり、渭を左にし、漢を右にし、終南を宗と爲す、亦自然に一省會なり。轉じて南すれば、則ち蜀中、層巒疊嶂、環らして以て四周す、沃野千里、其中服に躡まり、岷江を經と爲し、衆水之に緯たり、咸く三峽より、一線にして出づ、亦自然に一省會なり。峽を出で、而して東すれば、則ち楚に入る、長江横さまに絡し、江南の九水は、洞庭に匯し、江北の諸流は、漢水に導き、然る後江に入り、沅桂永吉袁寧の諸山、其の前を包み、荆山其北を裹む、亦自然に一省會なり。又東すれば、則ち江右、黄山を左にし、匡廬を右にし、二龍咸く南より來り、透迤として、東西南三面之を環らし、衆水皆本身に出で、彭蠡一道に浸し、以て江に入る、去水來山、長江其後を負ふ、亦自然に一省會なり。五嶺以外を兩廣と爲す、廣右は又自ら一局を爲す、三江咸く蒼梧に交り、以東又梅嶺を分ち、以東は自ら一支たり、以て北を包ね、東海に盡きて、閩と爲る、皆大海前に之を繞る、亦皆自然に一省會也。

西南萬里、滇中は自ら一國たり、貴竹の綫路、初は本と滇の門戸たり、後乃ち開設して省と爲す者、已むを得るに非ざる也、牂牁烏柳諸水散流す、湖北と川東と、轉制一に非ず、蓋し山あり、獨り中原片土莽蕩數千里、山なし、強て野を畫して以て之を經界せざるを得ず、故に睢陳以東、鳳泗而北、兗濟以南、人情土俗、甚だ差殊せず、然るに兩河々流中に貫き、淮衛を輔と爲し、太行は後に在り、荆山は前に在り、泰山東に峙ち、嵩高中に起る、亦自然に一省會なり、山東は秦岱を以て宗と爲し、其の各省に于ける、高山大川の界なしと雖も、然も齊魯を合して一と爲すは、周公太公の舊疆より原づく也、他郡邑に入らず、惟だ兩浙は吳越の分土を兼ね、山川風物、迥乎として侔しからず、浙西は澤國、山なし、俗靡にして巧、蘇常に近し、地吳より原づくを以てなり、浙東は山を負ひ海に枕み、其俗樸なり、甌越より一區を爲せり。

といふ者、隘要各々自ら劃界する、或は歐洲諸國が相劃界するに過ぐる

者あらん、然るに其の一統し易きの勢、人民の一統思想に強盛なる、歐洲の比に非ざる者あるは、何ぞや。

上に引く所、顧炎武が言に、中原の形勝を説くを觀るに、此の一大省會や、實に禹域沃土の原造力たる、江河二流域を聯絡する者、所謂四瀆、江淮河濟、皆此土を浸灌す、平衍莽蕩、險阻の之を限るなし、而して其流に溯れば、則ち九州の土、至るべからざるなし、かの嶺南東甌、偏隘の域は其の全土の大よりすれば、特に言ふに足らず、加ふるに上流に在りて、秦中の地、亦河の支源たる渭と、江の支源たる漢との流域を逼近せしめて、一把に之を握るを以てす、故に往古而來、支那の形勝を争ふ者、關内に於てせざれば、則ち必ず江南に於てす、上下二千年の史乘、其の三分の二以上は、此の二省會抗爭の蹟に係る、是れ支那の土、一統の勢輒ち成り易く、支那の民一統思想の薰習深固なる所以なりと、此説や屢々之を前輩の言に聞けり、其の言善からざるに非ざる也、然れども是れ猶ほ目して小一統とい

ふべき者に非ざる乎。禹貢九州東は海に漸し、西は流沙に被り、南は蒼梧に及び、北は漠に至る、舜の十二州も、其域は則ち同じ、周の職方氏に至りては西南梁州を失ひ、東北營州を失ひ、荆徐摛貳、犬戎内侵す、秦は則ち巴蜀を平げ、閩中、南海、桂林、象郡を開き、河套、遼東を擴む、乃ち後世に至りても、宋の盛世を終へて、燕雲を復する能はざる若き、明の九邊を衛りて、中夏の全土を北狄の手より復するが若き、時に九州の域に出入あることを免かれざるも、要するに是れ吾が所謂小一統なる者なり、小一統の支那に在て、其の形勝を談ずる、固よりかの四瀆の浸域と、渭漢の上流とを以て關鍵とせざる能はず、然れども若し大なる一統の蹟を談ずるに至りては、則ち更に眼孔を濶大して、其の繫紐の更に大なる者を求めざるべからず、且つ問ふ、何れの時か是れ大一統の世、何の地か是れ大一統の繫紐ぞ。

山海經、穆天子傳等は、固より正經疑を挾さむべからざるの書に非ず、然

れども其の崑崙を記するや、髣髴として往古支那人種が、有史前に於て嘗て大一統の世ありしこと、猶ほ後の炎漢、胡元の若き者なるを想はしむ、而る後淮南子の若き、水經の若き、下りて神異經、拾遺記、十洲記諸書に及ぶまで、其地の中たり、天の柱たるを記し、滿幅怪詭の言、徵信すべきなしと雖も、而かも其の帝王の始、大一統の遺聞、轉じて神仙の譚に混ぜし跡を認むべからざるに非ず、唐以後に迄、穿鑿過細、乃ち劉郁が悶磨黎山を以て誤て崑崙と爲すあり、元の都實、虎符を佩び、河源を求めて、而して反て之を火敦腦兒に失し、大積石山を認めて以て崑崙と爲す、近時に及で猶ほ必ず岡底斯山を指して崑崙と爲すあり、泛に雪山を指して崑崙と爲すあり、豈に崑崙必ずしも山に非ず、丘と曰ひ、墟と曰ふ、一も峻拔特絶の峰を指せるが若き者ならざるを識らんや、我が心を得る者、唯だ陳熾が葱嶺一篇あり、請ふ之を下に引かんか。

葱嶺なる者は天下の心なり、蓋し地球の形勢、略ぼ人身の如し、亞墨利

加洲は坤輿の脊に居る、落機山南北を穿貫すること、脊骨の如く然り、東西兩洋は則ち腰脊なり、中國は肝の如く、歐洲は肺の如く、印度は心の包絡の如く、埃洲非洲は兩足の如く、南洋萬島は則ち腸胃膀胱なり。今日の大勢を以て之を論ずるに、葱嶺の南は英に屬し、西は俄に屬し、東北は中國に屬す、此の三國なる者は、皆地球の最大最強の國、天下全局の安危に關する者なり。中國の古籍に傳ふる所、崑崙に黃帝の宮あり、當日萬國諸侯を朝會するの所なり、山海經、穆天子傳に載する所、靈奇幻異、勝けて窮むべからず、傳聞辭を異にして、固より盡く信じ難し、度るに亦必ず遺蹟の攷ふべきあり、以て誇張傳會、愈久しくして愈々其の眞を失ふことを致せり。佛經に須彌山は天地の中に居り、日月の自りて出入する所、山頂に池あり、阿耨達と曰ふ、東西南北、四水出づ、是を四海と爲す、泰西舊約に亞當の子孫淫佚度なし、天洪水を降し、人民を蕩す、挪亞といふものあり、善を好む、而して天帝豫め其期を示す、乃

ち六舟もて希馬拉雅山嶺に避く、故に萬國九州、遺種を留むることを得、山は印度の北に在り、天下群山、未だ此より高き者あらず、然らば則ち崑崙なり、須彌なり、希馬拉なり、皆葱嶺の異名にして、而して四海會同の靈樞秘紐なり、美澳二州より外、天下群山の脉絡、此よりして分れ、萬水の源流、茲よりして導き、山を環るの部落、十を以て數ふ、皆勁勇にして鬪を好む、固を負て雄を稱す、唯だ其の勢斷じて、而して聯らず、散じて、而して聚らざる耳、葱嶺の東北は、新疆の南北各城なり、其東は則ち青海及び旄牛徼外の諸蕃なり、其東南は則ち前後藏及び哲孟雄、白布諸國なり、皆中國屢朝險遠を憚らず、兵力を以て之れを得る者なり、其の南は則ち五印度、西南は則ち阿富汗、皆英國に屬す、其の西は則ち克什彌爾、西北は則ち塔什干、敖罕、基發の諸回部、皆俄に屬す、並峙連衡、鼎の三足の如し、比來巴馬の一役、中國力めて與に争持す、俄人徼に其機を露はし、道を假りて、以て印度を窺はんと欲す、然らば則ち西海南

海、海舶通ずべしと雖も、而かも陸路の必争する所、進戰退守の要區は、必ず葱嶺一隅の地に在ること、疑義なし。謂ふ宜しく新疆、青海、西藏各督撫大臣より、委員を專派し、探測し、繪圖貼説して、務めて眞形を得、何れの處にか以て兵を屯すへき、何の地か轉餉に便なる、何の險か應さに守るべき、何の利か必ず興さん、屬部は若んか招徠せん、蕃民は何の保護を作さん、皆專款を籌撥し、護兵を給與し、假すに事權を以てし、寛くするに歲月を以てし、之を樞府に上り、其の成功を獎めば、庶くは萬里の邊陲、沙を畫し米を聚め、俄を制し英を服するの券、皆一覽して遺すこと靡かるべし。西南西北の邊防、此と互に相發明する者、已に前編の末に且す、唯だ念ふ葱嶺は高きに居て下きに臨み、以て自ら守るべく、以て人を攻むべし、之を毫釐に失すれば、謬るに千里を以てす。方寸の地、諸を一身に譬ふるに、天君は泰然として、百體令に従ひ、捷足先づ得れば、害も亦之に従ふ、他日必ず崑崙を控扼し、四海を鞭箠し、長駕

遠馭して、黃帝に繼で而して王會の圖を開く者あらん、必ず眉睫の目論を執て、以て荒遠寥廓と爲し、度外に之を置かば、竊かに恐る舉足の間、便ち輕重あり、先機既に誤まらば、後悔ゆるも奚ぞ追はん、止だ河伯の海若に笑けるのみならざる也。

陳熾も亦嘗て希馬拉亞を謂て崑崙とし、即ち後藏の岡底斯と稱せしことあり、然れども此篇の議論尤も允當なるに如かず、蓋し崑崙即ち葱嶺、即ち山海經の不周之山の説は魏源より來る、而して魏源が須彌、希馬拉を分別して更に精確なるに及ばず、但だ吾は此を以て支那人大一統思想の根する所を説明するに、聊か便宜を得たりと爲す也。

且つ山海經、淮南子の若き、概ね佛教東流以前に於て、漢武西域に通ずる以前に於て、已に自つから四水出づるを謂ひ、而して佛經謂ふ所と暗合するを觀るに、意ふに皆人類降生の起源を同むうし、若くはかの葱嶺地方に於ける大一統の帝者を奉ぜし古傳あるに因らざらんや、中央亞細

亞は、振古以來、人種の相互に土地人民を攘奪し、遷徙常なきの地なり、漢威已に衰へ、五胡夏を亂せしより、西北の夷種、神州を陸沈せしむ、西域に論なし、然るに北史西域傳に、高昌以西、人皆深目高鼻にして、唯于闐の一國のみは、貌甚だ胡ならず、頗る華夏に類すと稱す、近時學者、此に據りて、支那人種の祖先、西域より來るの説を爲す者あり、夫れ所謂三皇五帝の屬、大抵陝西、四川の際より興起せる跡を示さざるなければ、其の遷流の源の西に在るは疑を容れず、而して有史以前、大一統の帝者たる黃帝の鴻業、之を崑崙の地に於てするを想ふべくんば、支那人の思想が其の域の禹九州に限られし際に於てすらも、髣髴として之より大なる一統を夢想する者、憑據する所なくんば、あらざるを知るある也。

前後漢、西域を控馭するに其術を得たる者、班超に若く者あらず、班超は先づ于闐に據りて、以て諸國を威服せり、唐の時葱嶺に崑凌、濛池、二都護府を置く、惜むらくは則天以後、控馭術を失ひ、遂に突厥、回鶻の橫梁に縱

せたり、元をして和林龍興の地を株守せず、亦葱嶺傍近に於て一大都城を營ましめば、聲威の印度に施及し、且つ三四傳して分崩の患を萌芽するに至らざりしならん、清は則ち之を得るも、回民の偏強なる、其の東偏よりして、遙かに之を羈縻する、並ひに長鞭馬腹に及ばざるの歎あるを免かれず、其屢々叛亂に陷沒する所以、且つ漢時南路の孔道たる鄯善、婁羌、等數十國、今皆戈壁に淪み、南道通ぜず、地勢古今の變、控馭亦其の軌を一にせず、是に於て天山の南北山脚は、其の形勢更に古時に加ふるに至れり、然れどもかの四海を鞭笞し、長駕遠馭する者の崑崙の地に須つあるは、則ち未だ嘗て變ぜざるなり、今や其地已に支那の有にあらず、而して露人は葱嶺にして足らず、嘗て伊犁を窺ひ、近ごろは又喀什噶爾を覲ふ、黃帝に繼て王會の圖を開く者は誰ぞ、寒心せざるべけんや。(明治三十二年六月稿)

支那 漫遊 燕山 楚水 終

舟中無聊次秋水犀東二兄見韻

一鄠寄明世。未暇植桑麻。毘舍兩年住。

支那八月棧。

處今身計澗。覽古淚痕斜。行到長城窟。

抽毫賦塞沙。

將赴漢口再步前韻

宿志酬弧矢。悲歡紛若麻。崑崙空入夢。

江漢且浮槎。

秋老鄉心切。天高雁字斜。何年乘八駿。

萬里度流沙。

明治三十三年六月廿八日印刷  
明治三十三年六月三十日發行

定價金四拾五錢

著 者 內 藤 虎 次 郎

發 行 者 東 京 日 本 橋 區 本 町 三 丁 目 八 番 地  
大 橋 新 太 郎

印 刷 者 東 京 牛 込 區 市 夕 谷 加 賀 町 一 丁 目  
十 二 番 地 佐 久 間 衡 治

印 刷 所 東 京 牛 込 區 市 夕 谷 加 賀 町 一 丁 目  
十 二 番 地 株 式 會 社 秀 英 舍 第 一 工 場



發 兌 元 東 京 日 本 橋 區 本 町 三 丁 目 博 文 館



男爵楠本正隆君題辭  
文學博士 末松謙澄君序文  
學堂尾崎行雄君序文

全冊洋壹  
裝本袖  
珍成

實清國一斑

木堂犬養 毅君序文  
東海散士 柴 四郎君序文  
西島 良爾君著

正金五  
錢廿  
郵稅六



著者清國に游學すると五年吳越を跋  
渉し、江漢を上下し、其風土人情の  
細微を探究し、深く内勢の如何を視  
察し蒐録此一編をなす、今や東亞の  
風雲漸く急に、歐西列強の陸梁、日  
一日と其歩を進め、漸く死活の危機  
に頻するは、清國の現状なり、利害  
得失の關聯する處、本邦人士たらん  
もの、何人も其真相を知らんと欲す  
る處、此書能く老清帝國の實情を悉  
くして餘蘊なし、江湖の諸彦眼を大  
局の上に注ぐの士は、須らく一讀せ  
ずして可ならんや、

慶應義塾々長鎌田榮吉君著  
第四版  
歐米漫遊雜記

全壹冊

洋裝四六版紙數五百頁  
正價金四拾五錢 郵稅八錢

口繪 ○歐米漫遊の一行 ○蘇格蘭フナス橋 ○伊太利  
セルトザの古刹 ○伊太利ヴェニス府ゴンドラ  
船寫影 ○葡萄牙シントラの城 ○埃及三角塔下  
寫影 ○北米ナイヤガラ瀧にて防濕服裝寫影 ○  
其他數葉

著者往年歐米に遊ぶこと年餘其歷程の  
廣汎なる其觀察の細微なる他に其比を  
見ず、隨觀隨錄したるもの今之を一卷  
に收輯す、英米獨佛露伊其他各邦の文  
物典例國勢は勿論博物館美術館劇場著  
名なる建物舊趾名蹟等仔細に叙述して  
餘蘊なし、加ふるに著者が齎らせる珍  
奇なる寫眞十數葉を挿入す、最近歐米  
の旅行案内として必讀の新書なり。

暹羅老揭安南  
三國探檢實記

寫眞版口繪數葉入

鐵脚坊 岩本千綱君著  
本書は岩本氏か暹國を出發し  
て三國の内地を跋渉し其里程  
一千五百里此間幾百の危難に  
接し萬死を冒して風俗政教商  
工等を觀察し來れる實記なり  
一たひ本書を繙くものは萬感  
胸を衝き悲喜交も起る近來無  
比の珍書なり。

全一冊 正價參拾錢郵稅六錢

中島竹窩君著  
臺灣生蕃探檢記

附利根水川源探檢記

臺地の生蕃は喰人々種なり柔  
順なる人種なり其鬼か佛かは  
本書の探檢記を讀めは詳かに  
知るべし又附録なる利根川  
水源談は興味殊に深きものに  
て一讀人をして無限の快感を  
與ふべき壯絶の書なり。

全一冊 正價拾錢郵稅四錢

全部

紫山川崎三郎君著

日清戰史

完成

全部七冊洋裝判紙一冊三十七頁  
正價一冊三拾錢 郵稅一冊八錢

寫真銅版

陸軍大將小松宮殿下  
陸軍大將野津伯  
陸軍中將久間伯  
海軍中將有栖川宮殿下  
海軍大將樺山伯  
陸軍大將伊東伯  
海軍大將桂子  
陸軍大將西郷侯  
陸軍少將大島男  
陸軍中將山子  
陸軍中將立見男  
其他陸海軍人占領地風景等百有餘頁挿入

千古未曾有

の偉觀を描くには千古の快史筆を以てせざるべからず、本書分ちて七巻となし『第一巻』は日清戦争の初幕にして巻を開けば風雲變幻、千態萬狀窮り無く『第二巻』は平壤戰記にして、地理、陣地、戰略、戦術より兵力、兵勢、給養、衛生に至る迄細微精詳、『第三巻』は茫茫たる太平洋の上、二十餘隻の雄艦堅艦、龍怒虎攫の大活劇を演じたる黄海の役を記し『第四巻』は東洋第一の形勝として天然無雙の險たる旅順占領の事を記し『第五巻』は威海衛の海陸戰闘より滿洲に於ける太平山、牛莊、營口、田庄臺、の諸戰役を叙し、清國の兵勢を詳かにする例に依て精細、『第六巻』は媾和談判記を載せ『第七巻』は臺灣戰記を叙す。全巻通じて犀利なる眼光を以て曲折機微の關係を洞破し痛快なる筆力を以て變化錯綜の事態を批詳す、實に千古の大著作なり。

侯爵 伊藤博文君 伯爵 井上 馨君 題辭  
侯爵 山縣有朋君 故子爵品川彌次郎君 題辭  
古俠生水田榮雄君著 (寫真銅版口繪入)

大英國漫遊實記

▲正價金七拾錢 郵稅金八錢

全壹冊洋裝中判  
美本紙數七百頁

○龍動繁昌記 ○大英の暗黒郷 ○大英吹雪の郷 ○大英船渠の郷 ○大英の落雷郷 ○大英の不夜郷 ○大英火  
○花の郷 ○大英の無二の郷 ○大英の觀艦式 ○大英國會見 ○龍動の三井支店 ○龍動の英蘭銀行 ○龍動の高利貸 ○倫  
○龍動の白面鬼 ○陸軍武術試驗 ○龍動の三井支店 ○龍動の英蘭銀行 ○龍動の高利貸 ○倫  
○龍動の白面鬼 ○陸軍武術試驗 ○龍動の三井支店 ○龍動の英蘭銀行 ○龍動の高利貸 ○倫  
○龍動の白面鬼 ○陸軍武術試驗 ○龍動の三井支店 ○龍動の英蘭銀行 ○龍動の高利貸 ○倫  
○龍動の白面鬼 ○陸軍武術試驗 ○龍動の三井支店 ○龍動の英蘭銀行 ○龍動の高利貸 ○倫

英國が世界唯一の富強國たる根本は何故ぞや、此の書著者が滿三ヶ年間、千  
辛万苦、前人の未だ入らざる所に入り、精微透徹、讀む人をして英國富強の根本  
を究め、各地工業繁榮の實況を細寫し、尙英國風俗の真相、名  
士の遊び、各工場の外諸部を巡視するの感あらしむ、平和の戦争とい  
ひ、訪問記等易からざる記事多し、山縣侯本書に題して『英國風俗の真相』とい  
今の時勢に必讀の良書たる多言を要せし。

發兌元 東京本町三丁目橋區 博文館

著君藏傳藤佐 士學理

版再

# 理地新本日

金 壹 冊  
上製五拾錢  
郵稅拾錢  
並製卅五錢  
郵稅八錢  
菊判洋裝



## 本

本邦の天然地理、人事地理、地方誌の三項  
斬新の事實に據り、確實の統計を本とし、  
巧妙の組織簡潔の叙述、意到り筆隨ひ、説き盡く  
して餘蘊なし、彼の臺灣と北海道とに至つては  
立論奇抜にして説明詳密中等教育の参考書  
教科書として、世上他に其の比類あるを見ず  
本邦に生れて、此邦土の何たるを知らんとするの  
士は請ふ一本を購讀あらんことを望む

## 次 目

●第壹編 日本人文地理  
▲人口▲外交▲政治▲教育▲政治區劃▲人種▲沿  
業▲交通▲商業▲第二編 日本地文  
地理▲位置▲五大湖▲島嶼▲自然區  
劃▲地勢▲硫磺▲炭酸▲乳野▲地震▲沿  
泉▲地物▲水域▲湖沼▲平野▲海  
及港灣▲海流▲潮汐▲氣温▲雨雪▲第  
三編 地方誌  
▲東山道▲西海道▲北陸道▲北海道▲中國▲臺灣  
▲東山道▲西海道▲北陸道▲北海道▲中國▲臺灣

# 理地新國萬

著君藏傳藤佐 士學理

金 壹 冊  
上製五拾錢  
郵稅拾錢  
並製卅五錢  
郵稅八錢  
菊判洋裝



## 嗚呼萬國新地理

生れたり、何か故に  
種に向つて、新地理學の要領を語らんが  
爲めなり。最新の統計、最新の事實、最  
新の仕組を中等教育に向つて、大に告ぐ  
る處あらんが爲めなり。亞細亞——支那  
——朝鮮及南洋は本書の骨髓なり特色な  
り來つて此寧馨兒を見よ、日本新地理の  
良兄弟姉妹たる此萬國新地理を見よ。今  
本書の總目を掲げて購客の便覽に備ふ。

## 次 目

●第一編 亞細亞總論 ▲亞細亞人文  
地理總論 ▲亞細亞地文地理總論 ▲亞  
細亞各邦地方誌 ●第二編 歐羅巴總  
論 ▲歐羅巴人文地理 ▲歐羅巴地文地  
理 ▲歐羅巴各邦地方誌 ●第三編 北  
亞米利加總論 ▲第四編 亞米利加總  
論 ●第五編 亞弗利加總論 ●第六編  
濠太刺西亞總論

館文博 元兌發

目丁三町本區橋本市京東



館文博 元兌發

目丁三町本區橋本市京東



4-55-54

侯爵黒田長成君題字  
子爵長岡護美君題詩  
男爵末松謙澄君序文  
乙羽生著

賜天覽

# 千山萬水

全一冊洋装  
袖珍頗美本  
總クローリス

九版 ▲正價金五拾錢 郵稅拾錢

本書は辱くも 九重の御覽を賜ふの榮を得、發售以來忽ち拾版を重ねるの運に會したれば、今般更に大增訂を企て四國中 國九州一帶の案内記六十四頁と其地風俗寫真三十二ヶ所とを加へ、且つ旅人智慧の板てふ新遊戯をも挿みて、初版以來紙數百五十餘頁を増加し、一層釘装を美にしたらば、之に優れる旅行案内はあらざるべし。

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

侯爵伊藤博文君題字  
伯爵土方久元君題詩  
乙羽生著

蒙天覽

# 續千山萬水

全一冊洋装  
總クローリス  
袖珍頗美本

五版 ▲正價金五拾錢 郵稅拾錢

東洋古來第一の美本として、内外の喝采を博したる千山萬水は、其記する所の地、東北に止りしを、烟霞の癖は更に著者を して東海畿内中國西南より北陸諸州も跋 涉せしめぬ、是に於てか續編あり、之を 初編に比するに、經し所廣きに從ふて寫 眞に上れる絶景亦頗る多し。装幀の美麗 亦優るとも劣ることなし。

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

2-55-54

侯爵黒田長成君題字  
子爵長岡護美君題詩  
男爵末松謙澄君序文  
乙羽生著

賜天覽  
**千山萬水**  
全一冊洋装  
袖珍頗美本  
總クロース

九版 ▲正價金五拾錢 郵税拾錢

本書は辱くも九重の御覽を賜ふの榮を得、發售以來忽ち拾版を重ねるの運に會したれば、今般更に大增訂を企て四國中  
國九州一帶の案内記六十四頁と其地風俗寫眞三十二ヶ所とを加へ、且つ旅人智慧の板てふ新遊戯をも挿みて、初版以來紙數百五十餘頁を増加し、一層釘装を美にしたれば、之に優れる旅行案内はあらざるべし。

東京日本橋區本町三丁目  
發兌元 博文館

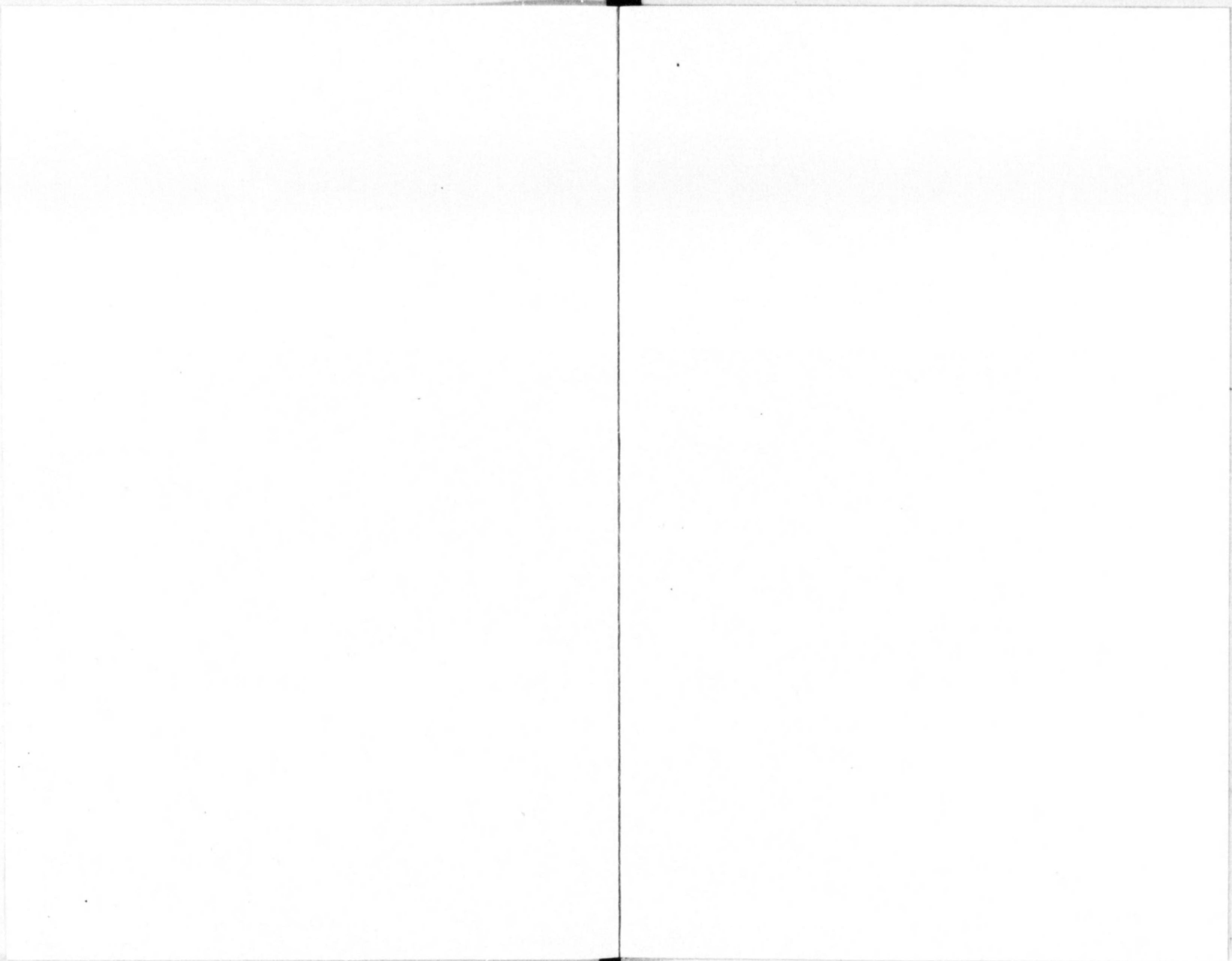
侯爵伊藤博文君題字  
伯爵土方久元君題詩  
乙羽生著

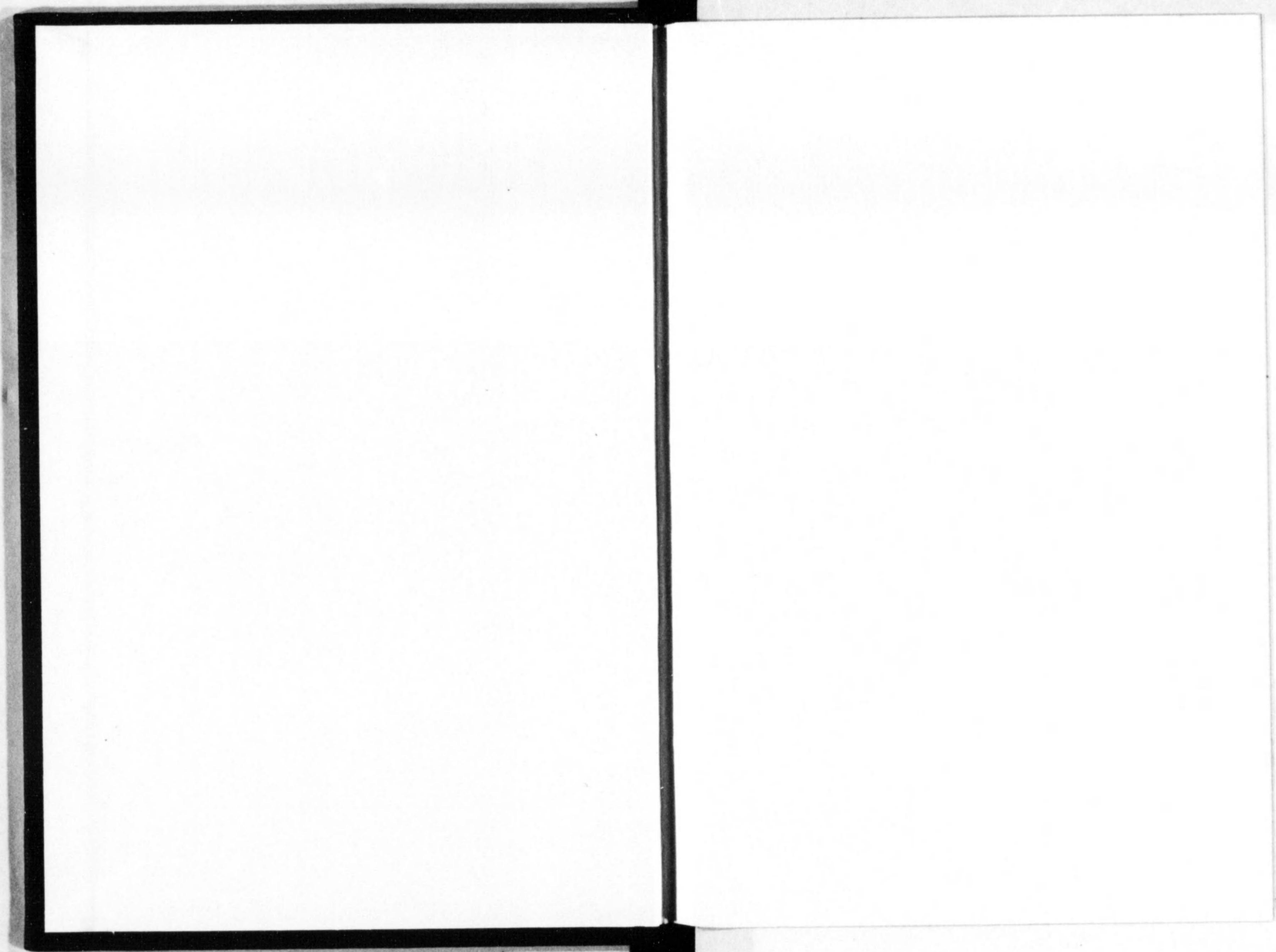
蒙天覽  
**續千山萬水**  
全一冊洋装  
總クロース  
袖珍頗美本

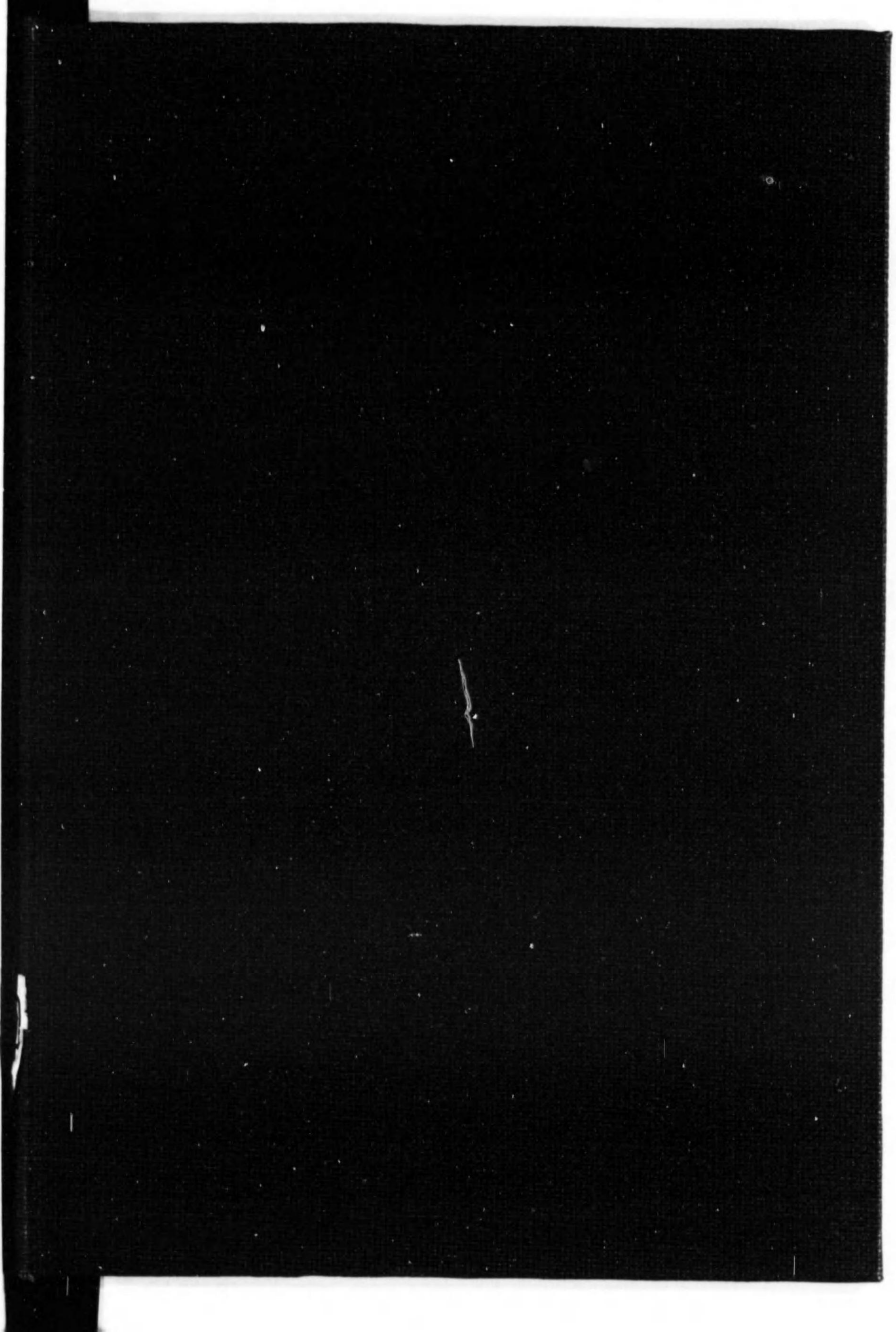
五版 ▲正價金五拾錢 郵税拾錢

東洋古來第一の美本として、内外の喝采を博したる千山萬水は、其記する所の地、東北に止りしを、烟霞の癖は更に著者をして東海畿内中國西南より北陸諸州も跋渉せしめぬ、是に於てか續編あり、之を初編に比するに、經し所廣きに從ふて寫眞に上れる絶景亦頗る多し。装幀の美麗亦優るとも劣ることなし。

東京日本橋區本町三丁目  
發兌元 博文館









292.209  
N262e

026481-000-3

292.209-N262e

燕山楚水(支那漫遊)

内藤 虎次郎/著

M33

ADD-0141





